

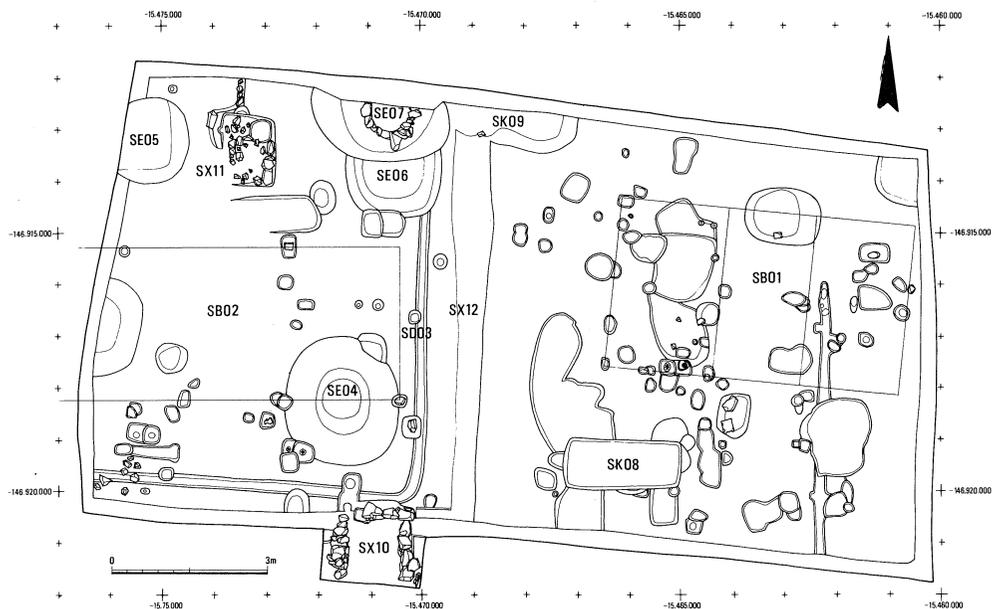
Ⅱ 検出遺構

東、西発掘区にわけて主な検出遺構の概要を記述する。

東発掘区の検出遺構 建物2棟以上、溝2条、井戸4基、石組堅穴2基、土塋を検出した。建物はいずれも掘立柱建物である。SB01は桁行3間、梁行2間の東西棟に復原できる。SB02はいずれの柱穴にも柱を据えるための偏平な石を入れる。SB03は雨落溝あるいは排水溝などの建物に伴う遺構かと考えられる。

井戸SE04は径約2.4mの円形掘方を持ち、深さは約1.9mである。井戸枠は残存しない。「平城宮Ⅲ」に相当する土師器、須恵器が出土した。今回検出した遺構の中で奈良時代まで遡るものはこのSE04のみである。井戸SE05は径約1.7m、深さ2.6mの円形掘方をもつもの。井戸枠は残存しない。この井戸からは多量の瓦器椀・皿、土師皿が出土し、他に若干の瓦、羽釜、青白磁片などが出土した。これらの遺物は、SE05が使用されなくなり半ば埋った時期に一括投入されたものである。井戸SE06は径約1.8m、深さ約2.2mの円形掘方をもつもの。掘方の切合関係からSE07より古いことがわかる。井戸SE07は径約2.7m、深さ2.1mの不整形な円形掘方の中に、内法0.7mの円形石組の井戸枠をもつもの。出土土器からみて、15世紀後半頃に廃絶したものと考えられる。

石組堅穴SX10は東西約1.5m、南北1.6m以上の長方形掘方の中に自然石を組むもの。石組



第 2 図 東発掘区検出遺構平面図 (1/150)

は下から3段分が遺存している。貯蔵穴、水溜、便所などの用途が考えられるが、性格は不明である。出土土器からみて16世紀頃に廃絶したものであろう。SX11もほぼ同様の性格をもつものと思われるが、大半の石が抜き取られている。

土壌SK08は東西約2.2m、南北約0.9m、深さ約0.4mの長方形掘方をもつもの。16世紀末から17世紀にかけてのものと考えられる土器とともに若干の木製品が出土した。下駄、板材、曲物などである。今回の調査ではSK08以下にもいくつかの土壌を検出したが、そのいずれもが円形掘方をもつもので、埋土が混乱し一時期に埋められた様子が窺える点で一致している。このような土壌は廃棄物を投入するためのものであろうが、SK08は長方形掘方をもつことと、内部からほぼ完形の土器が出土していることから他の土壌とは性格を異にするものと考えられる。

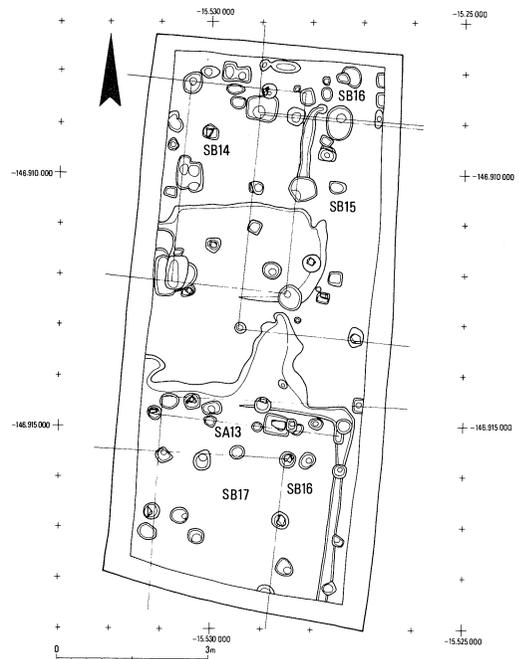
発掘区中央で南北にのびる地山の段差SX12を検出した。これは、調査地付近が春日野台地から盆地内部へ移行する緩斜面であるため、何段かにわけて平坦な宅地を造成したおりのものであろう。切合関係からSX12より新しいことがわかる土壌SK09の出土土器が13世紀前半頃のものであることから、造成はそれ以前と考えられる。

西発掘区の検出遺構 塀一条、建物6棟、土壌を検出した。塀SA13は南北方向の塀。4間分を検出した。柱間は西から1.08m—0.84m—0.84mと不揃いである。建物はいずれも掘立柱建物である。建物SB14は桁行が2.2m等間、梁行が2.1m等間である。建物SB15は桁行1間以上、梁行2間の東西棟。切合関係からSB16より古いことがわかる。建物SB16は西側柱かと思われる2柱穴のみを検出した。柱間は1.7m。建物16は桁行2間以上、梁行1間以上の東西棟。建物SB17は桁行1間以上、梁行2間以上の東西棟。柱間は、北側柱列の東から1間目が1.7m、妻柱列の北から1間目が1.3mである。

堆積土層の観察によれば、付近の家屋が火災に遭った後の整地によるものかと思われる厚さ約20cmの焼土の堆積が、発掘区一面にみられる。文献史料によれば、近世奈良町の大火として享保2年(1717)、宝暦12年(1762)の火災が知られるが、いずれも元興寺付近までは及んでおらず、さらに検討を要しよう。

注1) 奈良国立文化財研究所『平城宮跡発掘調査報告Ⅱ～Ⅸ』に準拠する。

注2) 木村博一他『奈良市災害編年史』奈良市 1978



第3図 西発掘区検出遺構平面図(1/150)

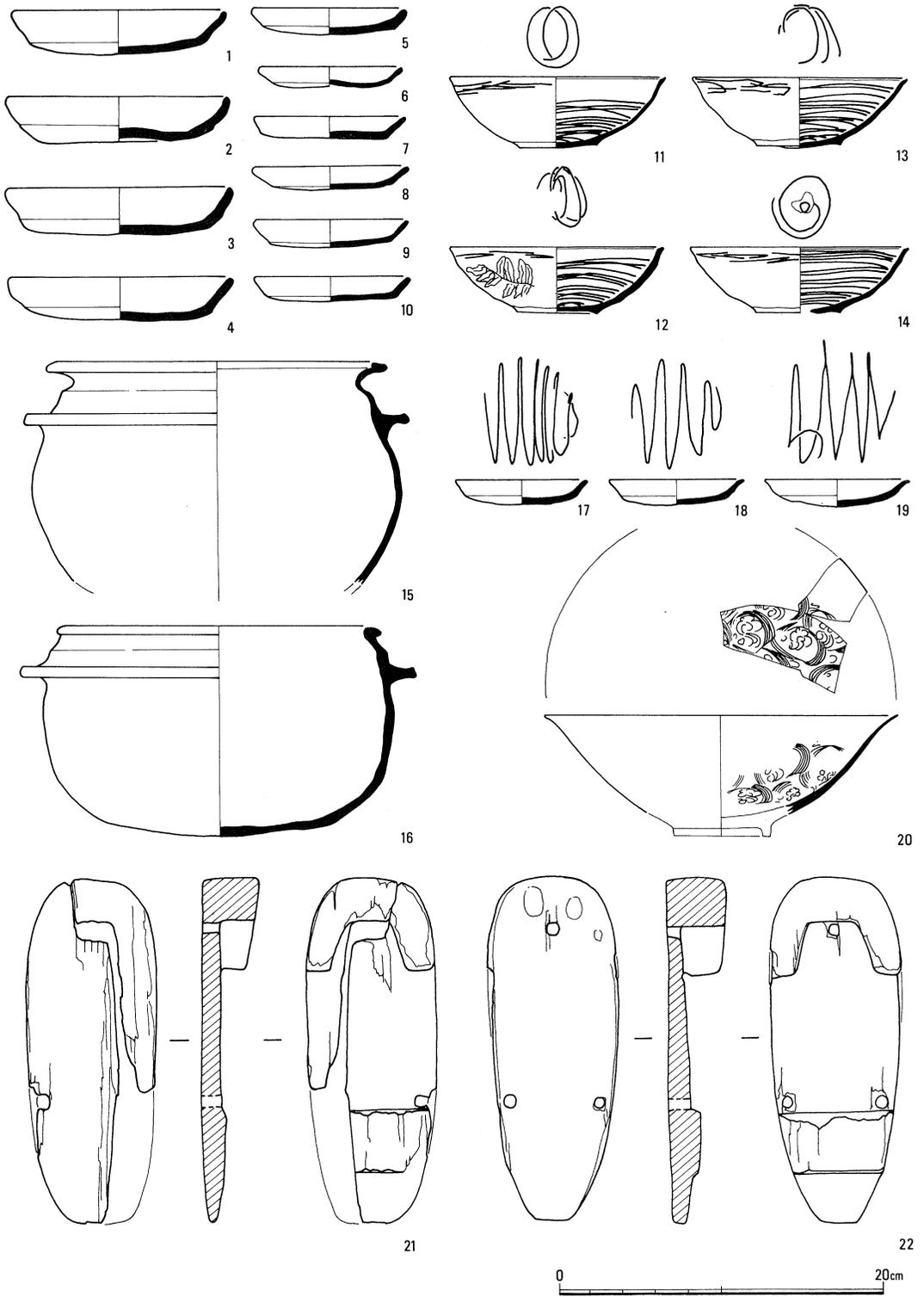
Ⅲ 出土遺物

今回の調査では両発掘区を通じ、奈良時代から江戸時代にわたる多量の遺物が出土した。大半が土器類であるが、少量の瓦、木製品なども出土している。ここでは井戸SE05出土土器と、土壙SK08出土木製品、唯一の奈良時代の遺構である井戸SE04出土土器について述べる。

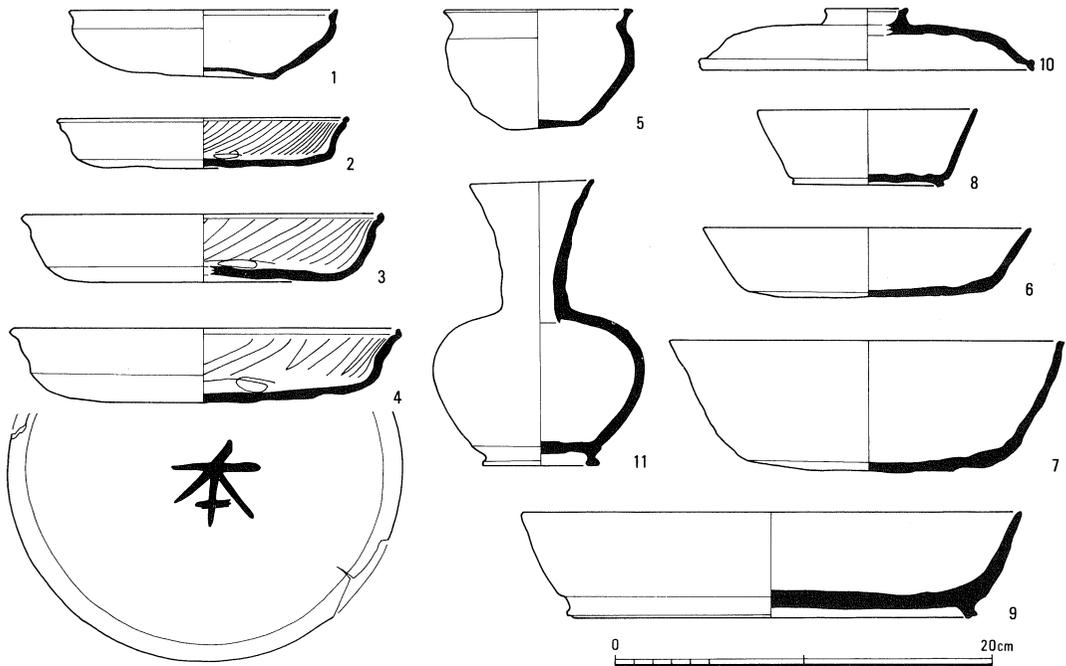
SE05の出土土器が一括投入されたものであることは先に述べた。この井戸からの土器の出土量は多く、ほぼ完全に復原できたものは土師器皿で126点、瓦器碗で45点である。1～10は土師器皿である。すべて内面と外面上半を強くよこなでし、軽い稜をつけるもので、大きさにより口径14cm前後、高さ3cm前後のもの(1～4)と、口径9cm前後、高さ1cm前後のもの(5～10)に分類できる。15・16は土師器羽釜である。口縁部を外反させた後、口縁端部を内折させるもの(15)と、口縁端部を把厚させ外側へ折り返しているもの(16)がある。11～14は瓦器碗である。口縁端部に一条の沈線をめぐらせる。内面と口縁部外面によこなでを施し、外面に指おさえの痕跡を残す。内面には密な、底部内面には螺旋状のみがきを施す。高台は断面三角形のものが貼り付けられるが、不安定である。12は調整後外面にシダ類の植物の葉を押しつけ文様としている。14は焼成後底部に径0.4mの小孔を穿つ。17～19は瓦器皿である。いずれも内面と口縁部外面をつよくよこなでし、底部内面にジグザグ状のみがきを施す。20は青白磁碗である。ゆるやかなS字状に立ち上る口縁部片のみが出土した。薄造りで、口縁端部は挽き放す。内面に劃花文を配す。磁胎は白色で、全体に青味がかかった透明釉が施され、表面に細い貫入がみられる。中国景德鎮窯系の製品であろう。以上の土器の年代は、青白磁碗を除き13世紀前半に求められよう。

土壙SK08からは土師器皿、土師器塩壺、施釉陶器碗が出土している。塩壺は湊焼系、碗は美濃焼系の製品かと思われるものである。いずれもその年代は16世紀末から17世紀初頭に求められよう。また木製品として下駄、曲物、板材が出土した。曲物、板材はいずれも断片である。全体の形がわかるものとして下駄(21・22)がある。全長はともに21.4cm、幅は21が8.1cm、22が7.8cmである。前幅に比べ後幅がやや狭い。台に3箇所の小孔を穿ち鼻緒孔としている。台下面には2箇所歯をつける。前歯は台に沿って逆U字形を呈し、鑿で切欠かれたもの、後歯は鋸で引き出された直線的なものである。後歯の磨滅が著しい。

井戸SE04からはよくまとまった土師器、須恵器が出土した。1は土師器碗C。a₀手法で調整する。2～4は土師器皿A。2はa₀手法、3・4はb₀手法で調整し、いずれも内面に螺旋暗文+斜放射暗文を施す。4は底部外面に墨書がある。5は土師器壺B。口縁部のみをヨコナデする。まじないをするための土器であろうか。6・7は須恵器杯A。8は須恵器杯B。浅いものと、口径が大きく深いものがある。10は須恵器杯蓋。つまみが特殊である。佐波理器を模したものであろう。9は須恵器皿B。高台端面は内傾する。11は須恵器壺。高台をつける。



第 4 图 SE05・SK08出土遺物 (1/4)



第 5 図 SE04 出土土器 (1/4)

IV ま と め

今回の調査は小範囲のものであったとはいえ、いくつかの成果をあげることができた。ここでは、検出した遺構、遺物の各時代における変遷を概観しまとめとする。

今回の調査で最も古い遺構は井戸SE04である。SE04は平城京の条坊施行、宅地化に伴って掘られた井戸であろう。その後平安時代に属する遺構はなく、平城京廃絶後の付近の衰退を窺わせる。鎌倉時代に属するものでは井戸SE05にみられたごとく多量の遺物と遺構を検出した。このSE05からSE06、SE07と15世紀後半まで続く井戸の変遷は活発な土地利用を示すものであろう。この時期の建物遺構を検出したが、いずれも掘立柱建物であり、2間×3間程度の小規模なものである。ただ、建物の上部構造の究明、これに続く近世の町並への移行の実態など今後の資料の増加を待って検討せねばならない課題も多い。検出遺構中、最も新しいと考えられるものは土壌SK08など16世紀末から17世紀初頭頃に廃絶したと考えられるものであり、それ以降の遺構は近、現代の攪乱などによりその痕跡をとどめない。

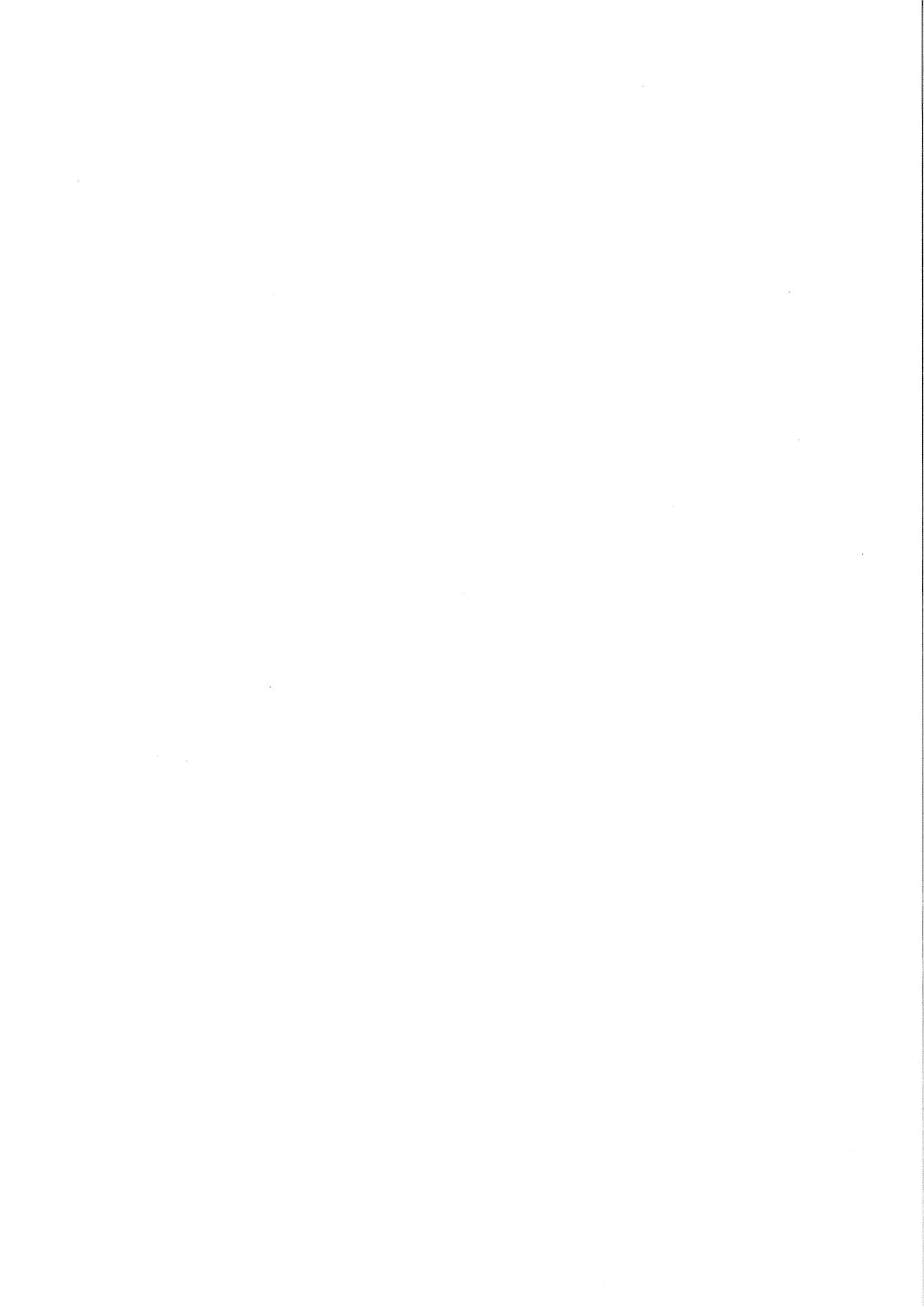
以上のような成果により、中、近世奈良町の様相の一端を窺うことができたと考えるが、何分、旧奈良市街区の調査とりわけ中、近世を対象とした調査例が少ない現状では比較検討資料に乏しく、その意味から今後の調査に期するところは大きい。



1. 東発掘区全景（東から）

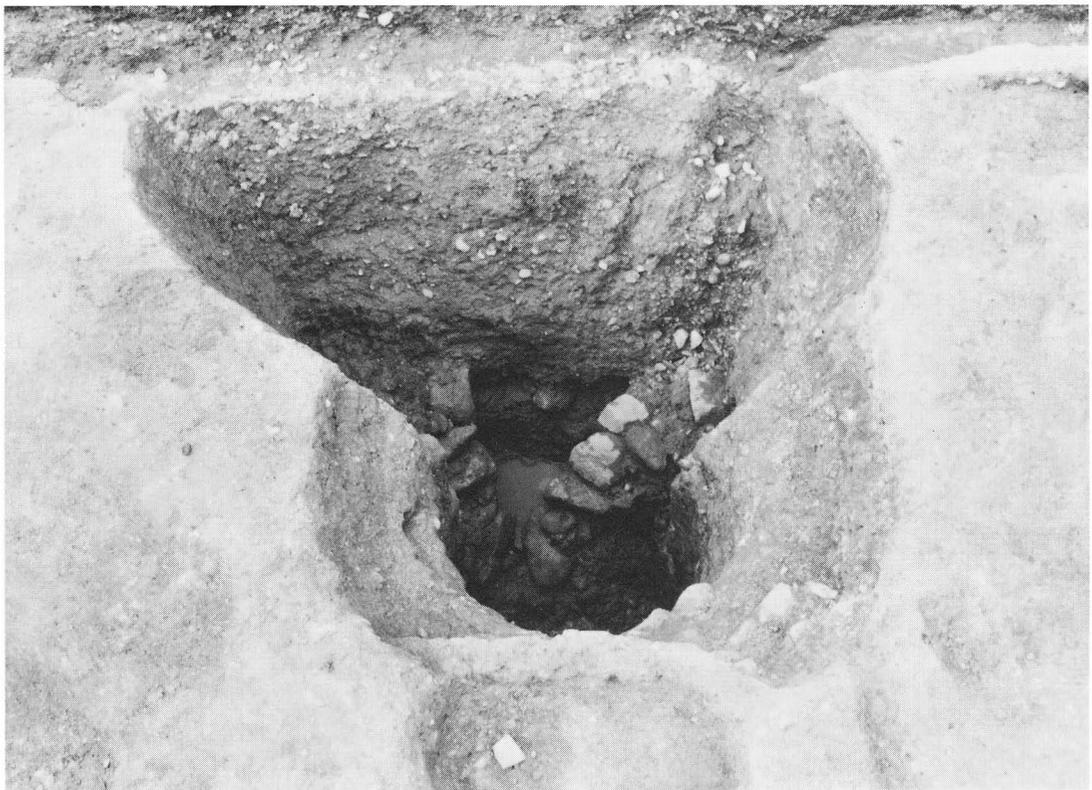


2. SX12（北から）

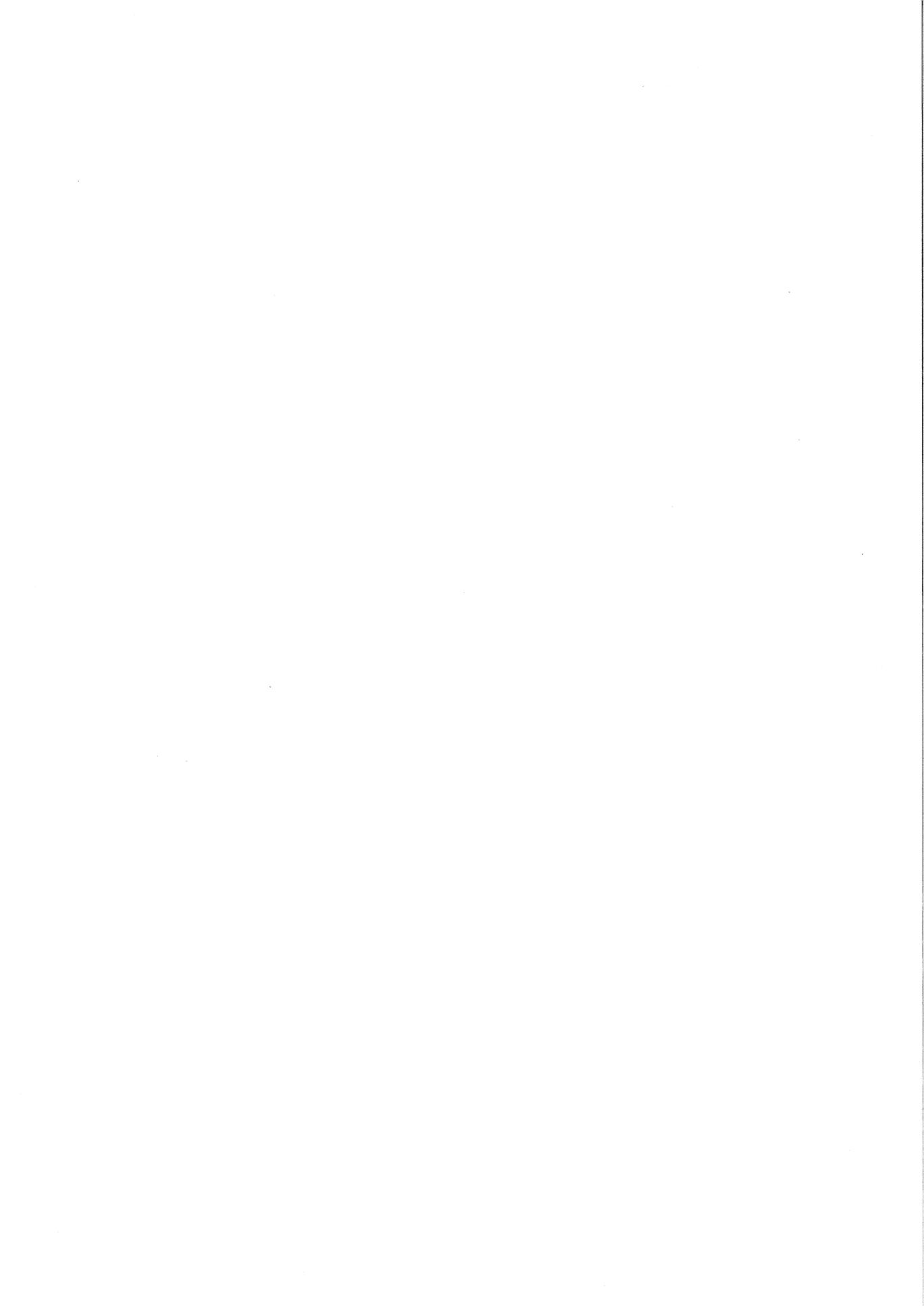




1. SE05 (東から)



2. SE06、07 (南から)

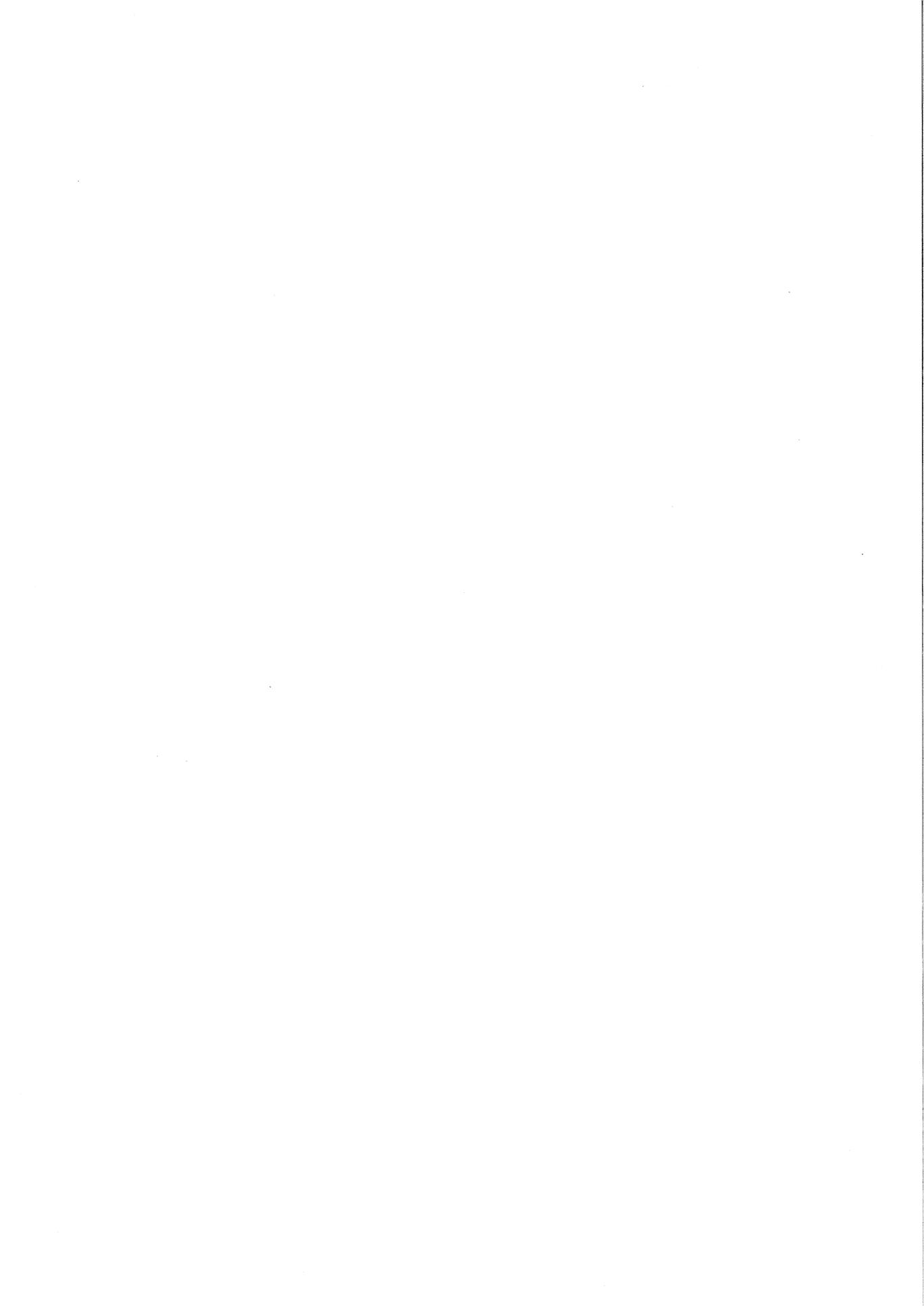




1. SX 10 (北から)



2. SX 11 (南から)





1. SK08木器出土状態



2. 西発掘区全景（南から）



平城京左京(外京)五条五坊坊間路

発掘調査報告

例 言

1. 本書は、奈良市西木辻町67番地において実施した奈良市立春日中学校の校舎新築に伴う事前発掘調査の報告書である。
1. 発掘調査は昭和56年9月10日から同年10月1日にかけて実施した。
1. 発掘調査は、奈良市教育委員会社会教育部文化財課が行い、現地を森下恵介が担当した。
1. 発掘調査にあたっては調査補助員として河内一浩（花園大学学生）、服部芳人（奈良大学学生）両君の参加、助力を得るとともに、本書の作成に伴う図面作成については平田博幸君（奈良大学学生）の協力を得た。
1. 本書の執筆および編集は森下恵介が行った。

目 次

I はじめに	107
II 検出遺構	108
III 出土遺物	109
IV まとめ	111

I はじめに

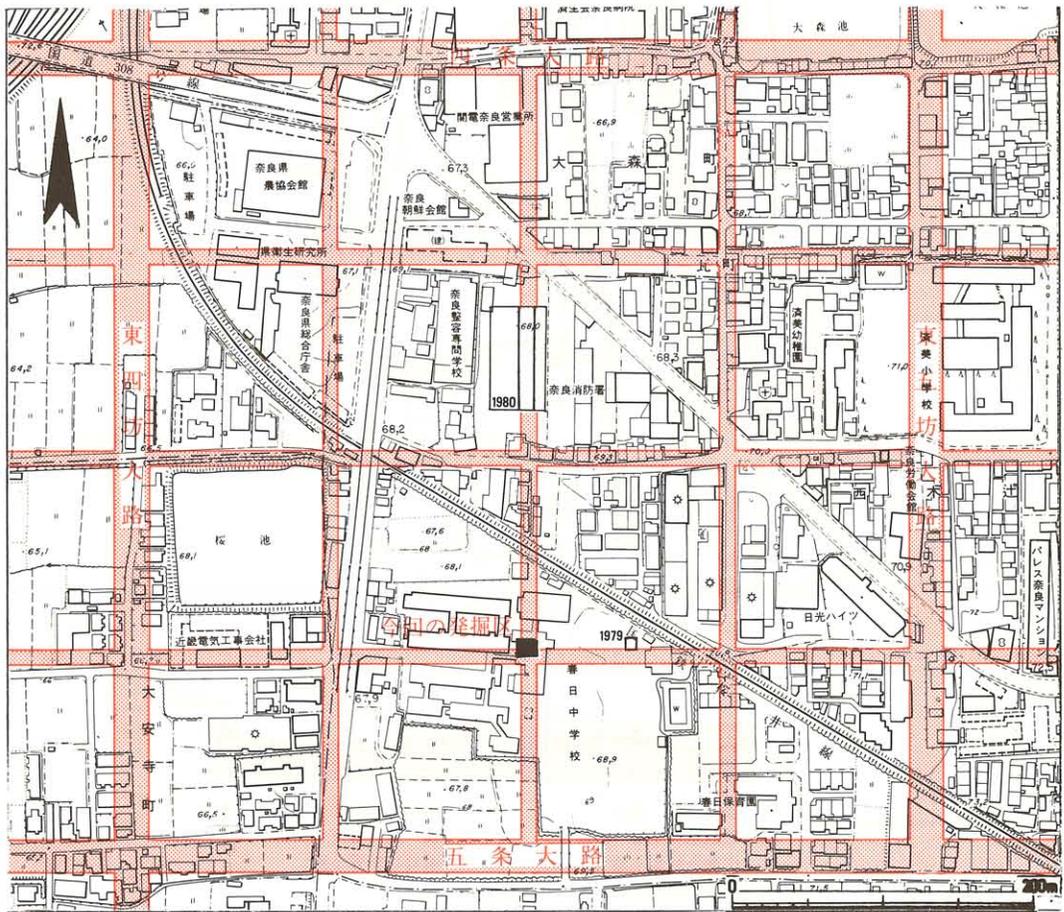
今回の調査は、奈良市立春日中学校の校舎新築の事前発掘調査として行ったものである。

調査地は、奈良市西木辻町67番地、春日中学校の旧校舎跡地であり、平城京の条坊では左京（外京）五条五坊の東五坊坊間路および、五坪、六坪間の小路交差点に相当する。また、調査地の周辺における発掘調査としては、昭和54年に同じく春日中学校の校内において行った調査と、昭和55年に行った七・十坪の調査がある。^{注1)}

調査にあたっては、七・十坪の調査において検出した東五坊坊間路と五・六坪間との小路交差点に発掘区（210㎡）を設定した。調査は昭和56年9月10日に着手し、10月1日に終了した。^{注2)}

注1) 奈良市教育委員会「平城京（外京）五条五坊十一・十二坪発掘調査報告」1980

注2) 奈良市教育委員会『平城京（外京）五条五坊七・十坪発掘調査概要報告』1982

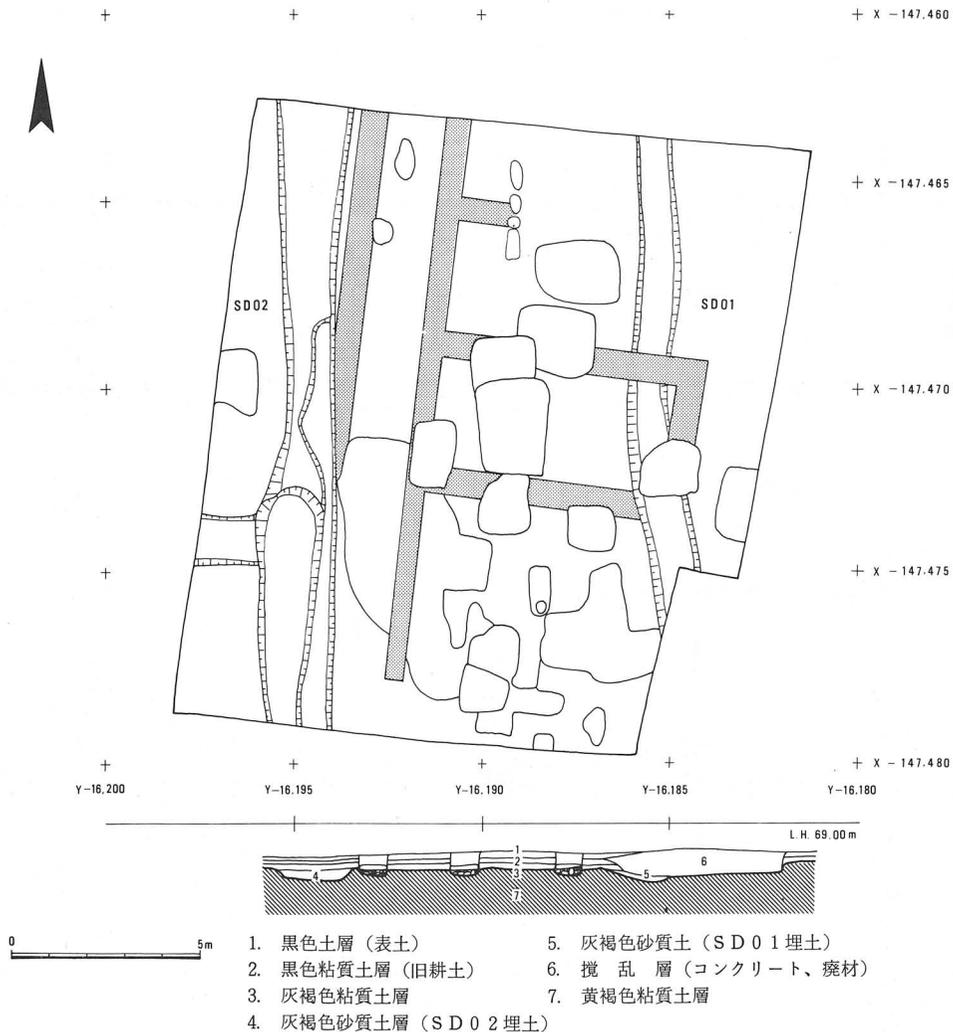


第 1 図 発掘区の位置と周辺の条坊 (1/5000)

Ⅱ 検出遺構

発掘区の堆積土層は、表土、旧耕土の下、約20cmの厚さで灰褐色粘質土層があり、地表面より約50cmで、地山である黄褐色粘質土に至る。このため、遺構面はかなりの削平を受けており、遺構の検出は、黄褐色粘質土上面において行ったが、校舎基礎や近現代の捨穴等によって破壊されている部分が多い。

検出した遺構は、東五坊坊間路の東側溝と考えられる溝SD01と西側溝と考えられる溝SD02の溝2条であり、東西方向の五坪・六坪間の小路側溝は検出できなかった。



第 2 図 検出遺構平面・堆積土層図 (1/200)

SD01 南北方向の素掘り溝（幅80cm～120cm、深さ約20cm）である。調査区南寄りでは削平が著しく、わずかにその痕跡を残すにすぎない。

SD02 SD01の西側約9mで検出した南北方向の素掘り溝（幅160cm～180cm、深さ25cm）である。SD01よりも遺存状況は良く、南寄り、やや深く掘られており、埋土よりは、土器類が出土している。

なおSD02の西側において、SD02とつながる東西方向の溝を検出したが、位置的には東西方向の小路側溝と考えることはできない。

Ⅲ 出土遺物

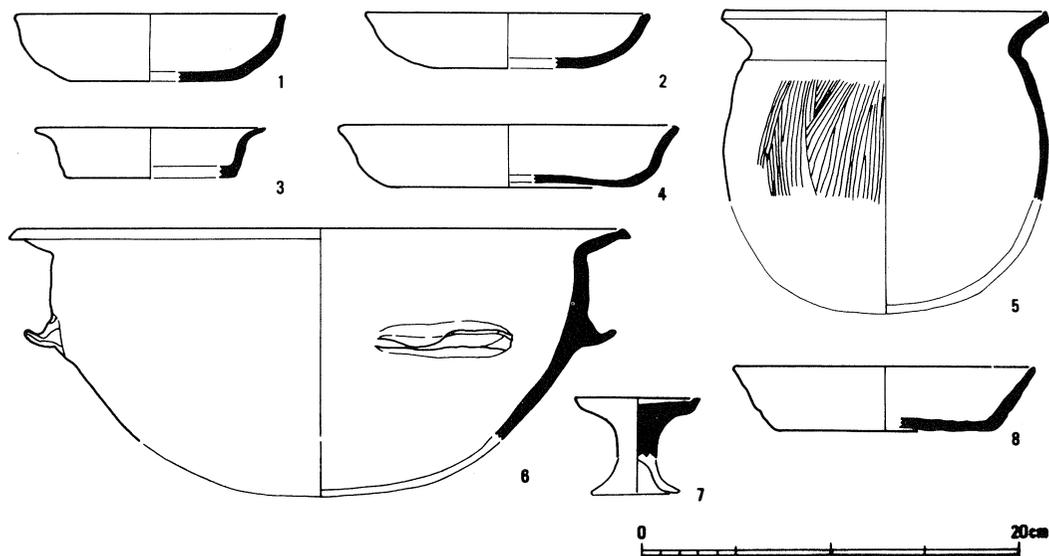
東五坊間路西側溝と考えられるSD02および東側溝と考えられるSD01より土器類が出土した。しかしながらSD01より出土した土器について図示し得るのは、わずかに1点（第4図、13）にすぎず、今回の調査で出土した土器類の大半はSD02より出土したものである。

土師器（第3図）

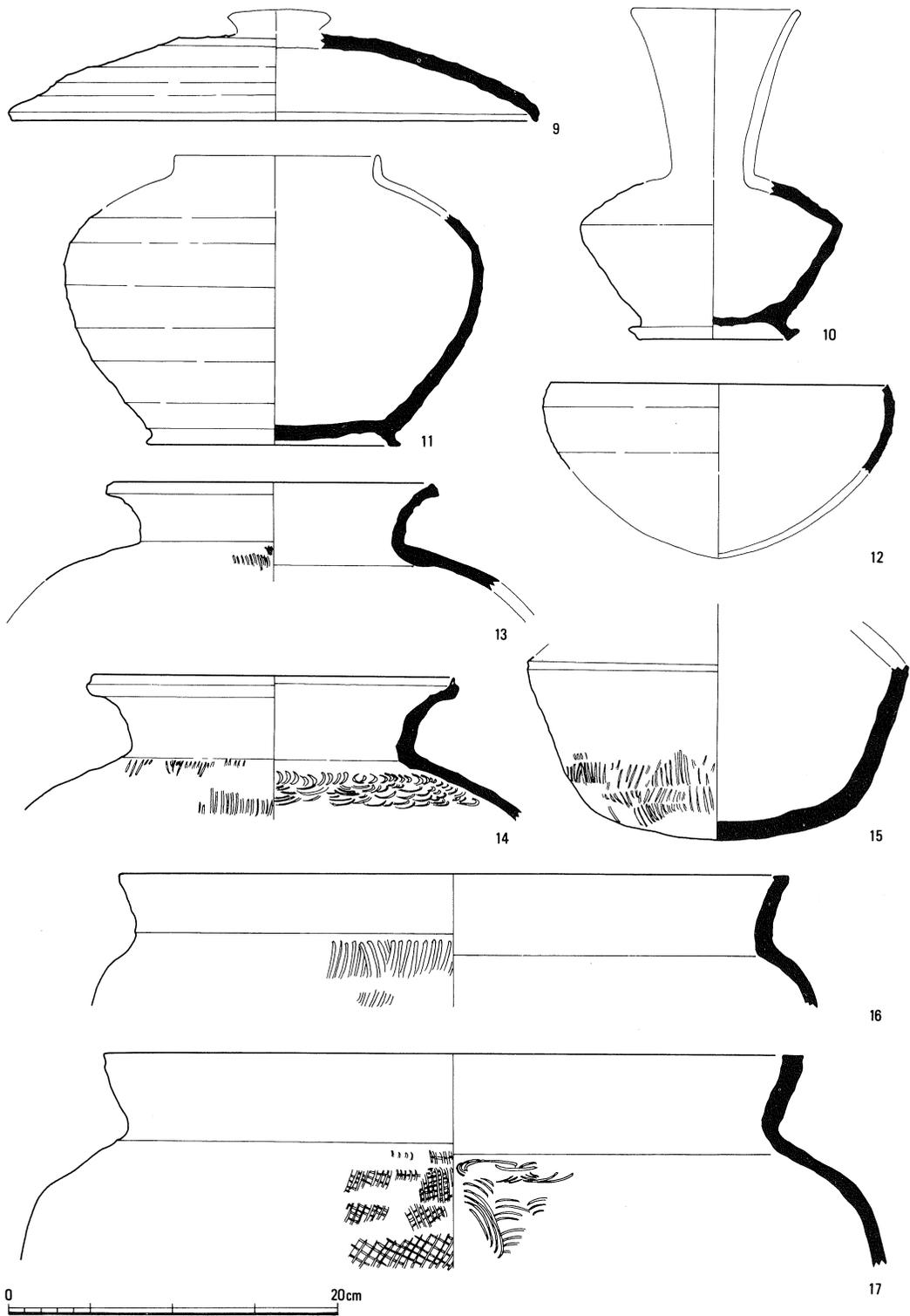
土師器には、杯A（1・2）、皿A（4）、皿X（3）、鍋B（6）、甕A（5）、ミニチュア高杯（7）がある。杯、皿類については、遺存状態が悪く、調整手法等は観察し難い。

須恵器（第3図8、第4図）

須恵器には杯A（8）、蓋（9）、壺A（11）、長頸壺（10）、鉢A（12）、甕A（13・14）、甕（16・17）、平瓶（15）があり、大型の製品が比較的多いのが目だつ。



第 3 図 SD02出土土器 (1/4)



第4图 SD01出土須恵器(13)、SD02出土須恵器(9~12、14~17)(1/4)

IV ま と め

今回の調査で検出した溝SD01、SD02がそれぞれ、東五坊坊間路の東側溝および西側溝に相当するであろうことは、先にも触れたが、今少し、詳細な検討を加え、まとめとしておきたい。

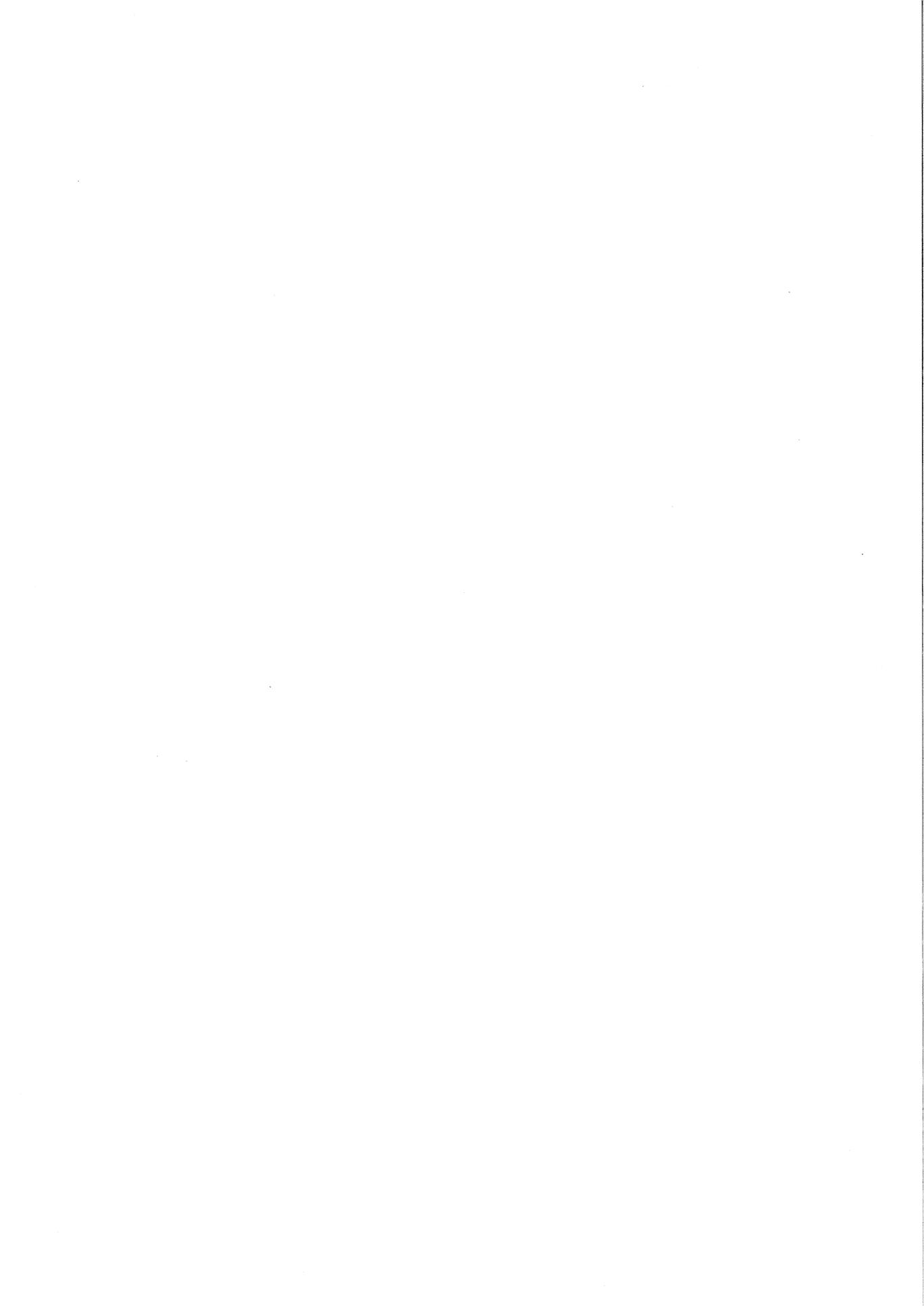
SD01、SD02の両溝心々間の距離は約9.0 m (30尺)を測ることができ、七、十坪間で検出した東五坊坊間路^{注1)}よりは若干広く、その心は、平城宮朱雀門心から国土方眼位を介して東へ、2396.11mの位置にある。しかしながら、平城京の造営方位は、朱雀大路で、国土方眼位に対して平均N 15' 41" Wの平均の振れをもつことが知られている。そこで、この朱雀大路の振れを採りこの修正を加えると、朱雀大路心と今回の調査で検出した東五坊坊間路の両者心々間の距離は、2389.349 mとなる。平城宮朱雀門心より東五坊坊間路心までの造営計画距離は、7200尺(4坊幅) + 900尺(2坪幅) = 8100尺であり、今回の調査の成果によって得られる造営の単位尺は、2389.349 m ÷ 8100尺 = 0.2949mといった数値になる。これまでの調査で判明している平城京の計画単位尺は、0.294 m ~ 0.296 mの範囲に収まり、このことから、0.2949mといった数値も妥当なものと考えられ、今回の調査で検出した溝SD01、SD02に画される部分は、東五坊坊間路として条坊計画上に設置された道路^{注2)}と考えられるのである。しかしながら、七・十坪間で検出している同じ東五坊坊間路と対比するならば、幅員等かなり相違点があり、問題点も残る。今後の調査例の増加による東西条坊の振れをも含めた外京の条坊についての検討作業を待ちたい。

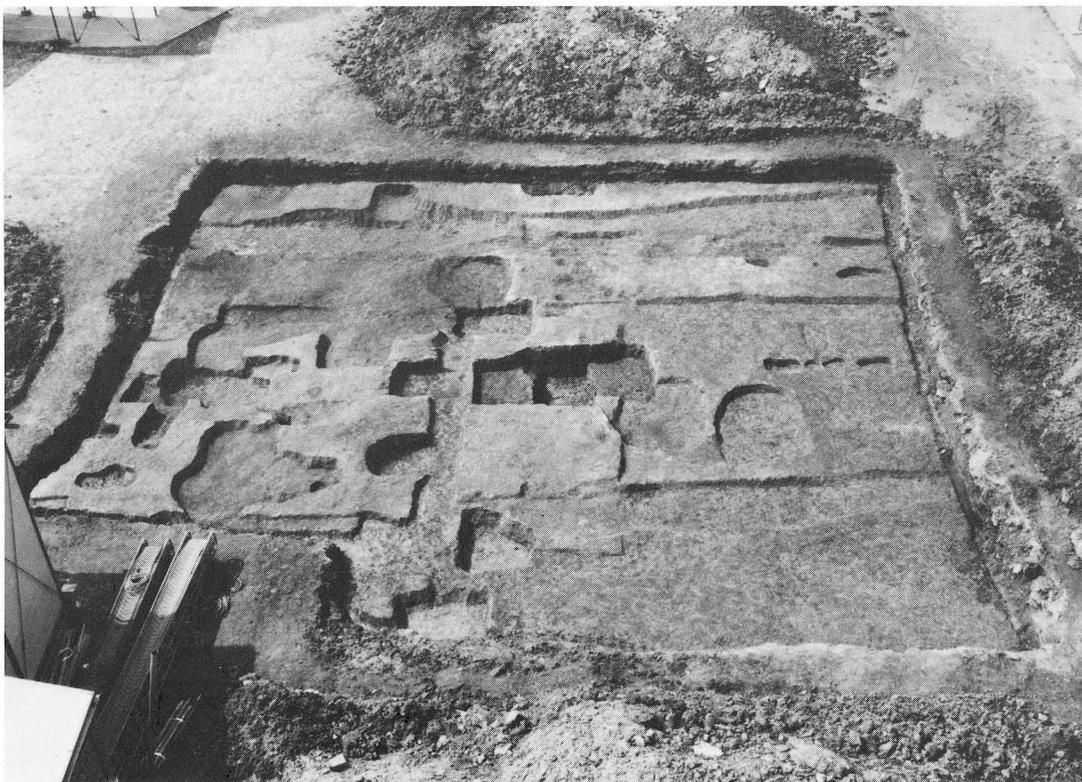
地点名	X	Y	備 考
平城宮朱雀門心	- 145,994.490	- 18,586.310	平城宮16次調査『平城宮発掘調査報告X』
東五坊坊間路心	- 147,279.000	- 16,189.130	『平城京左京(外京)五条五坊七・十坪発掘調査概要報告』
東五坊坊間路心	- 147,470.000	- 16,190.200	今回の調査

第 1 表 方位計測座標表

注1) 奈良市教育委員会『平城京(外京)五条五坊七・十坪発掘調査概要報告』1982

注2) 注1と同

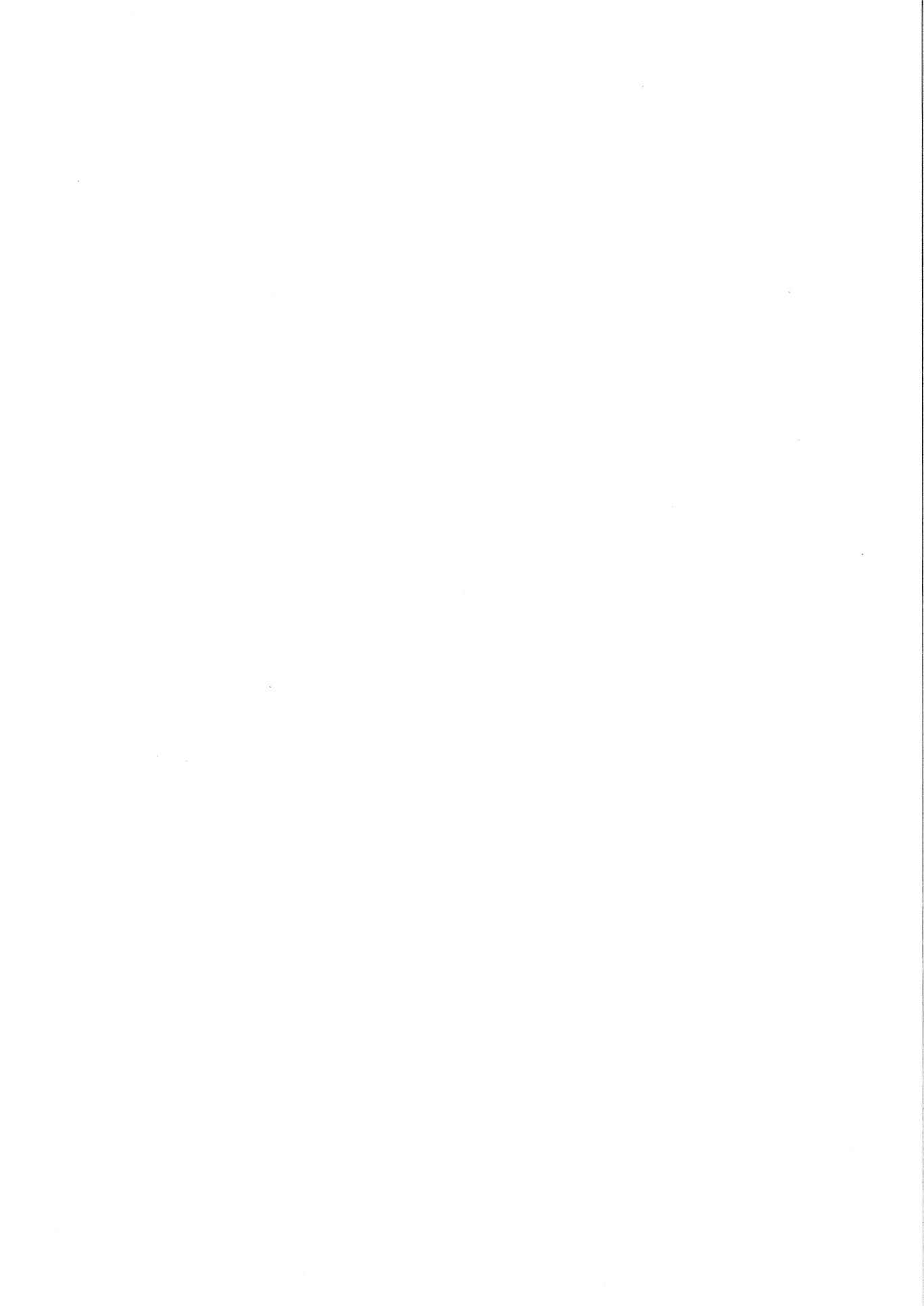




1. 発掘区全景（東から）



2. 発掘区全景（西から）



平城京右京二条四坊七坪

発掘調査報告

例 言

1. 本書は、奈良市青野町191番地の1において実施した、伏見公民館新設に伴う事前発掘調査の報告である。
1. 発掘調査は昭和56年8月20日から同年9月8日にかけて実施した。
1. 発掘調査は、奈良市教育委員会社会教育部文化財課が行い、現地を森下恵介が担当した。
1. 発掘調査にあたっては、調査補助員として河内一浩氏（花園大学学生）の助力を得るとともに本書の作成に伴う図面作成には、奈良俊哉氏（奈良大学学生）の協力を得た。
1. 本書の執筆ならびに編集は森下恵介が行った。

目 次

I はじめに	117
II 調査の内容	118
III 出土遺物	119

I はじめに

今回の調査は、奈良市が計画した奈良市立伏見公民館の建設に伴う事前の発掘調査として実施したものである。

調査地は西大寺の西南、奈良市青野町191番地の1の水田であり、平城京の条坊では、右京二条四坊七坪のうち西南寄りの一部に相当する。

周辺は、標高80m~90mを測る西ノ京丘陵の一画であり、調査地は、東北にのびる丘陵支尾根にはさまれた谷奥部に位置する。調査地の南側、伏見小学校が位置する尾根上は広く、その尾根上の水田、畑の区画には、二条条間路の条坊地割の痕跡をよく残しており、東側で丘陵が終る傾斜変換ラインに沿って南北に、西三坊大路の地割痕跡をとどめる水田が連なっている。



第 1 図 発掘区の位置と周辺の条坊 (1/5000)

調査地は、谷筋に直交する面積1341㎡の水田であるが、従来の平城京右京の調査例からみて、丘陵谷筋の宅地としての利用の可能性が低いと考えられたため、今回の調査では、水田化以前の原地形の確認に主眼をおき、谷地形に直交する発掘区（5m×28m）を設定した。しかしながら、谷地形底までの深さが深いため、発掘区東側のみ、地山面まで掘り下げた。調査は昭和56年8月20日に開始し、同年9月8日に終了した。

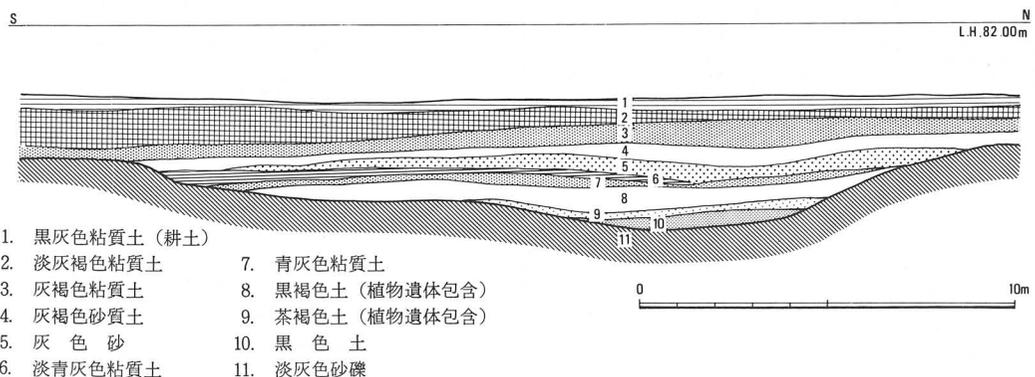
II 調査の内容

発掘区の土層の堆積状況は、現地表面より20～40cmが耕土であり、以下、淡灰褐色粘質土、灰褐色粘質土とつづき、発掘区の両端では、140～160cmで地山の黄褐色粘質土および、淡灰色砂礫層に至る。しかしながら、中央部にかけて地山は傾斜しており、灰褐色粘質土の下にさらに砂層および粘土層がみられ、最下層には、植物の腐植土からなる黒褐色土、および茶褐色土の堆積がみられた。発掘区の中央部では、現地表面より地山である谷地形の底までの深さは約3.5mを測る。この谷地形に堆積する土層のうち、第7層の青灰色粘質土および、第8層の黒灰色粘質土よりは、奈良時代に属する、須恵器、土師器の出土があった。また第3層である灰褐色粘質土上面、発掘区北寄りでは、この地形の水田化に関連すると思われる東西方向の木杭列を検出した。

これらのことから、今回の調査地の現状が谷地形の如く、奈良時代においては、より深い谷地形であり、平城京右京の造成にあたっては、条坊は設定するにしろ、その内部の利用としては、丘陵上を宅地とする他、谷地形については、大規模な改変は行わず、その利用度は少なかつたものと考えられる。おそらく、今回の調査地である右京二条四坊七坪においては、坪の南東部の丘陵上が宅地として利用されていたものと推察され、そこには、遺構の存在を裏づけるかの如く、二条条間路の地割が丘陵上の水田区画に細長くその痕跡を留めている。

注1) 奈良国立文化財研究所『平城京右京五条四坊三坪発掘調査概報』1977

同 奈良市教育委員会「平城京右京四条四坊五坪発掘調査報告」1981



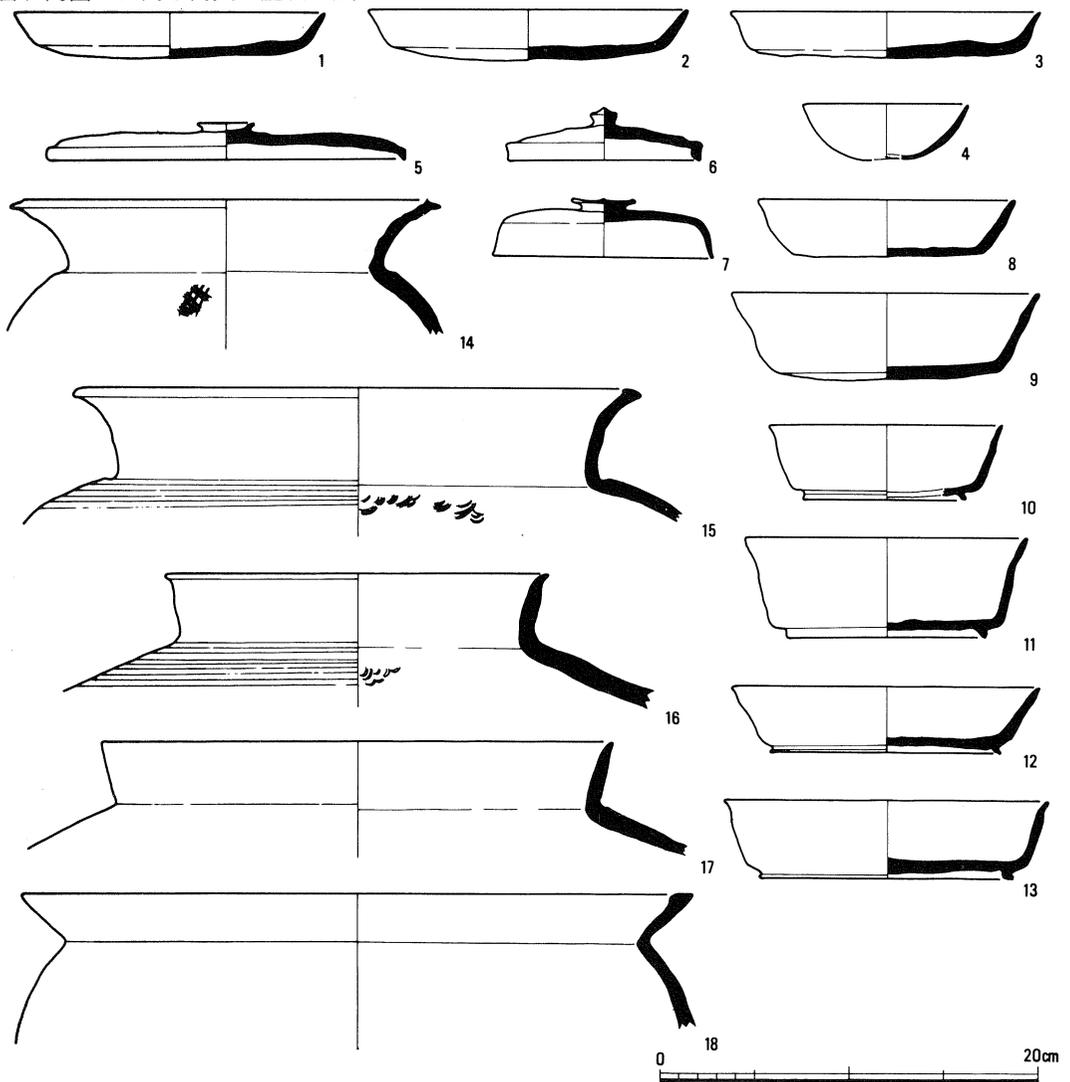
第2図 発掘区堆積土層図（1/200）

Ⅲ 出土遺物

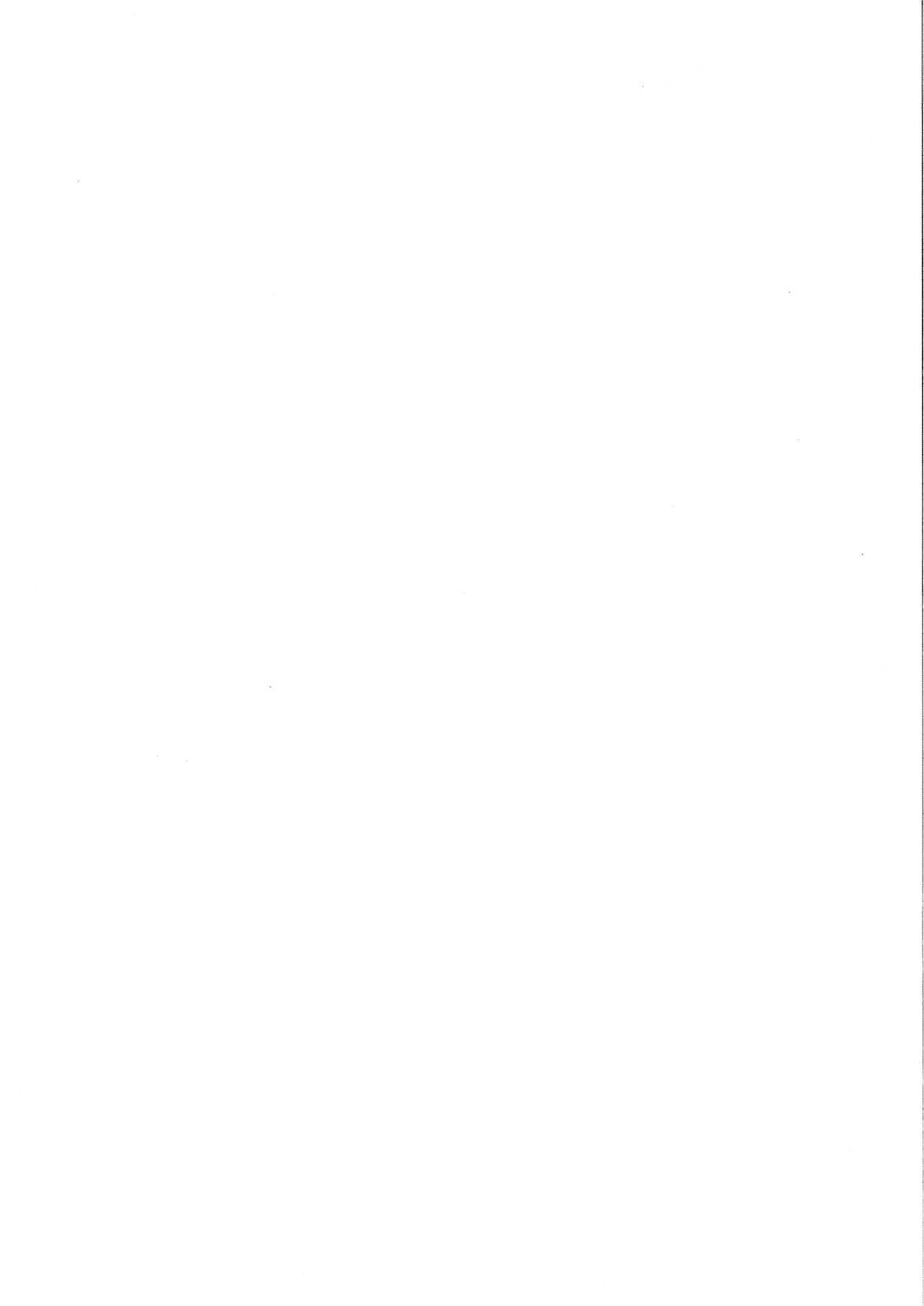
第7層の青灰色粘質土および、第8層の黒灰色粘質土より土師器・須恵器が出土した。

土師器には、皿A（1～3）と碗A（4）がある。いずれも、遺存状況が悪く、調整手法等は、観察し難い。

須恵器には、蓋（5～7）、杯A（8～9）、杯B（10～13）、甕A（14～16）甕C（18）、壺A（16・17）がある。14の体部外面には格子状のタタキを施しており、15・16の体部外面にはカキ目、内面には同心円文の圧痕が残る。

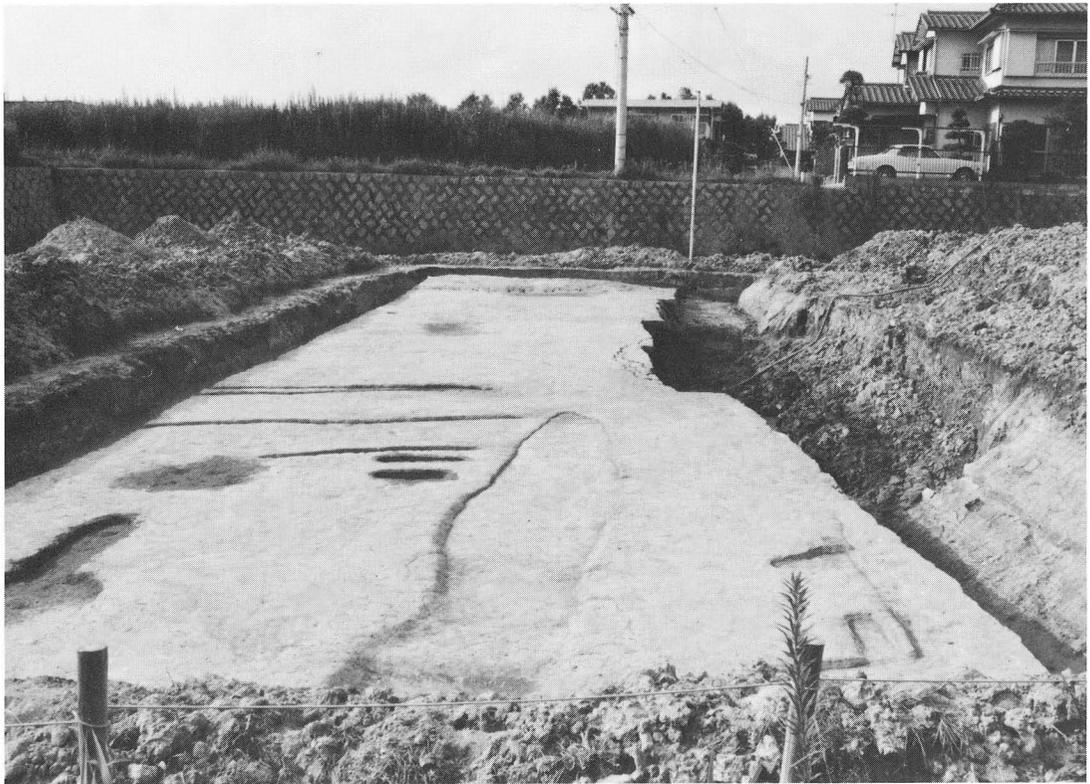


第 3 図 出土土器 (1/4)

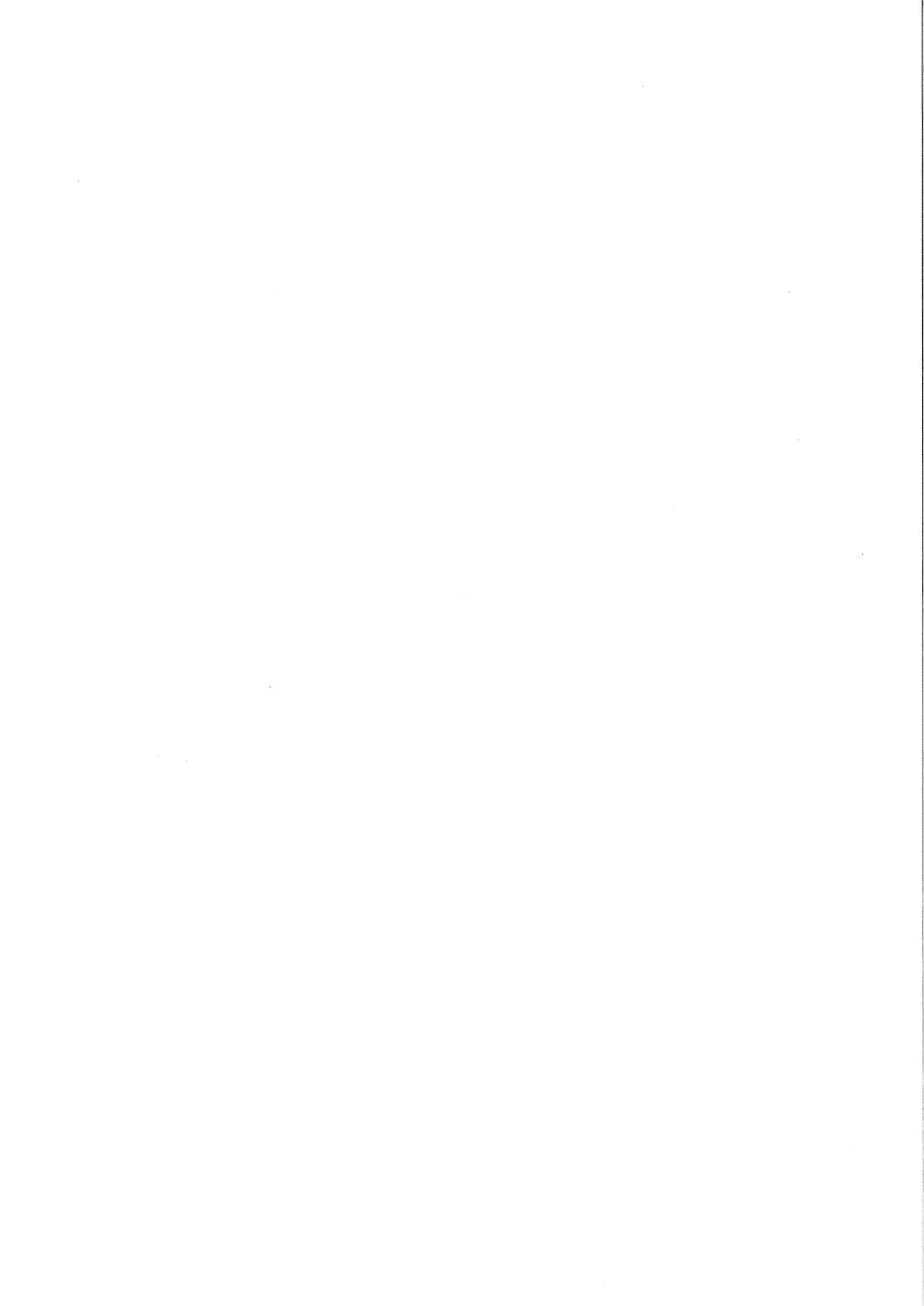




1. 発掘区全景（北から）



2. 発掘区全景（南から）



平城京右京四条二坊二坪

発掘調査報告

例 言

1. 本書は、奈良市四条大路5丁目6-1番地の奈良市立都跡小学校校舎増築に伴う事前発掘調査の報告である。
1. 発掘調査は昭和56年9月10日から同年10月6日にかけて実施した。
1. 発掘調査は、奈良市教育委員会社会教育部文化財課が実施し、篠原豊一が調査を担当した。なお調査補助員としては谷沢 仁、宍道年弘、長谷川一英（以上奈良大学）、河内一浩（花園大学）の各氏の参加があった。
1. 木簡の解読にあたっては、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部史料調査室長鬼頭清明氏より御教示を得た。記して感謝する。
1. 本書の執筆ならびに編集は篠原豊一が行なった。

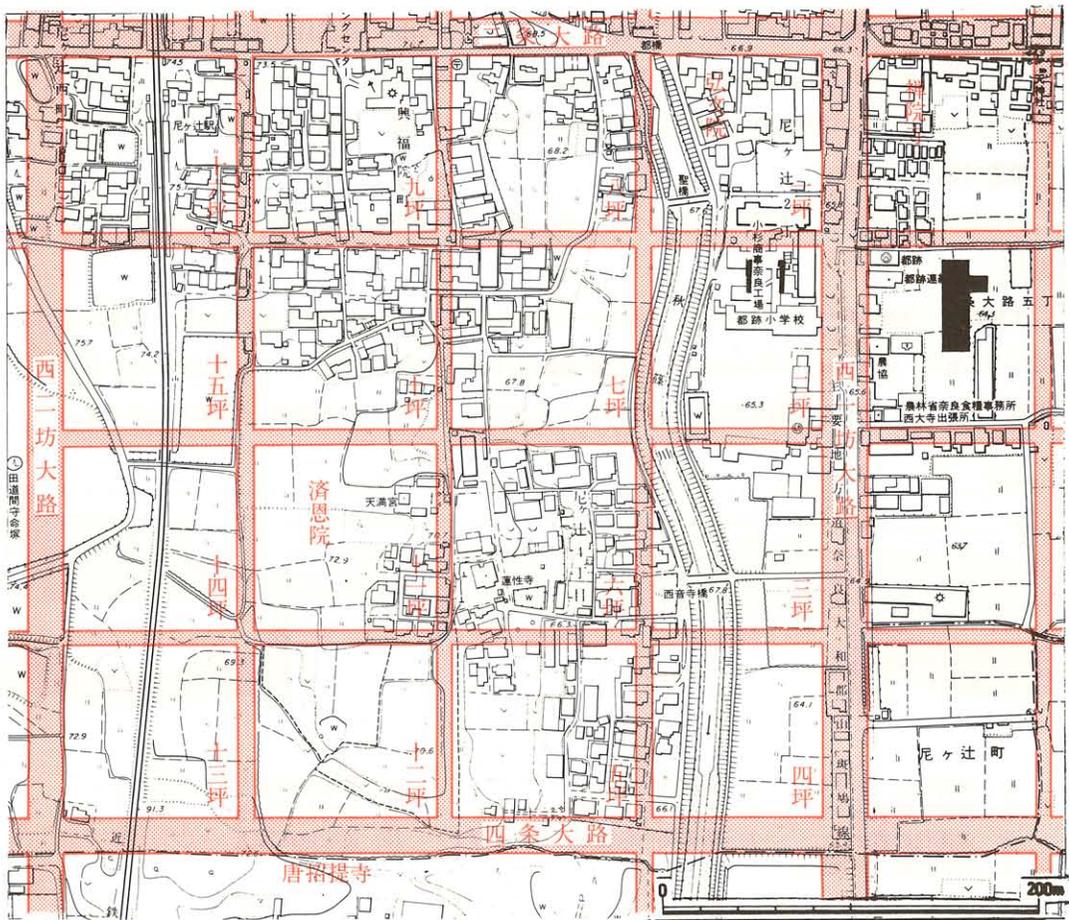
目 次

I はじめに	125
II 検出遺講	126
III 出土遺物	130
IV ま と め	132

I はじめに

今回の調査は、奈良市が計画した奈良市立都跡小学校校舎増築に伴う事前調査として実施したものである。調査地は、奈良市四条大路5丁目6-1番地で平城京の条坊では右京四条二坊二坪にあたる。調査地の東には東一坊大路、西には堀河である秋篠川が流れ、北の一坪に「弘文院」が推定される。

昭和55年度に奈良市教育委員会が行なった右京四条一坊十五坪の調査では中世の粘土取穴と考えられる土壌群によって奈良時代の遺構のほとんどは破壊され、一部の井戸、柱列を検出するにとどまっている。また秋篠川下流の西市の発掘調査でもこの土壌による破壊をうけていることがわかっている。調査は、東西3m、南北20mの発掘区を2箇所を設定して実施した。



第 1 図 発掘区の位置と周辺の条坊 (1/5000)

Ⅱ 検 出 遺 構

検出した遺構には、奈良時代の井戸2基と中世の土壇群がある。

発掘区の土層推積状態は地表面から約20cmにわたって黄褐色土層が盛土され、この層の下に旧校舎の基礎が残存している。以下順に、青灰色粘質土層、黄褐色砂質土層が推積し明黄色粘土層の地山に至る。奈良時代の遺構及び土壇群は地山面で検出した。

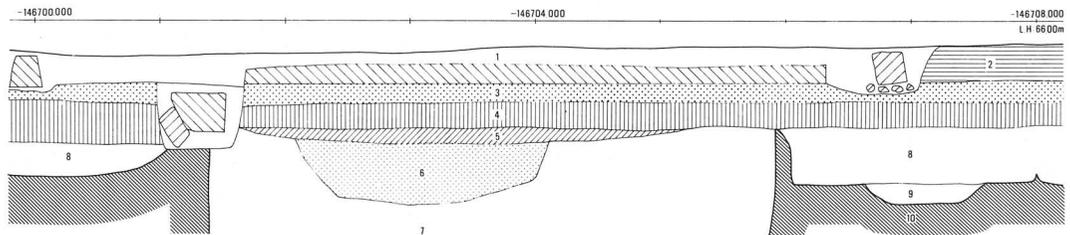
西発掘区（第3図）

調査地の西側に設定した南北トレンチである。検出した遺構は1辺1.5～2.0mの隅丸長方形の土壇である。この土壇は発掘区のほぼ全面で検出した。土壇の深さは0.5～0.8m、底面はほぼ平らで、壁面はほぼ垂直である。各土壇の掘削はいずれも地山の下層、黄灰色粘土層で止められている。土壇の埋土は黄褐色粘質土層、暗茶褐色粘質土層で、埋土中に地山のブロックを含んでいる。各土壇から出土した遺物は奈良時代の瓦片、須恵器、土師器及び中世の瓦器片である。これらの遺物から考えて中世の時期に地山である明黄色粘土を採取するために掘削した土壇と考えられる。また、奈良時代の遺構はこの中世の土壇群によって破壊されていたため、検出できなかった。

東発掘区（第3図）

調査地の東側に設定した南北トレンチである。検出した遺構は、土壇群、奈良時代の井戸2基である。

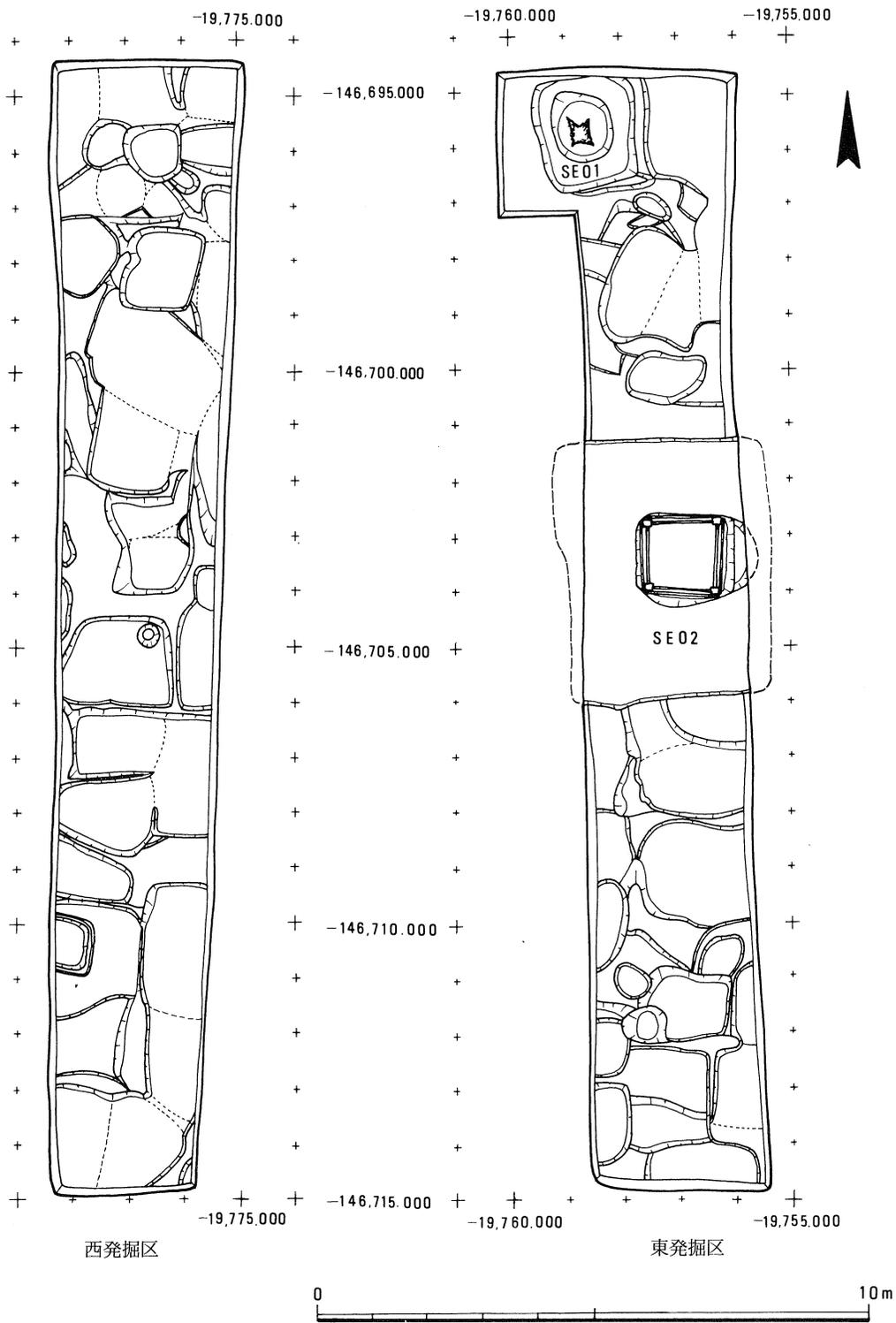
土壇群 発掘区の全面にわたって1辺1.5～2.0mの隅丸長方形の土壇を検出した。土壇の深さは0.5～0.8mで、底面はほぼ平らである。土壇の壁面はほぼ垂直で、埋土からは奈良時代の瓦片、須恵器、土師器と中世の瓦器片が出土した。この土壇はAトレンチの土壇群と同様なものである。



- | | | |
|--------------|----------------------|---------------------|
| 1. 黄褐色土（盛土） | 5. 黄灰色粘土 | 8. 黄褐色粘質土（S E 02埋土） |
| 2. 青灰色砂質土 | 6. 茶褐色砂質土（S E 02埋土） | 9. 茶褐色粘質土 |
| 3. 黄褐色砂質土 | 7. 暗茶褐色粘質土（S E 02埋土） | 10. 黄灰色粘質土 |
| 4. 明黄色粘土（地山） | | |

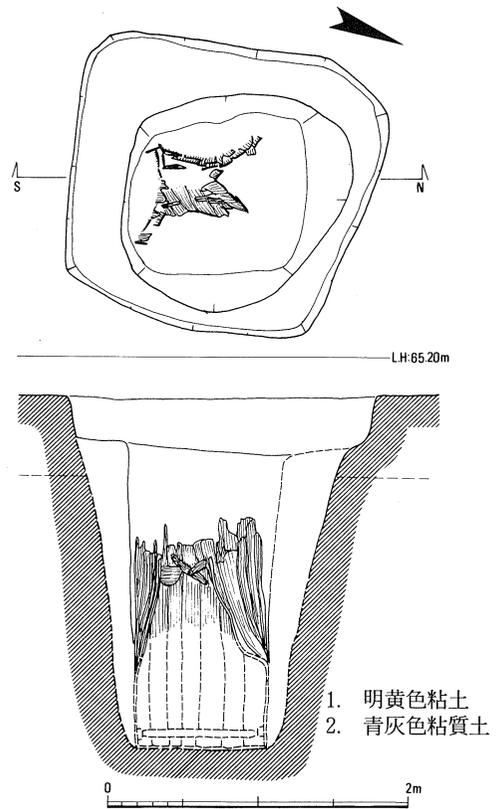
0 3m

第 2 図 東発掘区東壁断面図（1／120）



第 3 図 発掘区検出遺構図 (1 / 120)

SE01 (第4図) 発掘区の北側で検出した井戸である。井戸掘方は一辺1.7m前の隅丸方形で、掘方のほぼ中央に内法一辺0.8mの方形の縦板組の井戸枠をもつものである。井戸枠の上半分は井戸側壁の土圧によって内側に押し曲げられ、つぶされている。また井戸枠側面からの湧水も激しいために、井戸枠下半部の調査はほとんどできなかった。そのため調査は井戸枠を抜き取るにとどまった。井戸の深さは側板の長さから推定して、遺構検出面から2.4mである。井戸枠は縦板組で隅柱はなく、横棧のみで側板を受けるものである。横棧は長さ80cm、一辺が5cm前後の角材で一端を凸形に造り出し、もう一端を凹形に削ったもので組んでおり、横棧は2段分検出した。側板となる縦板は各辺の横棧の外側に7~8枚があたりられる。縦板の寸法は幅20cm、厚さ1cm前後で、長さは140cm分残存している。縦板はまず4枚程度の板をあて、その隙間を3~4枚の縦板を裏からあてがい、隙間を塞いでいる。井戸は灰色砂層まで掘られている。井戸枠の埋土上層からは、奈良時代の須恵器、木製品が出土した。

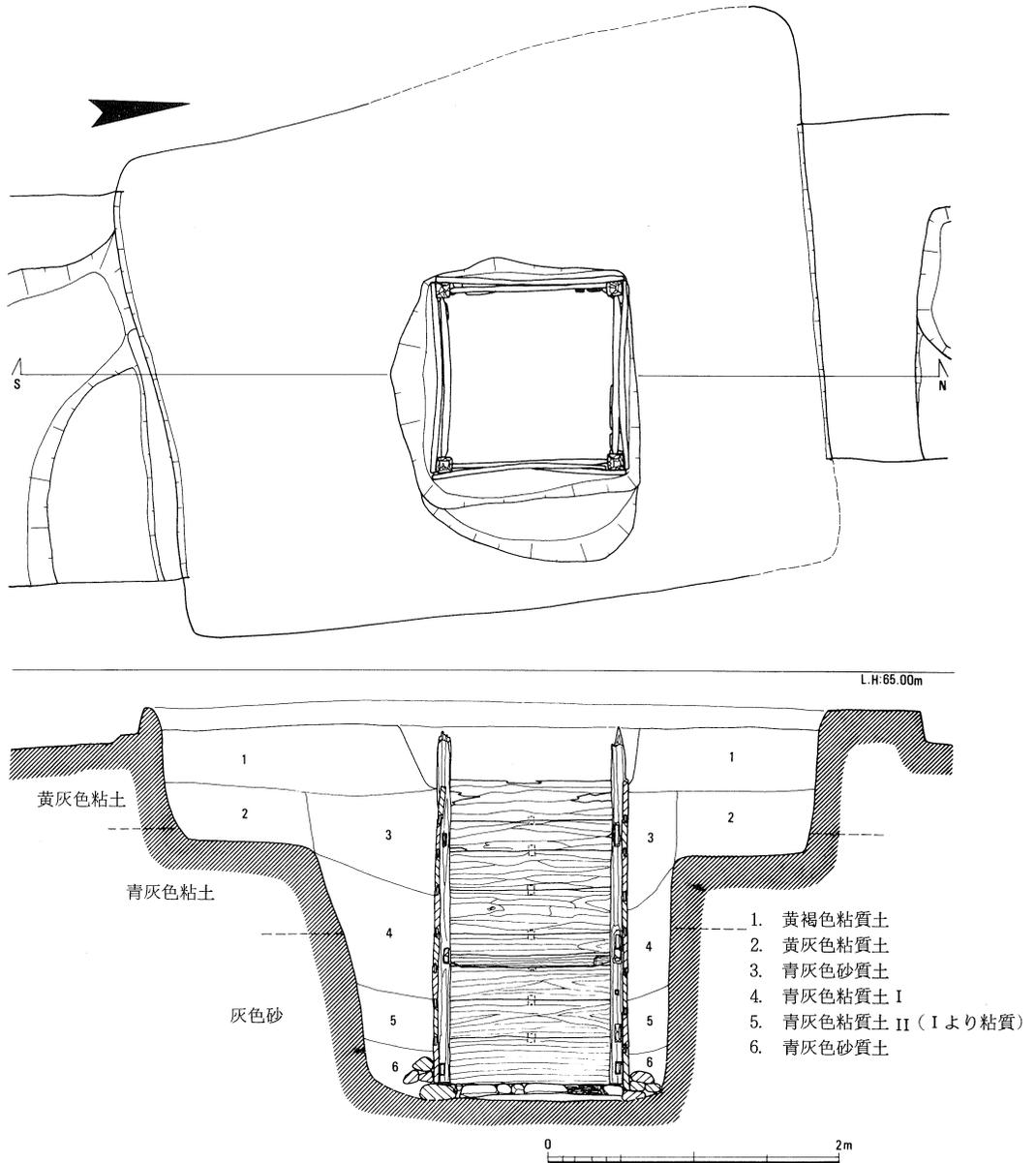


第4図 井戸SE01 平面、立面図 (1/50)

SE02 (第5図) 東発掘区のほぼ中央で検出した井戸である。東西3.5m、南北4.4mの隅丸長方形掘方を持ち、遺構検出面からの深さ2.7mを測る。掘方は二段掘りされており、遺構検出面下1.0mからは一辺2.4mの方形掘方となる。掘方の底に20~30cm大の自然石を一辺1.4mの方形に敷き並べた基礎の上に、内法1.3mの四本柱横板組の井戸枠を据える。井戸枠は基礎の四隅に柱を据え、上下二段の横棧で結合し、側板として横板を積み上げたものであり、特に、隅柱の基礎部分には大きめの自然石を配している。隅柱は一辺12cmの角材で長さ2.4m分が遺存する。多くの杓穴が残っており、建築部材を転用したものであろう。横棧は隅柱下端から0.9mのところの下段のみが遺存しており、上段は隅柱の下端から1.75mのところの結合のための杓穴が残っている。横棧は長さ120cm、幅12cm、厚さ4cmの角材の両端を削り、隅柱の杓穴と結合するもの。側板は横板積みで8段分遺存している。横板は東西方向のものと、南北方向のものでは長さが違い、東西方向のものは140cm、南北方向のものは148cmである。横板の幅は30cm、厚さは3~4cmを測る。南北方向の横板の内面端部と、東西方向の横板の側面端部とを接合する。横板の上下接合面の中央に杓穴をあけ、雇杓で結合する。雇杓寸法は長さ7cm、幅4cm、厚さ1cmである。最下段の横板は、それ以上のものよりやや大ぶりの材を用いている。横板はいずれも転用材ではなく、新材を使用している。井戸掘方と横板との間

は自然石で裏込めする。

井戸枠埋土は上層、中層、下層の三層に分かれる。上層は暗茶褐色土、黄褐色土で、土拵状に堆積する。瓦片、埴、土師器片、須恵器片が多量に出土した。中層は青灰色土。遺物は少ないが奈良時代の完形の丸瓦2点が出土した。下層は黒灰色粘質土が底から0.7mまで堆積する。下層には人頭大の自然石が多数混入し、奈良時代後半の土器、木製品、木簡などが出土した。



第 5 図 井戸SE02 平面、立面図 (1/50)

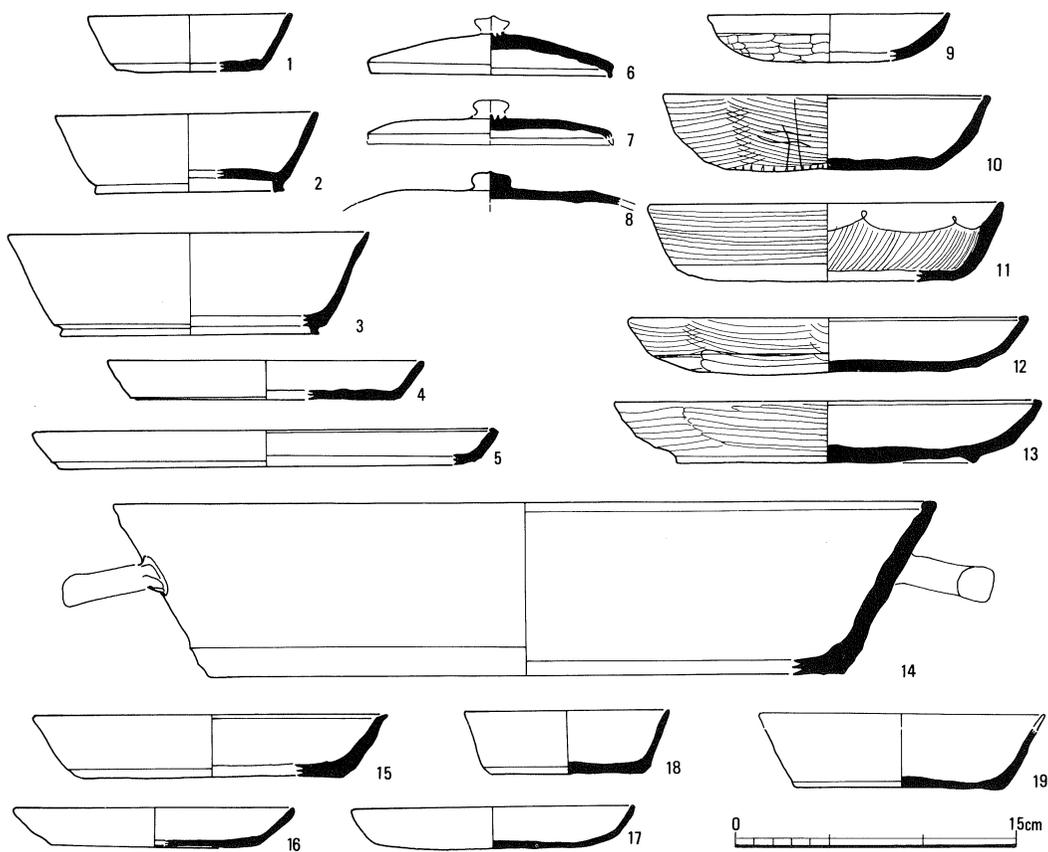
Ⅲ 出土遺物

今回の調査では、検出した土壌群から奈良時代の土器や中世の瓦器片が出土し、またSE01、02からは奈良時代の土器、木簡、木製品、鉄釘などが出土した。以下、遺構に伴って出土した遺物について記す。

瓦埴類 瓦片が発掘区全域から出土した。いずれも丸・平瓦の少片である。SE02の中層から完形の丸瓦が2点出土し、また上層から埴片が数点出土し、そのうち一点は緑釉埴である。

SE01出土土器 (第6図) 井戸埋土上層から須恵器杯A (18、19) が出土した。杯Aは平な底部と斜め上にまっすぐにのびる口縁部からなる。体部内外面をロクロナデで仕上げ、底部外面にヘラ切り痕跡をとどめる。

SE02出土土器 (第6図) 井戸埋土1層 (1~14) と3層 (14~16) から須恵器杯A・杯B・皿A・皿C・杯蓋・盤A、土師器碗D・杯A・皿A・皿Bなどが出土した。平城宮Ⅲ~Ⅴに相当するものである。



第6図 SE01、02出土土器 (1/4)

須恵器 坏A(1)は底部にヘラ切り痕跡をとどめる。坏B(2・3)は坏Aに高台をつけたものである。皿A(4)は雇平な底部に短い口縁部をそなえたものである。皿C(5)は浅い皿で口縁端部がやや角張り内方に突出している。杯蓋(6~8)は平坦な頂部と傾斜して周縁で下方に折れる短い縁部からなる。頂部の外面をヘラ削りする。盤A(14)は平底に外斜した口縁部をつける口縁端部はやや角張り内方に突出している。

土師器 椀D(9)は口縁端部がまるくおわり底部外面はヘラ削りする。Co手法である。杯A(11・12)11は平底で口縁端部は内側にかかるく巻き込む。b1手法である。口縁部外面に「井」の刻線文がある。12は平底で口縁端部はまっすぐにおわる。b1手法である。底部内面に螺旋状暗文、口縁部内面に斜放射暗文と連弧暗文を施す。皿A(12)は平底で角縁部は内弯し、口縁端部はかるく内側に巻き込む。b1手法である。皿B(13)は皿Aに高台をつけたもと。Co手法である。皿A(16・17)は小型の皿で表面が剥離しているため調整手法は不明である。

SE01・02 出土木製品・金属製品 (第7・8図) SE01から出土したものがほとんどで木簡、櫛、曲物底板、曲物蓋板、鉄釘などがある。

木簡(20) 柁目の薄板をていねいに削って檜扇のような形にしている。木簡寸法は長さ18.0cm、幅1.8~2.0cm、厚さ0.2cmを測る。木簡の下部は欠損しており、表裏に墨書がある。以下にその積文を記す。

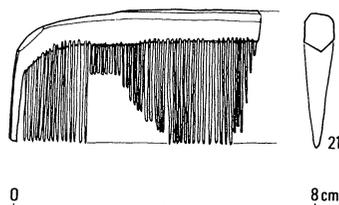
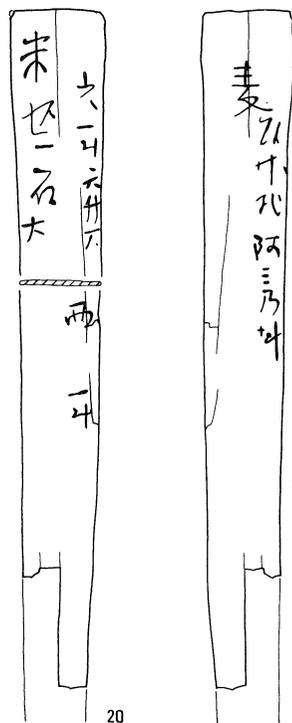
- ・ □米□斗六升一□ 西□一斗
米□一石大
- ・ □麦 □升□阿三乃料

櫛(21) 板目材に鋸で細い歯をひきだし表面を平滑に研いた横櫛である。破片であるが平面形は長方形で肩部はまるく削っている。櫛の寸法は長さ6.5cm、高さ3.6cm、厚さ0.8cm、歯長2.8cmである。3cmあたりの歯数は27本である。

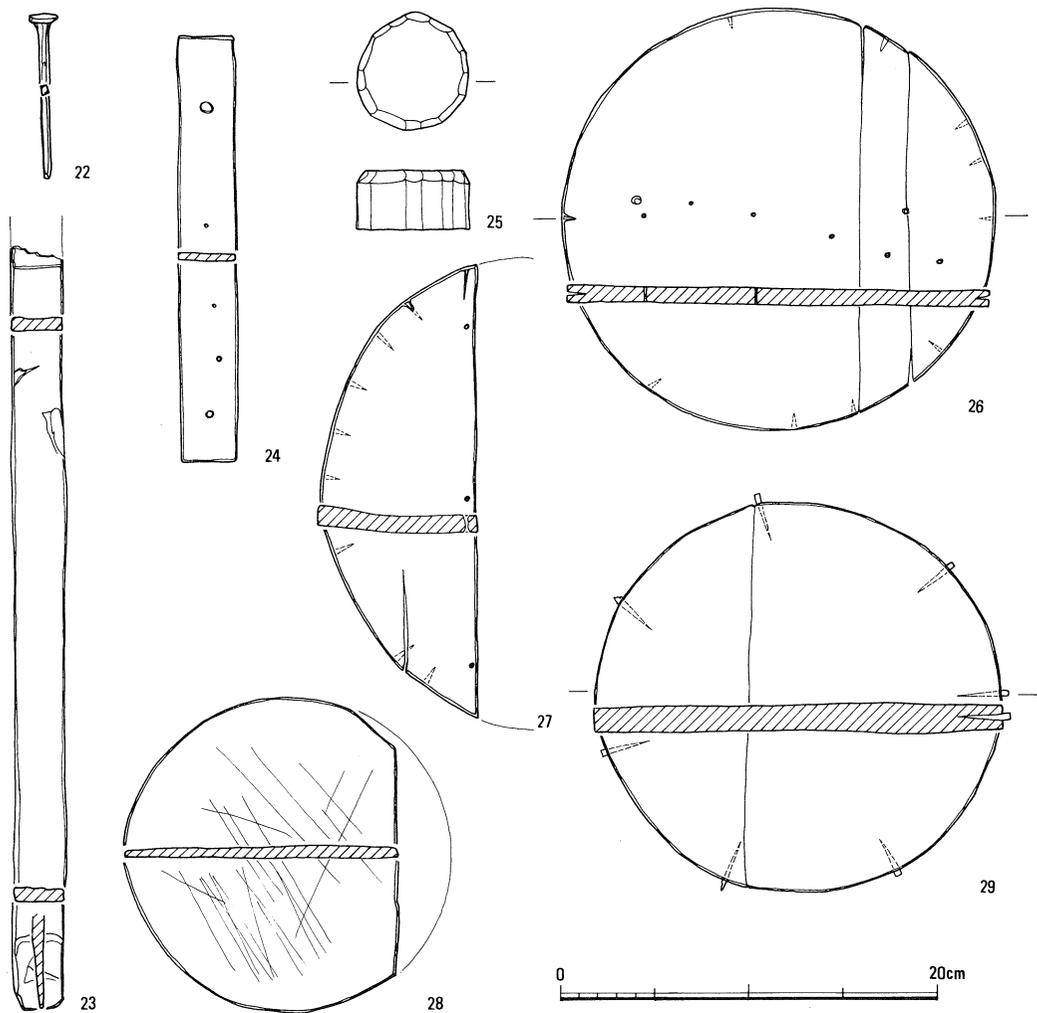
鉄釘(22) SE02の下層で出土。釘寸法は長さ4.4cm、幅0.3cmである。頭部は平坦な丸頭をつける。

他の木製品 穿孔板(24)、円板(25)、曲物蓋板(28)、曲物底板(26・27・29)などがある。28・29はSE01出土。

24は長方形の板材で穿孔が5ヶ所にある。25は丸材を円板に切り、側面と上面側縁を面取りしたものである。26は側面に木釘孔があり、板の中央にはほぼ一列に並ぶ穿孔が6ヶ所にある。27は側面に木釘孔があり、板の欠損部分にそって穿孔が3ヶ所にある。



第7図 井戸SE02出土木製品 (1/2)



第 8 図 SE01、02出土鉄釘(1/2)木製品(1/4)

29は側面に側板を固定するための木釘が7ヶ所に残る。木釘は一辺0.2cm、長さ3.0cmの四角錐である。

IV ま と め

今回の調査によって、奈良時代の井戸2基と中世の土壙群を検出した。この土壙群は他の奈良時代の遺構を破壊しているもので、周辺の発掘調査でも検出した中世から近世にかけておこなわれた粘土の採掘するための穴であると考えられる。

中世から近世にかけて文献の中に火鉢座、土器座の存在や、近世の瓦大工、橘氏の西之京の居住など土器づくり、瓦づくりに関連した資料がみられ、今後の調査で明らかにしていきたい。

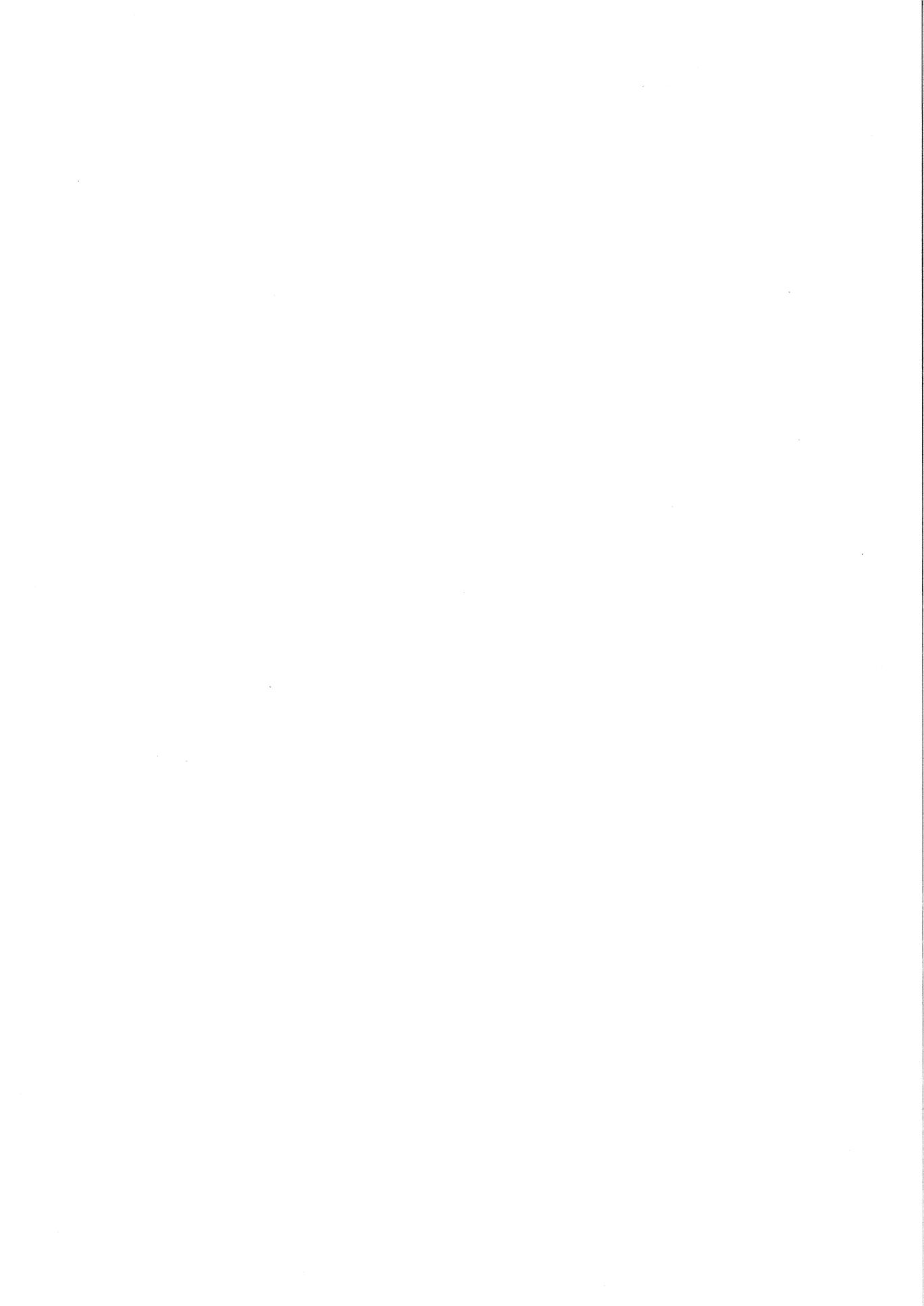
※ 土器の器種名、調整手法は、奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅶ』に準拠した。



1. 発掘区全景（東から）



2. 西発掘区全景（南から）



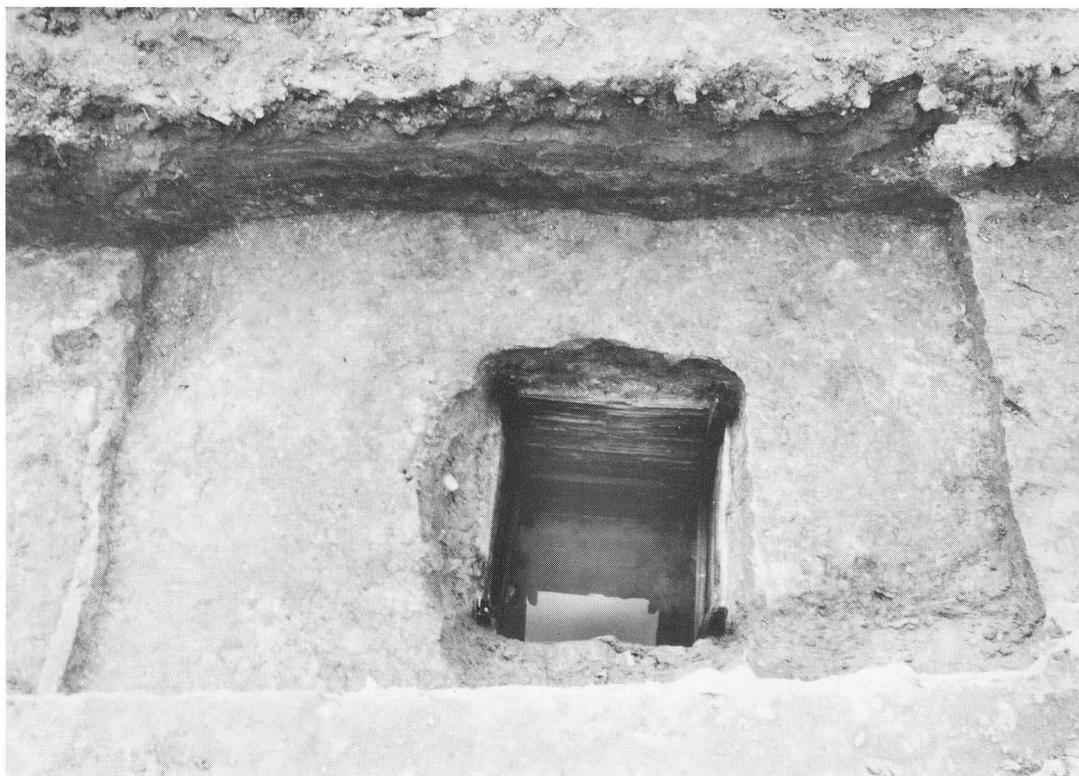


1. 東発掘区全景（北から）

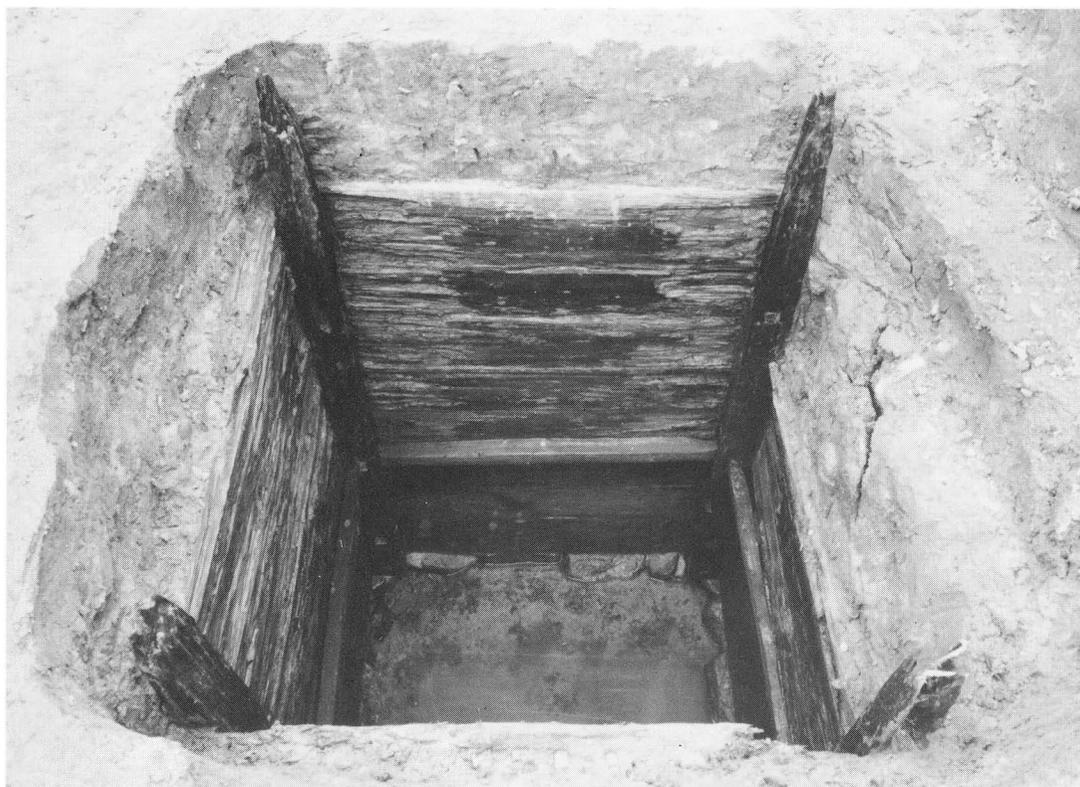


2. 井戸SE01（北から）



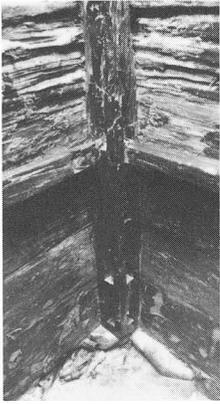


1. 井戸SE02 (東から)

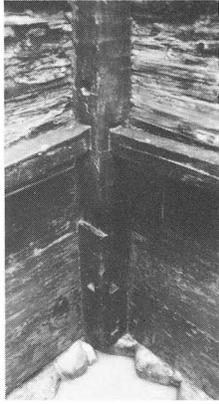


2. SE02井戸枠 (南から)





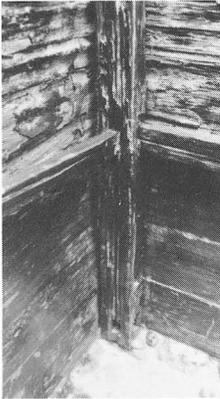
1. SE 02 北西隅柱



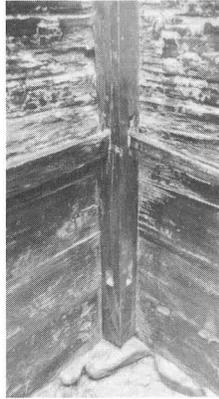
2. SE 02 北東隅柱



5. SE 02 側板 (南から)



3. SE 02 南西隅柱



4. SE 02 南東隅柱



6. SE 02 側板 (西から)



7. SE 02 断面 (東から)



大安寺旧境内発掘調査報告

例 言

1. 本書は史跡大安寺旧境内において実施した5箇所の発掘調査の報告である。
1. 発掘調査は、81-3次調査（消防水利施設々置に伴う事前調査）を除き、いずれも国庫補助金の交付を受け実施した。
1. 発掘調査はいずれも昭和56年度中に実施し、各々の調査期間は本文中に記した。
1. 発掘調査は奈良市教育委員会社会教育部文化財課が実施し、調査の担当者は目次に明らかにした。
なお調査補助員として奈良大学および花園大学々生諸氏の参加があった。
1. 発掘調査にあたっては、各々土地所有者および関係者の御理解、御協力を得た。記して感謝したい。
1. 本書の作成に伴う遺物整理、図面作成にあたっては行天優貴子（四天王寺女子大学卒業生）、奈良美穂はじめ奈良大学々生諸氏の協力を得た。
1. 本書の執筆は調査担当者が分担して行い、文責は目次に記した。全体の編集は、執筆者全員の討議をもとに西崎卓哉があたった。

目 次

I	はじめに	（西崎卓哉）	143
II	81-1次調査	（篠原豊一）	145
III	81-2次調査	（森下恵介）	150
IV	81-3次調査	（西崎卓哉）	153
V	81-4次調査	（森下恵介）	156
VI	81-5次調査	（森下恵介）	157

I はじめに

昭和56年度、奈良市教育委員会では大安寺旧境内において5箇所の発掘調査を実施した。いずれも住宅建築、土木工事などに伴う事前発掘調査である。本書ではこれらの調査をとりまとめ報告することとする。

大安寺の寺域は、平城京の条坊では左京六条四坊から七条四坊にかけて東西3町、南北5町を占める広大なものであり、現在すべての地域が大安寺旧境内として国の史跡指定を受け現状で保存が図られている。寺域内では、昭和29年以来今日までかなりの発掘調査が行われてきている。昭和29年の調査では南門、中門および南回廊の位置と規模が明らかにされており、また昭和38年には講堂西側部分と鐘楼基壇西辺が確認されている。さらに昭和41年の調査では講堂の南面階段および鐘楼の基壇まわりの地覆石が昭和49年には鐘楼および鐘楼と講堂をむすぶ繋廊が検出されている。以上のような成果を踏まえ、本年度は以下の調査を実施した。

81-1次調査は、民家の新築に伴い行ったものである。調査地は苑院推定地に相当し、寺地の東を限る施設の確認を目的として東西15m (45㎡) の発掘区を設定した。81-2次調査は、現在大安寺小学校の校庭を横断する水路の改修拡幅計画に伴って実施したものである。計画地は講堂基壇北辺部分に相当すると考えられたため、水路に添って3箇所 (計15.5㎡) に発掘区を設定した。81-3次調査は、防火用地下水槽の建設に伴い実施した事前発掘調査である。調査地は大安寺主要伽藍の北、寺域の北を限る小路にほど近いところである。調査面積は東西3m、南北7m (21㎡) である。81-4次調査は民家の増築に伴って実施した事前発掘調査である。僧房 (東大房) 推定地に相当し、約43㎡を調査した。81-5次調査は民家新築に伴う事前発掘調査として実施した。調査地は大安寺寺域の一面であると同時に、杉山古墳の周濠の一部に相当すると考えられた。東西6m、南北1.3m (7.8㎡) の発掘区を設定した。

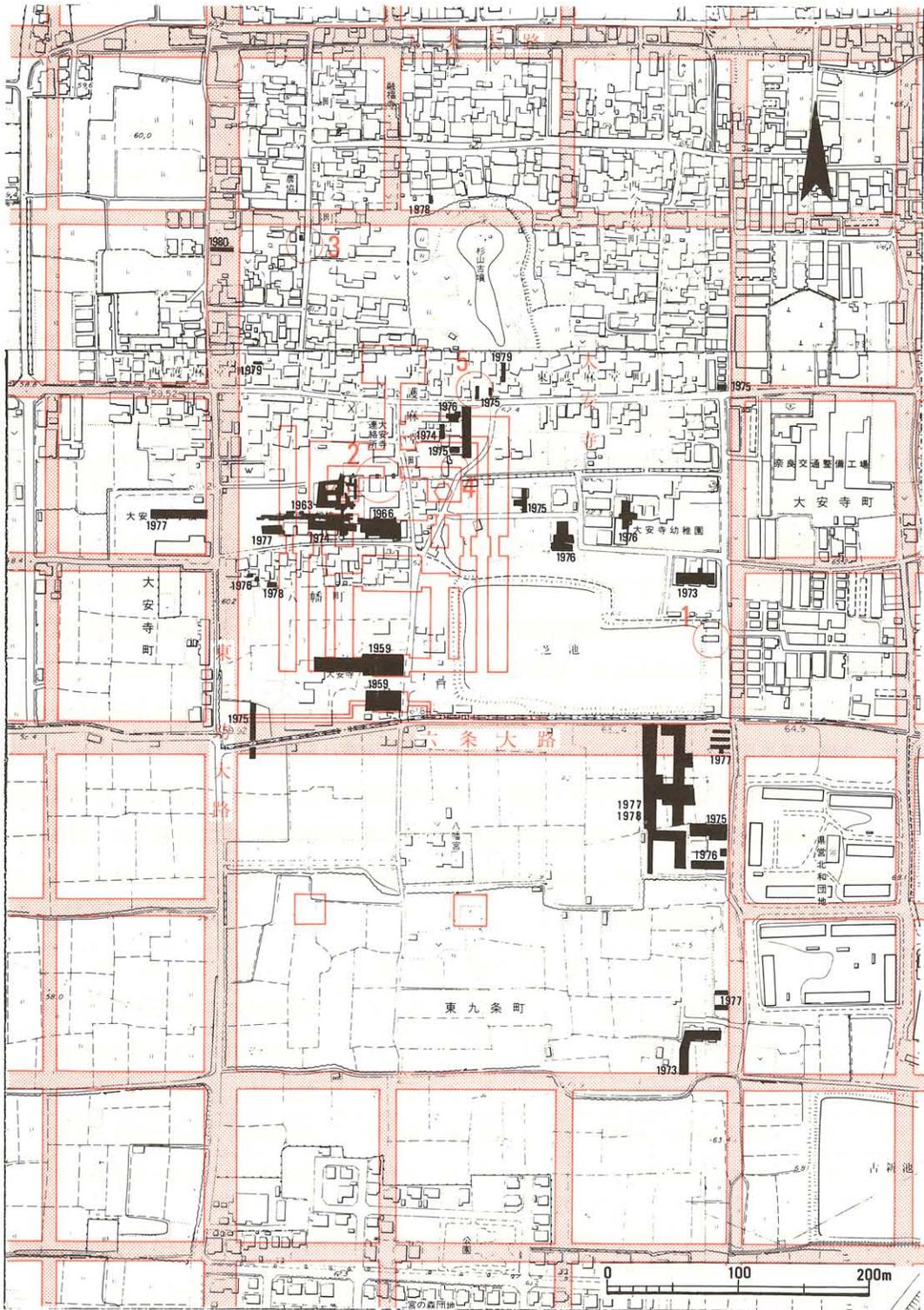
	調 査 地	所 有 者	調 査 期 間
81 - 1	大安寺町1237-1番地	新井友子	昭和56年5月25日～同年6月6日
81 - 2	大安寺町1147番地	奈良市長	昭和56年10月5日～同年10月15日
81 - 3	大安寺町1042番地	奈良市長	昭和57年1月25日～同年2月1日
81 - 4	大安寺町1154-1番地	松石郁夫	昭和57年2月4日～同年2月6日
81 - 5	大安寺町1120番地	谷川庄太郎	昭和57年2月8日～同年2月12日

注1) 大岡実他「大安寺南大門、中門及び回廊の発掘」『建築学会論文集50』1950

注2) 杉山信三「大安寺講堂跡等発掘調査概報」『大和文化研究』8巻1号 1964

注3) 奈良国立文化財研究所「大安寺発掘調査概要」『奈良国立文化財研究所年報1967』1967

注4) 奈良国立文化財研究所「大安寺鐘楼・僧房の調査」『奈良国立文化財研究所年報1974』1974



第 1 図 発掘区の位置と周辺の条坊 (1/5000)

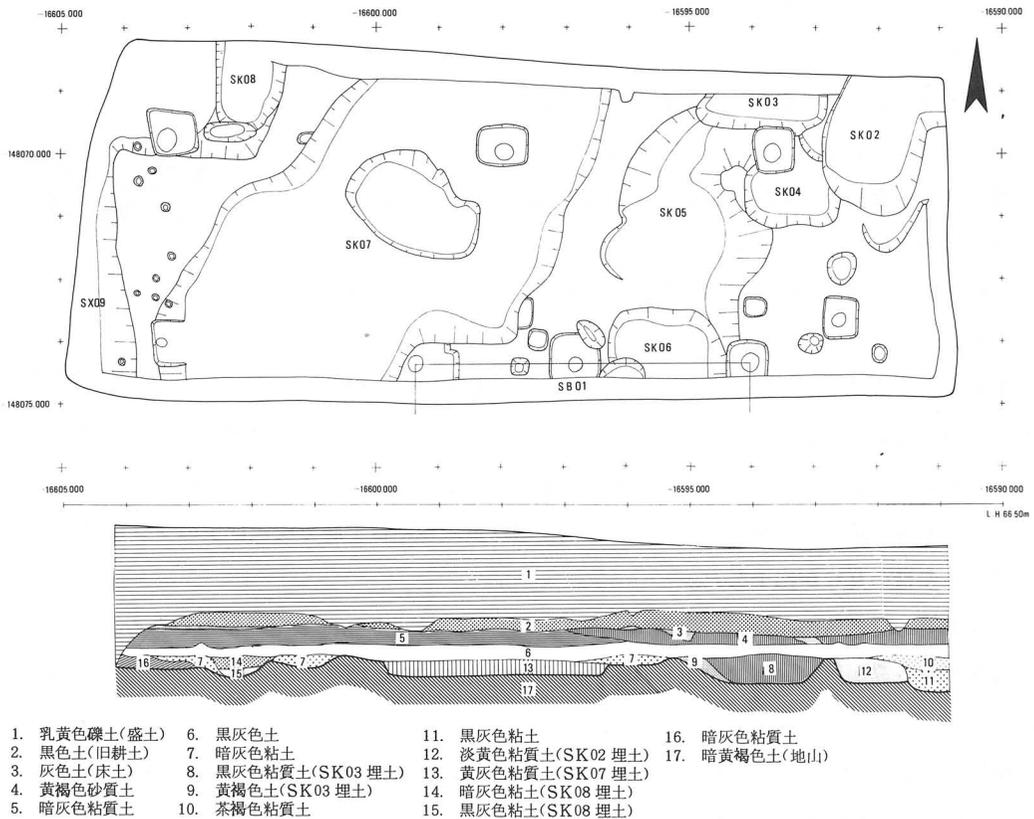
II 81—1 次調査

今回の調査は大安寺旧境内苑院推定地において行なった民家新築に伴う事前発掘調査である。調査地は芝池の東側に位置し、現状は水田に盛土して造成した宅地（234㎡）となっている。宅地のほぼ中央に東西15m、南北5m、面積75㎡の発掘区を設定した。

1 検出遺構

調査区の土層堆積は以下のようなものである。地表面から1.3～1.5mにわたって現代の盛土である乳黄色礫土層が堆積する。その下層に旧耕土である厚さ0.25mの黒色土層、床土である灰色土層が堆積している。床土以下、黄褐色砂質土層、暗灰色粘質土層、黒灰色土層と続き地山である黄褐色土層に達する。地山は発掘区の東から西に向かってゆるやかに傾斜する。

検出した遺構には掘立柱建物1棟、土壇、杭列群、落ち込みがある。これらは、いずれも黄褐色土層上面で検出した。



第2図 発掘区検出遺構平面図・北壁推積土層図(1/120)

SB01 発掘区の南側で検出した東西2間の柱列。南北建物の北妻となろう。梁行の柱間寸法は2.4m(8尺)等間である。柱掘方は、一辺0.8m前後の大きさをもつ。中央の柱穴には柱根が残存しており、他の柱穴にも径0.3m前後の柱痕跡を残す。柱穴を東から柱穴1、柱穴2、柱穴3とし、柱穴の断面観察を行った。1は掘方中央にある柱根痕の下から、磚が2個並んだ状態で出土した。この磚を柱の礎板として使用している。2は掘方中央に柱根が残存し、その下から熨斗瓦が5枚並んだ状態で出土した。この熨斗瓦を柱の礎板として使用している。3は掘方中央の柱痕跡の下から方形の礎板が出土した。埋土からは磚が出土しており柱の裏込めとして用いられたと考えられる。建物の桁行部分は発掘区外であり今回の調査では確認できなかった。

SK02 発掘区の東側で検出した方形の土壇で、東西1.6m、南北1.6m以上、深さ0.7mを測る。遺物は、瓦片、土師器片、須恵器片、瓦器片などが出土した。

SK03 発掘区の東側、SK02の西で検出した土壇で、東西2.0m、深さ0.4mを測る。土壇の半分は発掘区外で全容は不明である。

SK04 発掘区の東側、SK02の西で検出した土壇で、東西1.6m、南北1.2m、深さ0.3mを測る。

SK05 発掘区の東側、中央で検出した浅い土壇で、東西3.0m、南北3.0m、深さ0.2mを測る。

SK06 発掘区の南側で検出した方形の土壇。東西1.8m、南北1.5m、深さ0.4mである。

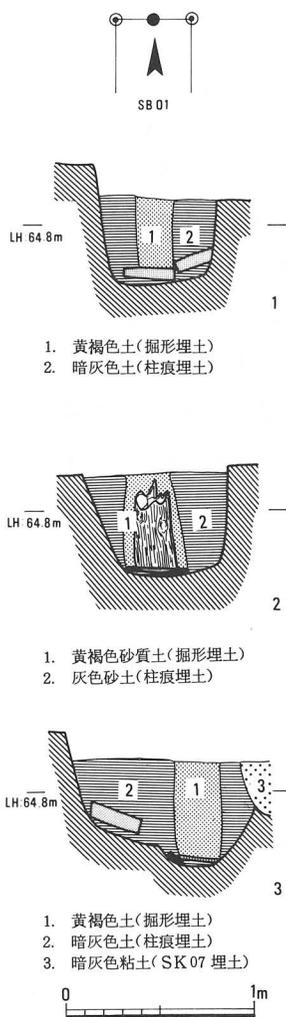
SK07 発掘区の西半分を占める溝状の土壇で、東西3.8m、深さ0.3~0.4mを測る。土壇中央部分にやや深い隋円形の深まりがある。堆積土層は黄灰色粘質土層で灰色粘土のブロックを含む。内部から多量の瓦片が出土した。

SK08 発掘区の西側で検出した土壇。東西1.1m、南北1.4m、深さ0.35mである。

SX09 発掘区の西側で検出した落ち込みは南北に伸び、西側に向かって大きく急斜面となっている。

杭列 発掘区の西側、SX10とSX09にはさまれた南北に並ぶ径7~10cmの杭列である。これらの杭列は木杭の痕跡と考えられる。

SX09は宅地造成前の芝池の一部であり、ピットはこの池の堤に打ち込んだ護岸用木杭痕跡である。発掘区全体にある土壇はこの芝池の堤を築く際に掘られた土取穴であると考えられる。



第3図 SB01柱穴断面図(1/40)

2 出土遺物

今回の調査の主な遺物は土壙、SB01の柱穴から出土した、軒瓦(1~4)熨斗瓦(5~9)磚(10~12)である。

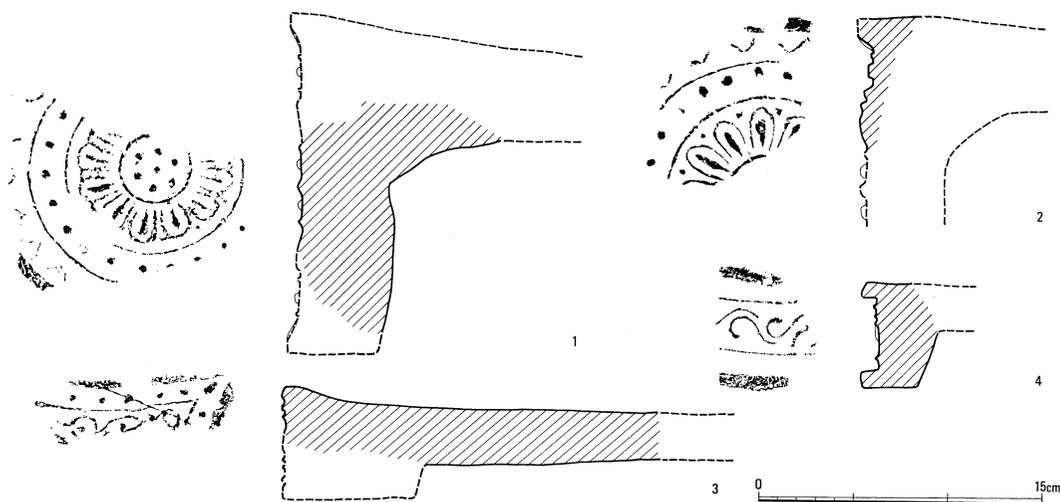
軒瓦(第4図)

1は複弁8弁蓮華文軒丸瓦で、瓦当面对し左半を欠損する。内区中房に蓮子(1+6)を飾り、外区内縁に珠文を配する。外区外縁に凸線鋸齒文を巡らせた平城宮6304-D型式であろう。2は単弁8弁蓮華文軒丸瓦で、瓦当面の右半が欠損するが、外区内縁に珠文を配し、外区外縁に凸線鋸齒文を巡らせた平城宮6138-C型式であろう。3は均整唐草文軒平瓦で、瓦当面向い左半を欠損する。外区に珠文を配する。平城宮6717-A型式と同筈である。4は唐草文軒平瓦で瓦当面向い左半を欠損する。内区に唐草文を飾る。

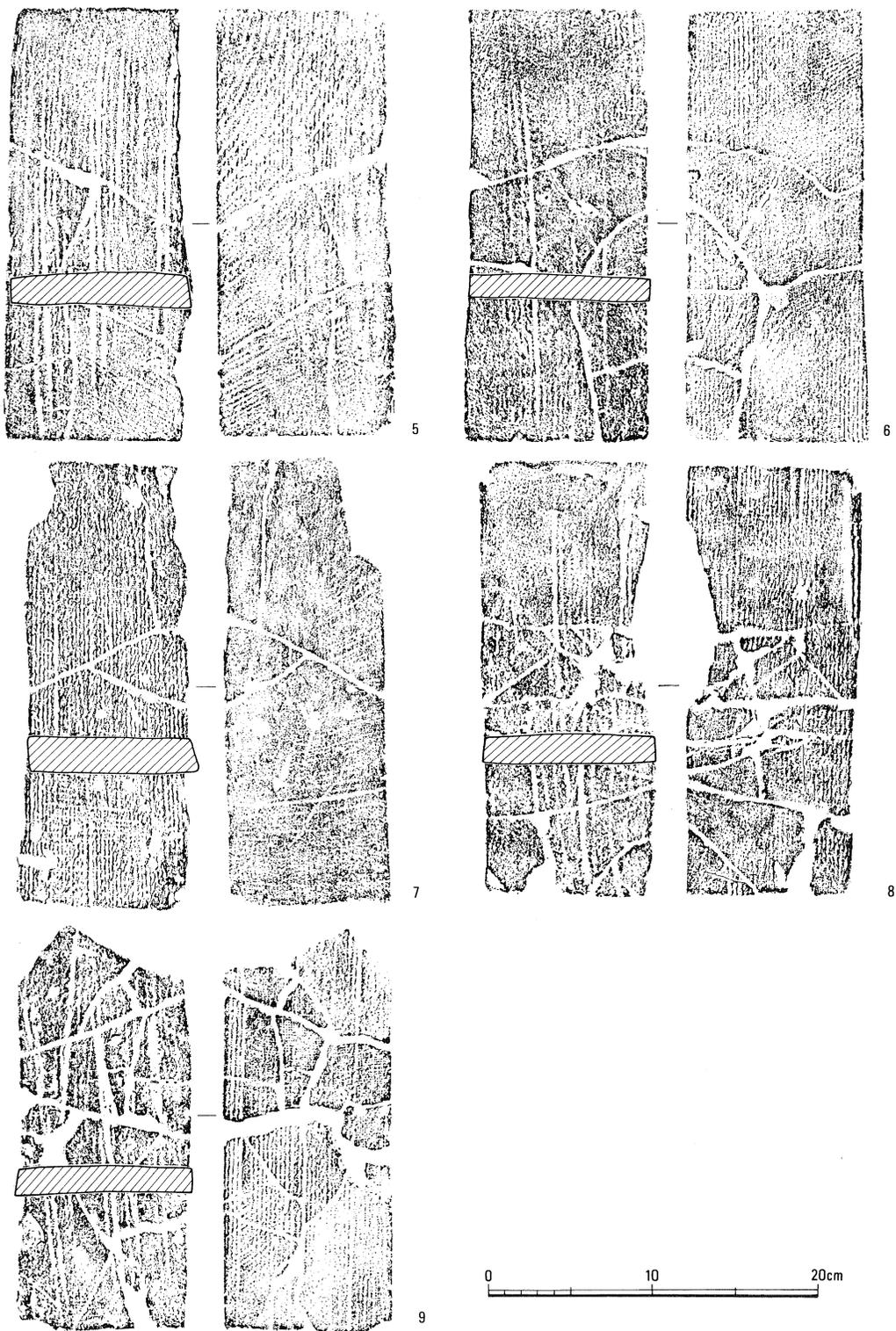
熨斗瓦(第5図)

道具瓦として熨斗瓦(長さ26cm、幅10~11cm、厚さ1.1~2.0cm)が出土した。熨斗瓦は縄目叩きの違いにより3種類に区分できる。5・6の凸面は荒い縄目叩きを施している。凹面は糸切り痕が残り、縄目叩きした後、横なで痕跡が残る。7の凸面は細い縄目叩きを施している。凹面は糸切り痕跡を残し、指押え、指なで調整を施している。8・9は凸面にやや荒い縄目叩き調整を施している。凹面は布目圧痕を残し、縄目叩き調整した後、横なで調整を施している。

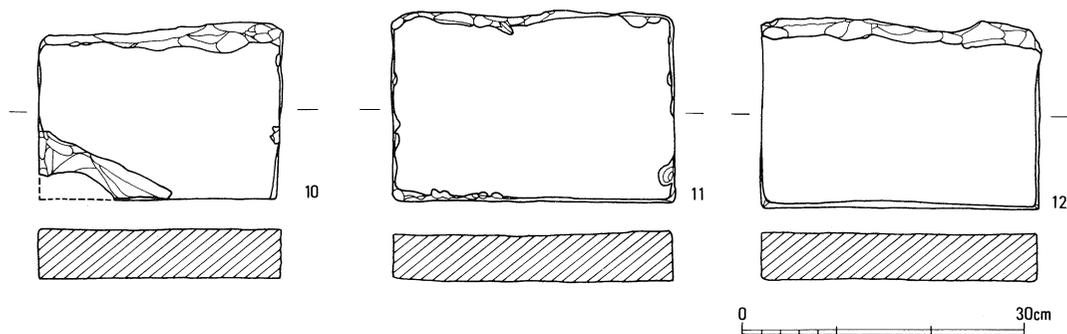
熨斗瓦は一尺(約30cm)前後の四角粘土塊から厚さ1.1~2.0cmの方形粘土板を糸切りして切り取り凸面はていねいに縄目叩き調整し、凹面は糸切り痕が残る。瓦の側面はていねいにヘラ削りしたのち、凹面中央に縦方向の切れ目(約0.3cm)を入れる。焼成後切れ目に沿って2分割し熨斗瓦



第 4 図 出土軒瓦(1/4)



第 5 图 出土熨斗瓦 (1/4)



第 6 図 出土埴 (1/8)

とする。本例は平瓦を転用して熨斗瓦としたのではなく、当初から熨斗瓦として造られている。熨斗瓦として利用した後、礎板に転用したものであろう。

埴 (第6図)

10・11はSB01の柱穴1の礎板として使用された埴である。10は長辺26cm、短辺17~19cm、厚さ5.5cmで、色調は乳灰色を呈し、胎土中に2~3mmの砂粒を含む。短辺の右側面はノミ痕跡が残る。側面はていねいに打ち欠いて面を整える。長辺の一方も一定の幅で、ノミのようなもので荒く打ち欠いている。11は長辺30cm、短辺20cm、厚さ5cmで、色調は黒灰色を呈し、胎土中に2~3mmの砂粒を含む。長辺の一方を10に比べて一定の幅を保ちながら打ち欠いている。12はSB01の柱穴3から出土した。長辺30cm、短辺20cm、厚さ4.5cmで、色調は黒灰色を呈し、胎土中に2~3mmの砂粒を含む。長辺の一方は一定の幅を保ちながら打ち欠いている。両端は細く打ち欠き、中央部分は荒く打ち欠いている。10の長辺は他と比べて短いが、もとは30cm程度であったと考えられる。短辺は打ち欠けているため不明であるが長辺30cm、厚さ5cm前後の規格をもって造られたものであろう。これらの埴は他に使用されていた埴を礎板に転用したものであろう。

3 まとめ

今回の調査は苑院推定地の東を限る施設の確認を目的として行なったが、これらを検出することはできなかった。しかし、奈良時代の建物を一棟検出したことによって、苑院推定地の一端を明らかにすることができたと考ええる。

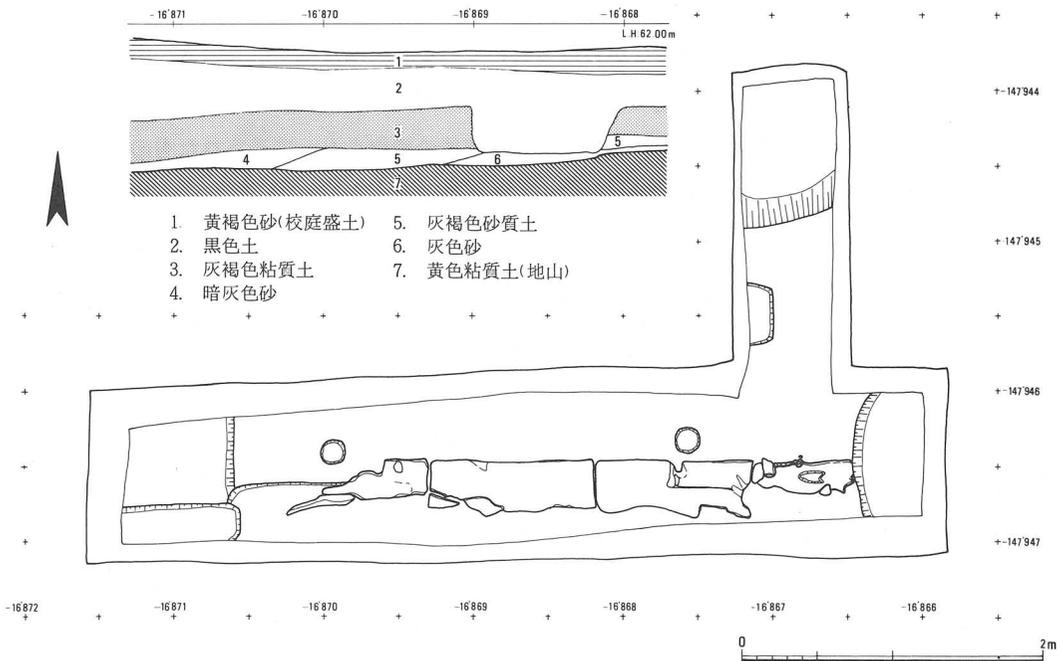
近年、大安寺周辺では市街化が一段と進み住宅の新築、改築の件数が増加してきており、それに伴い現状変更の件数も増加している。このような調査は今回のように小規模な調査となる場合が多く、一箇所の調査だけでは遺構の全容を明らかにしえない場合が大半である。このような小規模調査はその成果を積み上げることによって遺跡の全体像を明らかにすることができる性格のものであろう。が、そのための課題は多く、今後一層充分な調査を実施しなければならないものと思われる。

Ⅲ 81-2 次調査

調査地は、奈良市立大安寺小学校校庭を東西に流れる水路北側に接し、昭和56年春、解体撤去された旧校舎の跡地である。この地点は1963年（昭和38年）の調査において、当時校舎の存在のため大安寺講堂北辺の確認を断念せざるを得なかった地点でもある^{注)}。今回の調査では、水路側壁北側に接し3箇所の特レンチを設定し、講堂北面の遺構の確認をまず目的とした。また奈良市建築課ではこの水路の拡幅計画をもっていたが、調査の結果、講堂基壇北辺の延石列の遺存が確認されたため現位置での改修にとどめその保存が計られることとなった。

1 検出遺構

第1特レンチ 講堂基壇西北隅推定地に設定した特レンチ（1m×5m）である。現地表面より約40cmまで校舎解体時および建築時に攪乱されており、以下、瓦類を多く包含する淡灰褐色土が堆積し、遺構面である黄色粘質土の上に灰色砂が薄く堆積する。黄色粘質土上面において講堂基壇北辺の延石を原位置で検出した。基壇化粧は延石以外は遺存していない。延石は幅約60cm、長さ110cm、厚さは3cm程度の凝灰岩製のもので上面を平坦に加工し、北辺に面をそろえて据えられる。4枚分、長さは3.8mにわたり検出した。延石列の西端および東端はそれぞれ校舎基礎、水路掘り方



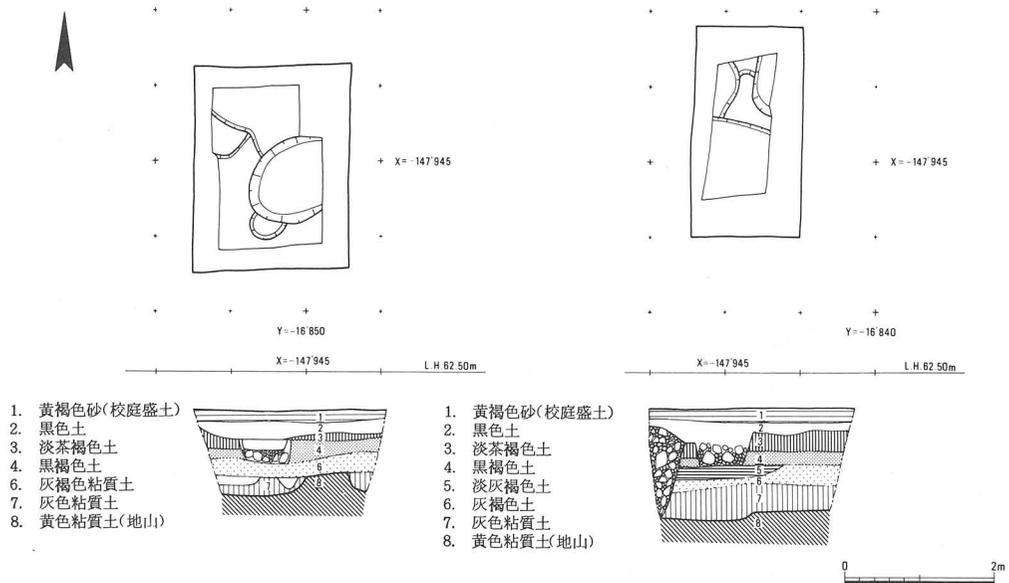
第 7 図 第 1 特レンチ堆積土層・検出遺構平面図（1 / 50）

などで破壊されており、また水路が発掘区以外では北に寄っているため、基壇北辺が遺存する箇所は、今回検出した部分がすべてであるものと思われる。講堂基壇西北隅については確認できなかったが、1963年の調査で検出されている基壇西辺の延石列との位置関係からみて、今回検出した延石列の西端が途切れる付近が西北隅に相当するものと考えることができる。また雨落溝等は検出されず、基壇の築成土・掘込地業の範囲などについてもこれを明らかにするまでには至らなかった。

第2トレンチ 講堂基壇北辺と北軒廊西辺との接続部分に設定したトレンチ（3m×2m）である。講堂基壇北辺はこの地点では水路内となるため、北軒廊西辺の確認に目的を置いた。第1トレンチと同様に現地表より約40cmまで校舍解体時と建設時に攪乱されており、以下旧耕土である黒褐色土、瓦類を含む灰褐色粘質土とつづくが、発掘区の大部分では、遺構面である黄色粘質土を掘り込んだ土壌群が存在し、北軒廊西辺の遺構は確認することができなかった。土壌群は瓦類を多量に含む灰色粘質土で埋められており、この埋土および、灰褐色粘質土層より多量の瓦類が出土した。

第3トレンチ 第2トレンチの東約9m、北軒廊東辺が講堂北辺にとりつく部分に設定したトレンチ（3m×1.5m）であるが、この地点においても水路が北へ寄っているため講堂北辺部は遺存していない。第2トレンチと同じく、灰褐色粘質土下層での攪乱土壌が発掘区全域に広がっており、北軒廊東辺についてもその遺構は検出されなかった。灰褐色粘質土および土壌群の埋土である灰色粘質土からは多量の瓦類が出土した。

注) 杉山信三「大安寺講堂跡等発掘調査概報」『大和文化研究8-1』 1964



第 8 図 第2・3トレンチ堆積土層・平面図 (1/100)

2 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は瓦類がほとんどすべてであり、他の遺物は、第3トレンチの攪乱土層中より出土した円筒埴輪片が若干量あるにすぎない。瓦類はその大部分が丸瓦と平瓦であるが、軒丸瓦2点、軒平瓦3点が出土している。

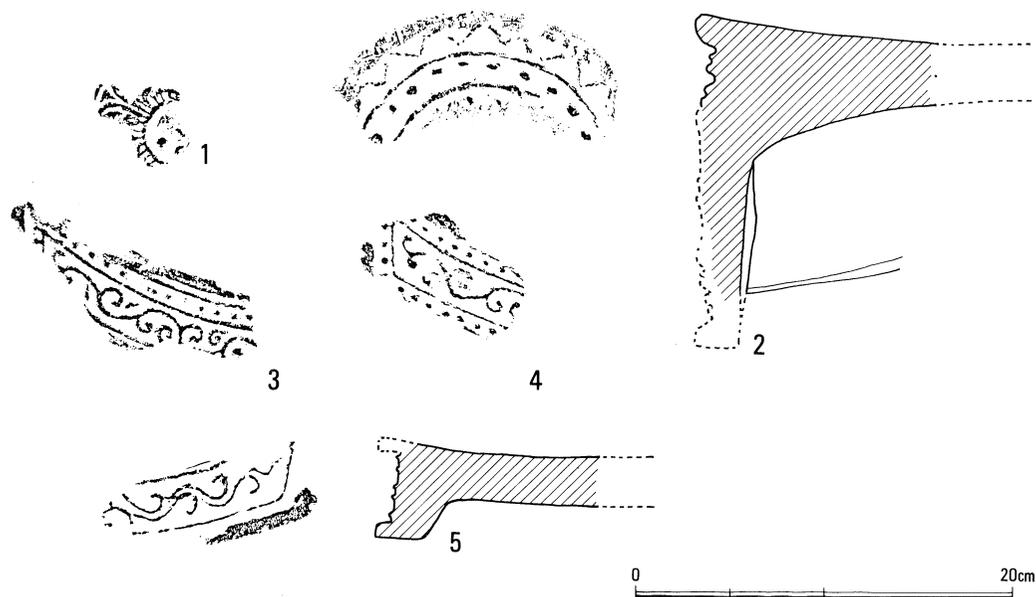
軒丸瓦

1・2はともに第3トレンチより出土したもので、1は中房と内区の蓮弁をわずかに残す小片であり、2は瓦当面の剥離・磨滅が著しく、わずかに鋸歯文をめぐらす外縁と珠文をおく外区を残すだけである。いずれも遺存状況が悪いが、いわゆる「大安寺式」と呼ばれる軒丸瓦（平城宮6138—C型式）である可能性が考えられる。

軒平瓦

3・4は第3トレンチより出土したもので同型式の均整唐草文軒平瓦（平城宮6712—A型式）である。1・2の軒丸瓦が可能性をもつ平城宮6138—C型式とともに大安寺ではもっとも多量に出土する軒瓦の組合せになる。やや流動性を欠いた唐草文様を内区主文とし、外区と脇区に珠文をめぐらす。5は第1トレンチより出土したもので内区には退化した唐草文を飾り、周囲を界線がめぐる。興福寺などでもみられ、時期は室町時代に属する。

今回の調査では大安寺講堂基壇の北辺の一部分を検出した。しかし、現在の段階では、講堂南辺西辺での調査成果と直接つなげることはできず、今後、再発掘を含め従来の成果を検証し、講堂の規模および大安寺伽藍配置について詳細な検討を加えていかねばならないものと思われる。



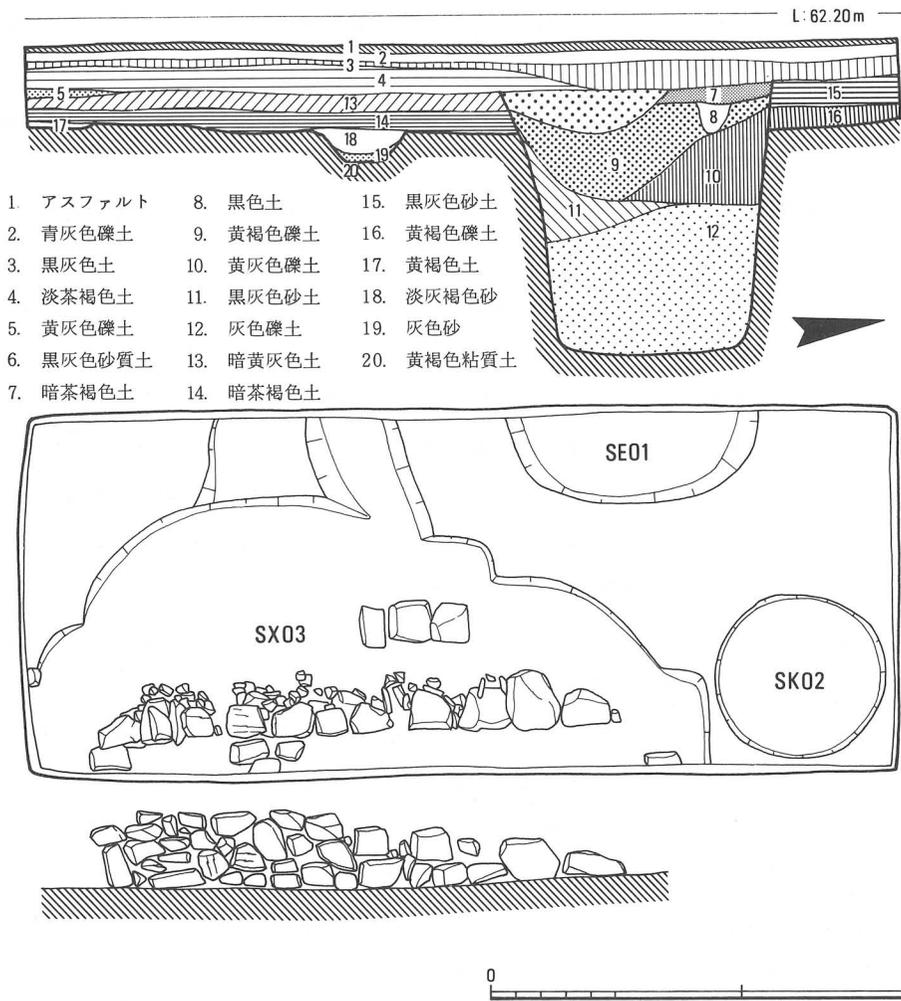
第 9 図 出土軒瓦 (1/4)

IV 81—3 次調査

調査地は大安寺の主要伽藍の北、食堂并大衆院の存在が推定される地域の一角である。この地域ではこれまで民家の建替えなどに伴って何回かの発掘調査が実施されてきているが、直接大安寺に関する遺構が検出された例はなく実態の究明が急がれる地域でもある。今回の調査は、地下式防火水槽設置の事前発掘調査として東西3.0m、南北7.0m(21㎡)の発掘区を設定し行った。

1 検出遺構

今回の調査で検出した遺構は井戸1基、土塋1基、石組1条である。以下、堆積土層について述べた後、各遺構について記す。



第 10 図 発掘区西壁堆積土層・検出遺構平面図 (1/50)

発掘区内の堆積土は大きく3層に分けることができる。第1・2層は近年の整地層である。第3・4層は室町時代以降の堆積土である。第13・14層は中世の整地土であり、井戸SE01はこの層から切り込まれている。この整地層中には多量の瓦が混入していた。表土以下約0.7mで地山である黄褐色粘質土に達する。

SE01 径約2.0m、深さ約2.2mの円形掘方をもつ井戸。井戸枠は残存しない。内部から土師器、瓦質土器、瓦などが出土した。これらの遺物からみて井戸の廃絶年代は室町期に求められよう。

SK02 径約1.35m、の円形掘方をもつ土壇。内部から少量の瓦質土器、瓦が出土したが、その廃絶時期を決するまでには至らない。この土壇は内部に甕を埋め込むなどの用途が考えられるが、性格は判然とはしない。

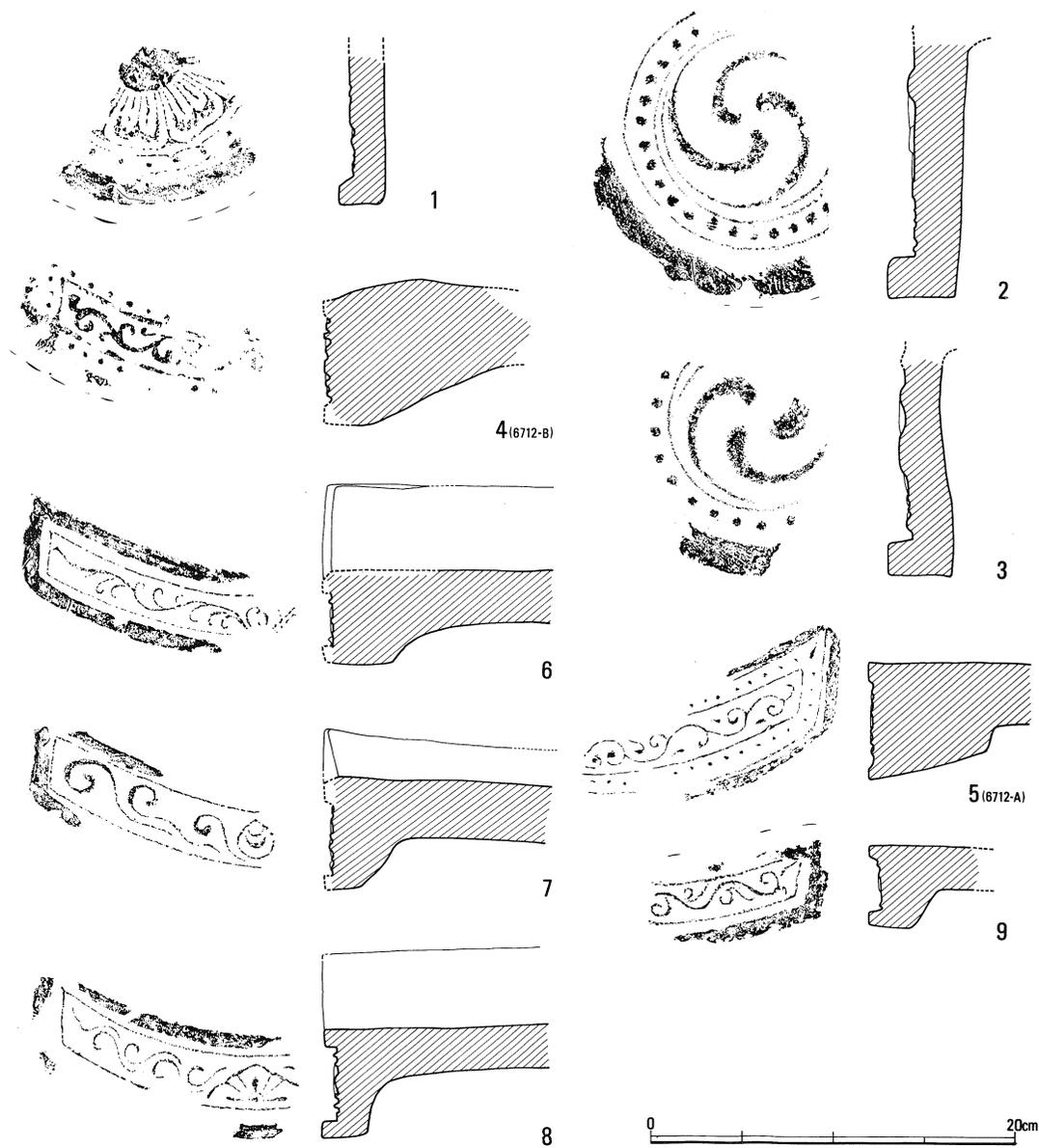
SX03 編平な自然石を積む南北石列。下から1～4石(12～50cm)が遺存しており、延長4.1mを検出した。石列東側には厚さ約0.3mのヘドロ状の黒灰色粘土が堆積することから石組溝の側壁かとも考えられる。黒灰色粘土層から土師器、瓦質土器、陶磁器が出土した。これらの遺物から石組の廃絶年代は18世紀末頃と考えられる。

2 出土遺物

今回の調査では遺構内部、整地層から瓦類、土器類が出土した。以下、瓦類を中心に述べる。

軒丸瓦が3点出土した。1は複弁8弁蓮華文軒丸瓦。蓮弁は平面的であり、間弁は独立せず圏線状にめぐる。中房は突出し、1+6の蓮子を配するものに復原できる。圏線で画された外区内縁には蓮珠文をめぐらせ、外縁は素文である。2は右まわりの巴文軒丸瓦。盛り上りの少ない巴文は尾部が長くのび約半周して末端となる。わずかに痕跡をとどめる程度の圏線によって画された外区内縁には密な珠文を配し、珠文帯の外に一条の圏線をめぐらすことによって外区外縁を画している。外縁は内縁側の縁をヘラにより面取りしている。3は左まわりの巴文軒丸瓦。肉厚の巴文は頭部を巻き込みたがい近接し、太めの胴部に連なる。内外区は圏線によって画され、外区内縁には珠文をめぐらす。以上の3点はいずれも整地層内から出土した。

軒平瓦が7点出土した。5は均正唐草文軒平瓦。いわゆる「大安寺式」といわれるもので、内区にはやや流動性を欠く唐草文を配し、外区には珠文をめぐらす。中心飾りは牛頭状を呈する特徴的なものとなる。平城宮6712-A型式と同範である。4は均正唐草文軒平瓦。5の文様の系統をひくものであるが、中心飾りが半ば消失し、唐草文様の線が太くなるなどやや鈍化している。平城宮6712-B型式と同範である。6は、ハート型に巻き込む形の中心飾りから左右に反転する唐草文を配する軒平瓦。外区は外側の縁がヘラ削りにより面取りされている。平瓦部凹面には、粘土板切取のおりのもと思われる糸切痕跡が残る。7は宝珠かと思われる中心飾りから左右に3回反転する主葉のみの唐草文を配した軒平瓦。唐草文は退化し、やや間のびした印象を受ける。表面は燻しによって銀化している。8は菊花状の中心飾りから左右に反転する唐草文を配する軒平瓦。2個体が出土している。9はやや小ぶりの均正唐草文軒平瓦。中心部から左半を欠損するが、他の出土例からみ



第 11 図 出土軒瓦 (1/4)

てとくに中心飾りをもたないものとなる。これらの軒平瓦は8が石組S X03の裏込めに使用されていたものである他は、いずれも整地層から出土した。

3 まとめ

以上のごとく今回の調査では、当初の目的であった大安寺に直接関る遺構は検出できなかったが、中・近世における付近の利用状況の一端をつかむ資料を得た。ただ、発掘区が小範囲であるため遺構の全容を把握することは不可能であった。そのため、大安寺の伽藍の究明とともにそれ以後の付近の利用状況を明らかにする意味からも、今後の調査に期するところは大きい。

V 81—4 次調査

民家増築に伴う事前調査として実施したものである。調査地は、大安寺僧房推定地（東大房）にあたる。調査面積は約43㎡である。

1 検出遺構

発掘区は約40cm盛土されており、以下旧耕地である淡褐色砂質土、瓦類を含む暗灰色粘質土が堆積する。発掘区の北寄りと南西はこの暗灰色粘質土より掘り込まれた土壌や攪乱による破壊が著しいが、発掘区の中央から東にかけて、僧房に関連する遺構と考えられる基壇築成土を検出した。基壇築成土は黄色粘質土層上に14~15cm遺存するだけで後世の削平が著しい。3~4cmの厚さで黄色の砂層と小礫を混えた土を積みあげている。基壇土上面は削平によって著しくそこなわれていることから、礎石据付痕跡などはまったく見い出せなかった。暗灰色粘質土上面より掘り込まれた土壌の埋土よりは若干の瓦類と凝灰岩片、焼土塊、炭化物などが出土した。

2 出土遺物

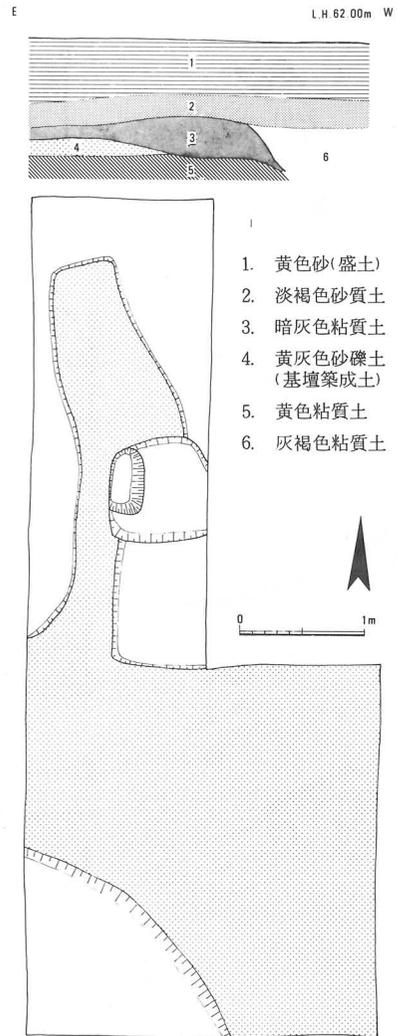
出土した遺物は、瓦類がほとんどであり、その中には軒丸瓦2点、軒平瓦2点がある。

軒丸瓦

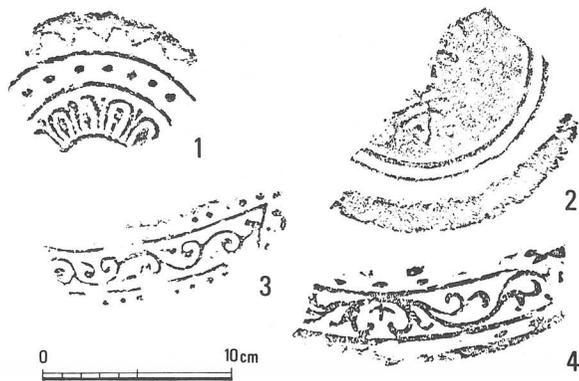
1は単弁12弁軒丸瓦（平城宮6138—E型式）であり、2は縦書きで「大安寺」の文字を配し、その周囲に圏線をめぐらす鎌倉時代の軒丸瓦である。

軒平瓦

3は均整唐草文軒平瓦（平城宮6712—A型式）であり、4は平安時代に時期が求められる軒平瓦で、文様は平面的である。



第 12 図 発掘区堆積土層・平面図（1/60）



第 13 図 出土軒瓦（1/4）

VI 81—5次調査

今回の調査は民家新築の事前発掘調査として実施したもので、調査地は大安寺の寺域であると同時に杉山古墳の前方部南側に相当する。調査地の東側に隣接して1975年に奈良県教育委員会が行った発掘調査では杉山古墳の周濠が検出されており、今回の調査においても調査地は杉山古墳の周濠の一部と^{注)}考えられたため、南北6m、東西1.3mの発掘区を設定した。

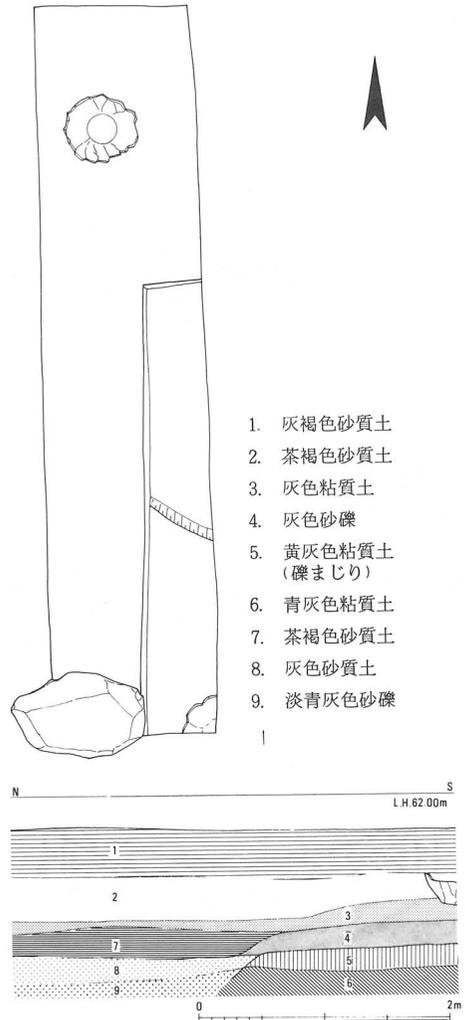
1 検出遺構

発掘区においては、現地表面より平均80cm程度の深さまで、近世の置土と考えられる土層が堆積している。この土層のうち、第2層にあたる茶褐色砂質土上面において埋甕施設2箇所と、礎石の可能性をもつ自然石を検出した。埋甕施設は瓦質の甕を埋置したもので小便壺等の用途が考えられる。

発掘区南寄りでは、さらに杉山古墳の周濠を確認するため下層を掘り下げた。この結果発掘区南端より1.6mのところ、礫まじりの黄灰色粘質土と、さらに下層の青灰色粘質土が途切れ、灰色砂質土と淡青灰色砂礫が堆積していることが明らかになった。灰色砂質土および淡青灰色砂礫層は、いずれも杉山古墳周濠内の堆積土と考えられ、灰色砂質土よりは多数の瓦類が出土し、奈良時代まで杉山古墳の周濠は堀状に遺存していたことが明らかになった。また、これらの土層と近世の土層との間には、瓦類、焼土塊、炭化物を多く含む灰色砂礫が南寄りに堆積し、北側では茶褐色砂質土が堆積している。このことから、近世に整地されるまで、杉山古墳の周濠は窪地として遺存していたことが推察される。なお周濠の底位の確認については、淡青灰色砂礫層よりの湧水が著しく、崩壊の危険性もあったことから掘り下げを断念せざるを得なかった。

注) 奈良県立橿原考古学研究所「大安寺発掘調査概報」

『奈良県文化財調査概要』 1976



1. 灰褐色砂質土
2. 茶褐色砂質土
3. 灰色粘質土
4. 灰色砂礫
5. 黄灰色粘質土 (礫まじり)
6. 青灰色粘質土
7. 茶褐色砂質土
8. 灰色砂質土
9. 淡青灰色砂礫

第 14 図 発掘区堆積土層・平面図 (1/60)

2 遺物

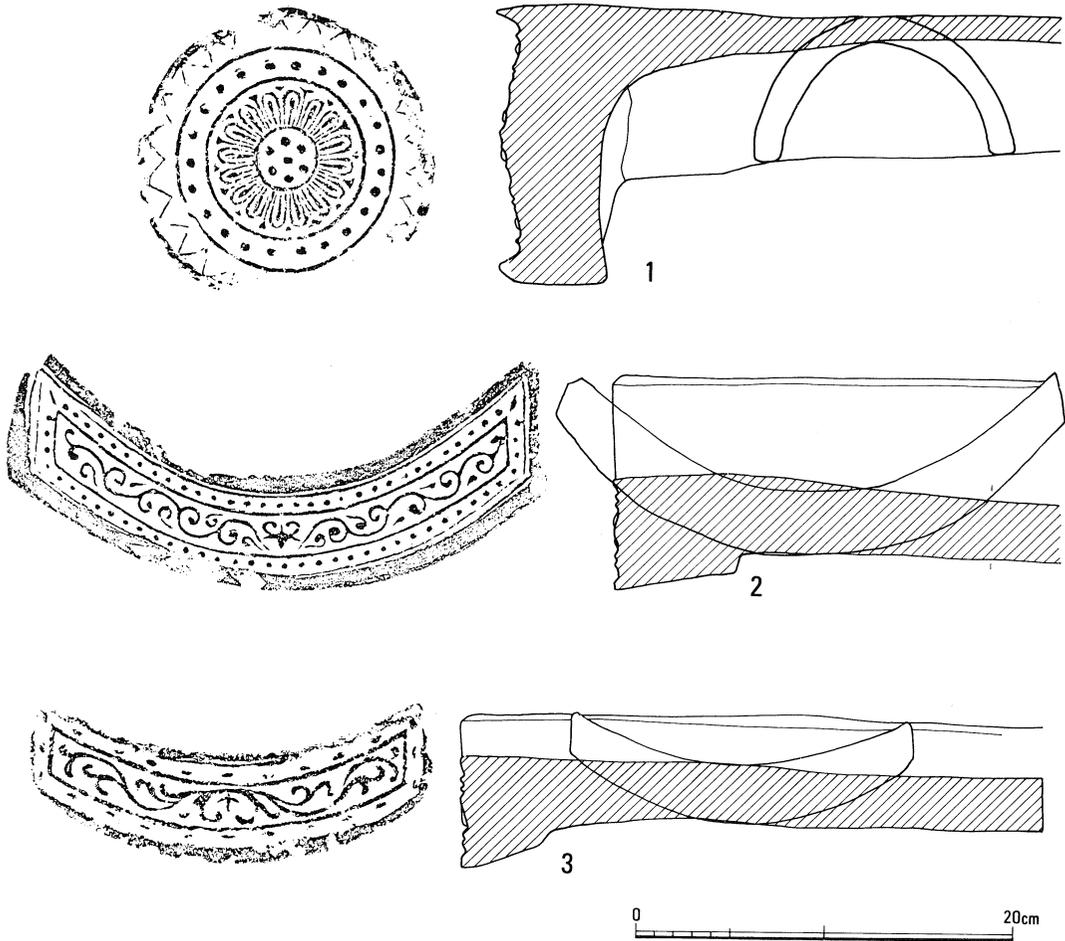
出土した遺物は、埋甕として使用されていた近世の瓦質土器甕を除き、瓦類が大部分である。瓦類のほとんどは丸瓦・平瓦であるが灰色砂質土より出土したものの中に軒丸瓦1点、軒平瓦4点がある。

軒丸瓦

1は、線鋸齒文珠文縁の複弁8弁蓮華文軒丸瓦（平城宮6304-D型式）である。大安寺では講堂・中門・南大門地区などでの出土例が知られている。

軒平瓦

2はいわゆる「大安寺式」と呼ばれる均整唐草文軒平瓦（平城宮6712-A型式）である。3点出土した。一連にのびたや流動性の欠く唐草文を内区主文とし、外区には小さな珠文を密にめぐらす。牛頭状にみえる中心飾が特徴的である。3は、平安時代に属すると思われる小型の軒平瓦である。奈良時代の文様構成の系統をひき 81-4次調査でも出土している。



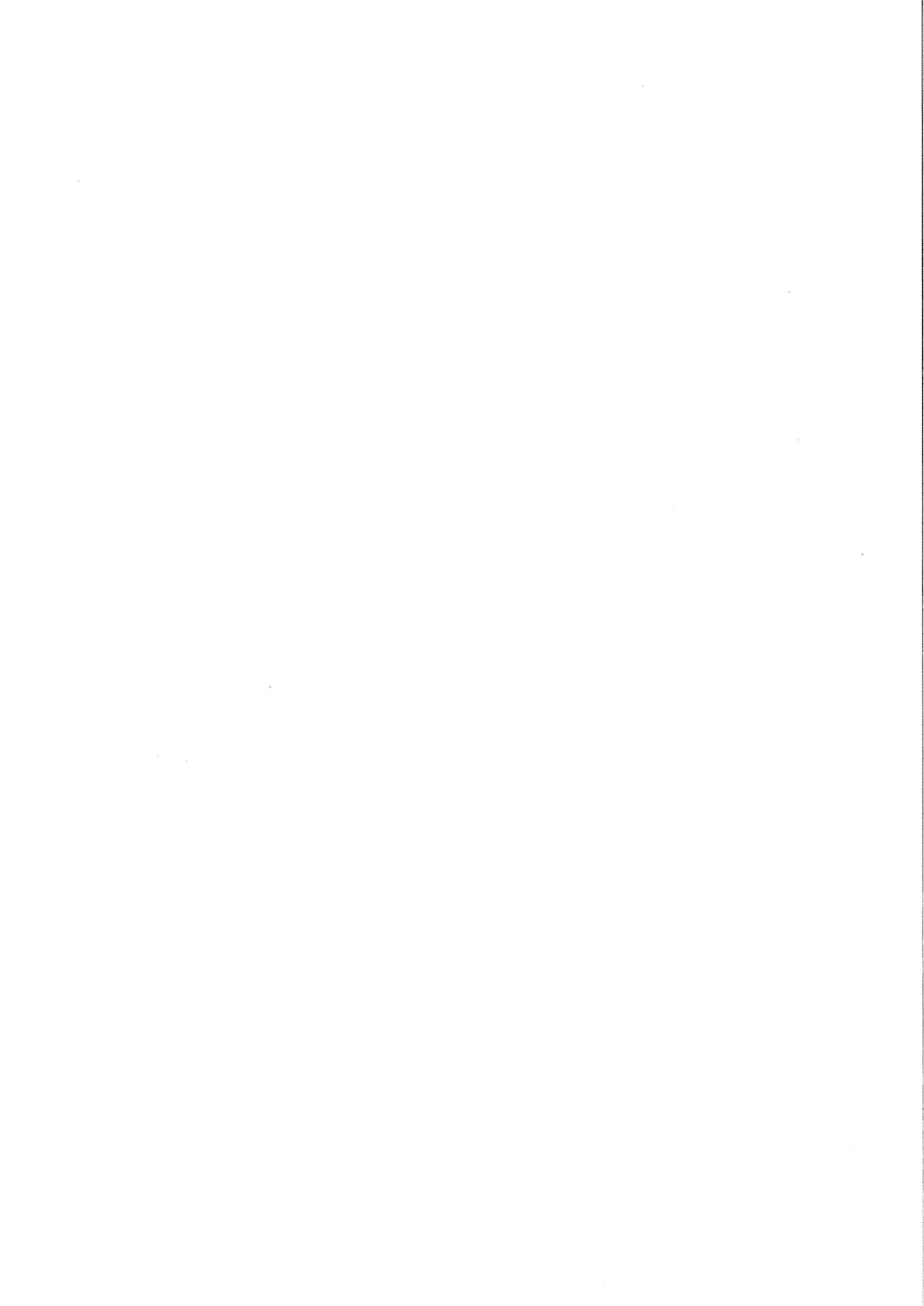
第 15 図 出土軒瓦（1/4）



1. 発掘区全景（東から）



2. 建物SB01（北から）





1. 第1トレンチ全景（南から）



2. 第1トレンチ全景（東から）





1. 発掘区全景（北から）

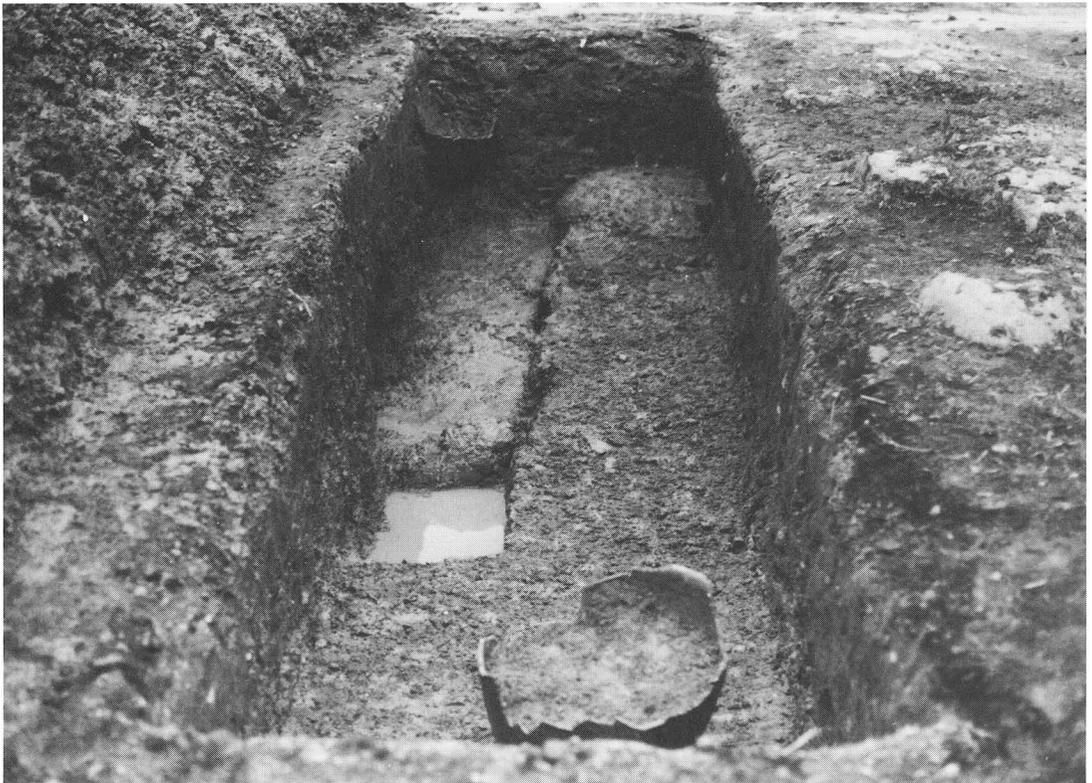


2. SX03裏込め石

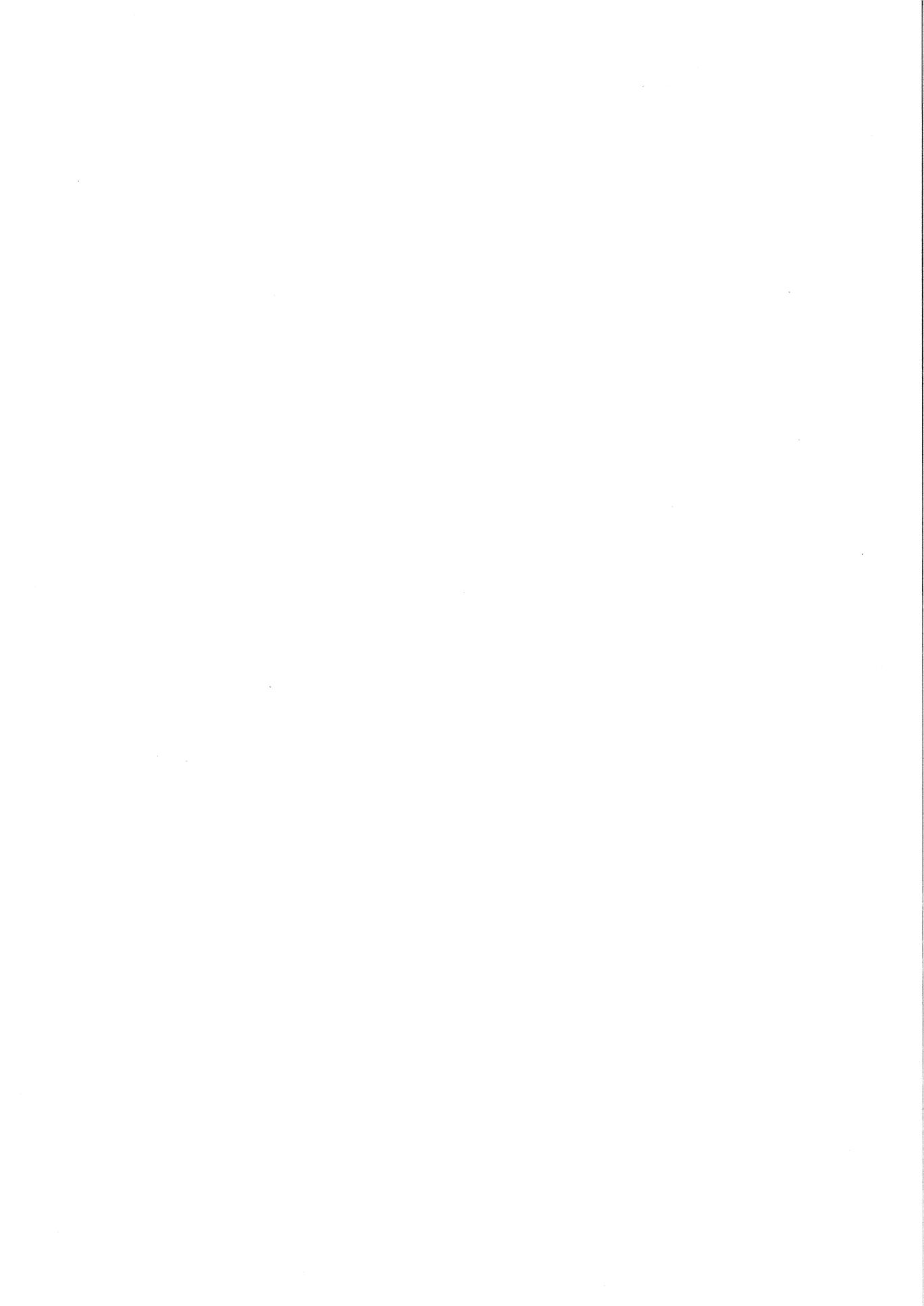




1. 81 - 4 次調査発掘区全景（南から）



2. 81 - 5 次調査発掘区全景（北から）



元興寺旧境内発掘調査報告

例 言

1. 本書は元興寺旧境内において、奈良市中新屋町29番地野崎充亮氏宅改築に伴い実施した事前発掘調査の報告である。
1. 発掘調査は国庫補助金の交付を受け行った。
1. 発掘調査は昭和56年6月5日から同年6月11日にかけて行った。
1. 発掘調査は奈良市教育委員会社会教育部文化財課が行い、西崎卓哉、中井公、篠原豊一が現地を担当した。
1. 発掘調査にあたっては奈良国立文化財研究所の御指導、御協力と、土地所有者の御理解を得た。記して感謝する。
1. 本書の執筆、編集は担当者全員の討議をもとに篠原豊一が行った。

目 次

I	はじめに	169
II	検出遺構	170
III	出土遺物	171
IV	まとめ	172

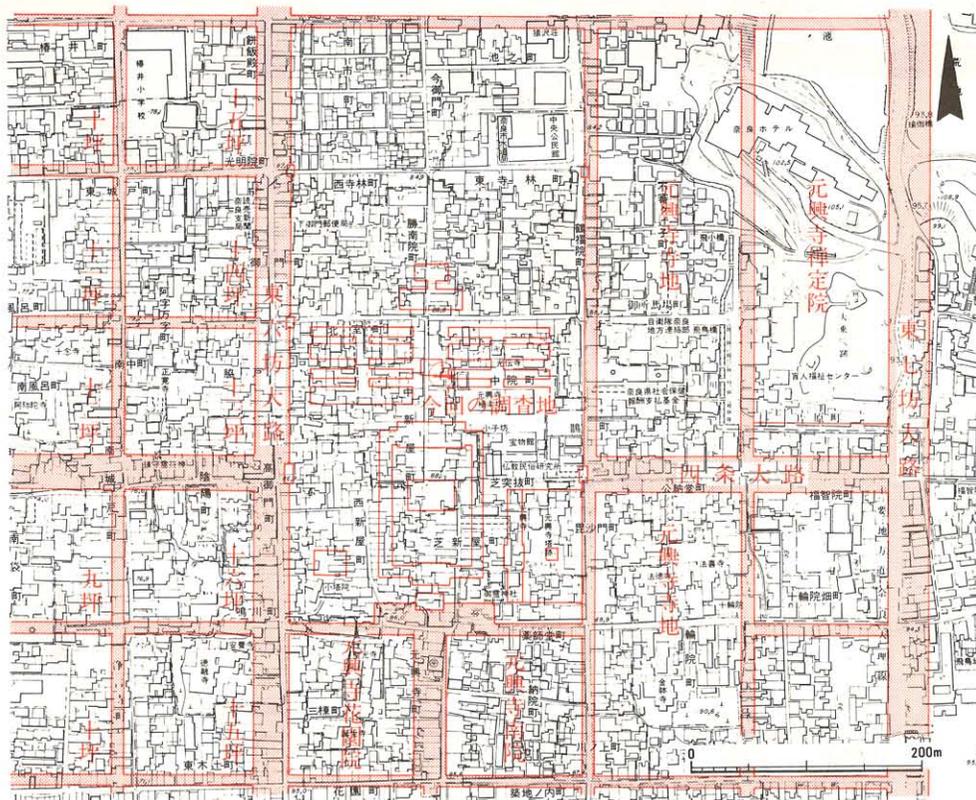
I はじめに

元興寺は平城京の条坊では左京四条七坊から五条七坊にかけて東西四町、南北五町の広大な範囲をその寺地としていた。元興寺周辺は古くから市街地化が進み、現在では、僧房の東室南階大房にあたる極楽坊と史跡に指定されている東塔跡、小塔院跡が当時の様相を残すのみである。

近年、旧奈良市街区では木造住宅の老朽化が進むにつれ住宅の改築、新築が数多く行われており、今回の調査も店舗付住宅の改築に伴う事前発掘調査として実施した。調査地は、現在の行政区分では奈良市中新屋町29番地にあたり、元興寺の主要伽藍である鐘楼推定地に近接する。

当初、調査は住宅の基礎部分の掘削に際し奈良県教育委員会文化財保存課が立会調査を行い、奈良市教育委員会文化財課がこれに協力するというものであった。ところが立会調査実施中に2個の礎石が出土したため、急拠工事を中止し土地所有者（野崎充亮氏）、奈良県教育委員会および奈良市教育委員会が協議を行った結果、市教育委員会文化財課が発掘調査を実施することになった。

以上のような経過から、調査は礎石周辺の遺構検出と、建物基礎部分の土層観察にとどまった。



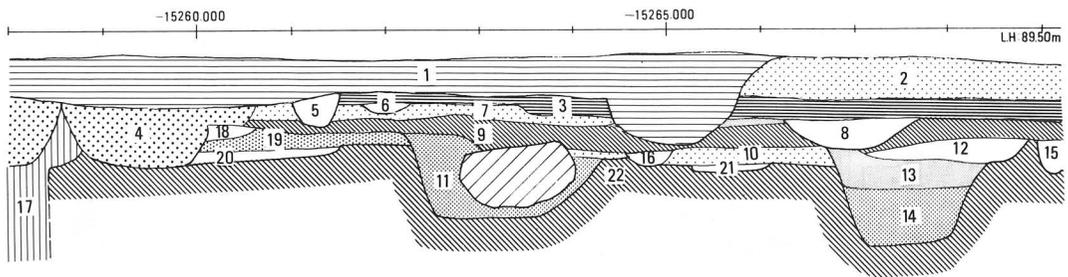
第 1 図 発掘区の位置と周辺の条坊 (1/6000)

II 検出遺構

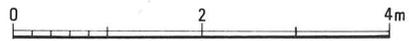
土層は大きく上層、中層、下層にわけられる。上層は地表面から瓦礫を含む黒灰色礫土層、黒灰色土層が約40~50cmにわたって堆積する。近現代の遺物が出土した。中層は暗灰色土層、暗茶褐色土層、暗褐色砂質土層で約40~50cmにわたって堆積する。土師器皿や瓦片など近世の遺物が出土した。下層は黄灰色砂質土層、黒灰色土層で約20cmにわたって堆積する。地山は黄褐色砂質土層である。発掘区の南側で、井戸1基、土塋3を検出した。

SE01 発掘区の南側中央で検出した円形の掘方をもつ素掘り井戸（径0.8m）である。中層から掘り込まれた近世の井戸である。

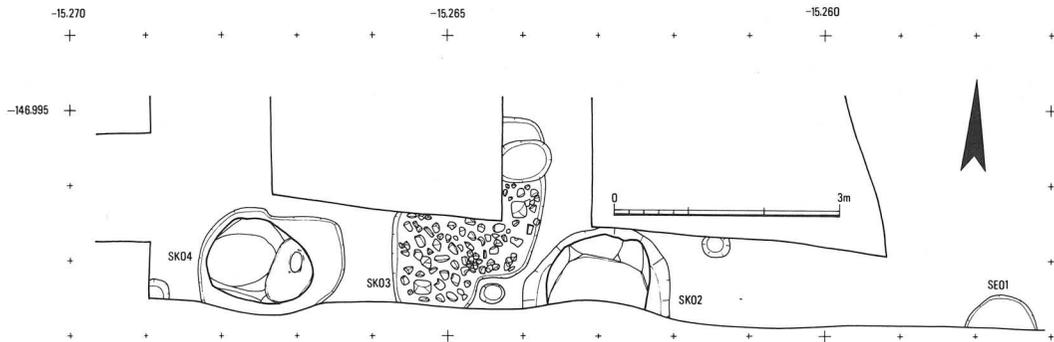
SK02 発掘区の南側で検出した円形の土塋。径1.8m、深さ1.0mである。土塋中央に礎石



- | | | |
|------------|--------------------|--------------------|
| 1. 黒灰色礫土 | 9. 暗褐色砂質土 | 17. 黒灰色砂質土 |
| 2. 黒灰色土 | 10. 黒灰色粘質土 | 18. 黒色土 |
| 3. 暗茶褐色砂質土 | 11. 灰色砂質土(SK02埋土) | 19. 黄灰色砂質土 |
| 4. 茶褐色砂質土 | 12. 淡灰色砂礫 | 20. 黒灰色土 |
| 5. 黒色砂土 | 13. 黄褐色砂質土(SK03埋土) | 21. 暗黄色粘質土(SK03埋土) |
| 6. 暗褐色砂土 | 14. 黄灰色砂礫(SK03埋土) | 22. 黄褐色砂質土(地山) |
| 7. 暗茶褐色土 | 15. 茶灰色粘質土 | |
| 8. 黒色土 | 16. 青灰色砂土 | |



第 2 図 発掘区南壁堆積土層図 (1/80)



第 3 図 発掘区検出遺構平面図 (1/80)

が落とし込まれている。礎石上面は南東に向って傾いている。

SK03 発掘区の南側で検出した浅い土壙。東西1.8m、南北2.1m、深さ0.1mである。一面に拳大の自然石を敷き詰める。

SK04 発掘区の南側で検出した円形の土壙。径2.0m、深さ0.9mである。土壙中央に礎石が落とし込まれている。礎石上面は東に向って傾いている。

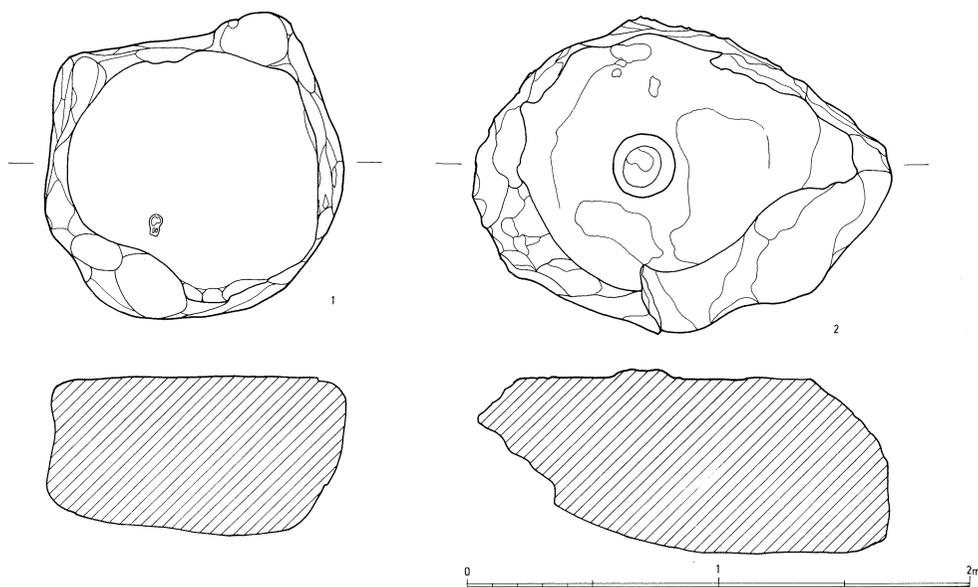
SK02、04で検出した礎石は原位置を保っておらず、土壙は下層から掘り込まれている。中世末から近世にかけて、発掘区周辺を整地した際に、穴を掘り礎石を落とし込んだと考えられる。礎石は北西から南東に向って落とし込まれた形で検出した。このことからこれらの礎石を使用した建物は発掘区の北側にある可能性が強いと考えられる。北側の土層を観察したが建物の痕跡と考えられる層を確認することはできなかった。

Ⅲ 出土遺物

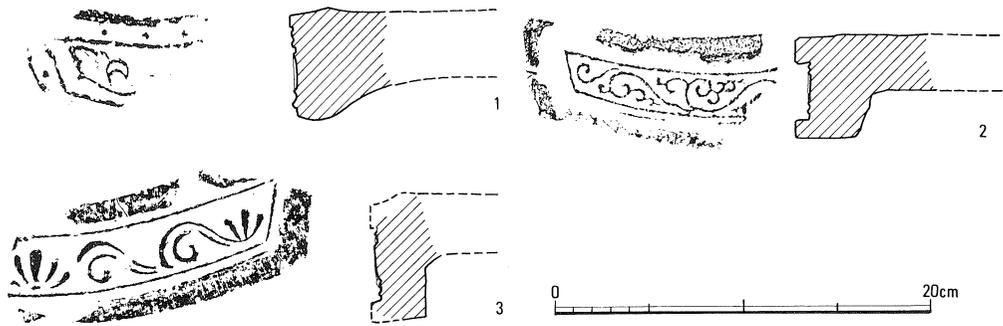
出土遺物には土壙SK02、SK04出土の礎石と、中層から出土した軒平瓦、土器皿がある。

礎石（第4図）

1はSK02から出土した礎石。長さ1.1m、幅1.1m、厚さ0.7mである。上面は平らで、全面にノミ痕跡が残る。上面の一部に深く刻まれた痕跡（長さ7cm、幅5cm、深さ2cm）がある。上面に造り出しは持たない。2はSK04から出土した礎石。長さ1.5m、幅1.2m、厚さ0.7mである。



第4図 礎石 (1/30)



第 5 図 出土軒平瓦 (1/4)

る。上面は平らで中央に約25cmの造り出しを持つ。上面全体にノミ痕跡を残す。側面は剥落が著しい。いずれの礎石も材質はカコウ岩製で、柱座と柱朱痕跡はない。

軒平瓦 (第5図)

1は瓦当面对し左半の一部が残る。内区に宝相華文を飾り、外区に珠文を配した唐草文軒平瓦である。2は瓦当面对し左半が残る。内区に唐草文を飾る唐草文軒平瓦である。3は瓦当面对し右半を残す。内区の中心に五葉の菊花文を配し、3回反転した唐草文を飾る唐草文軒平瓦である。これらの軒平瓦はいずれも中、近世のものである。

IV ま と め

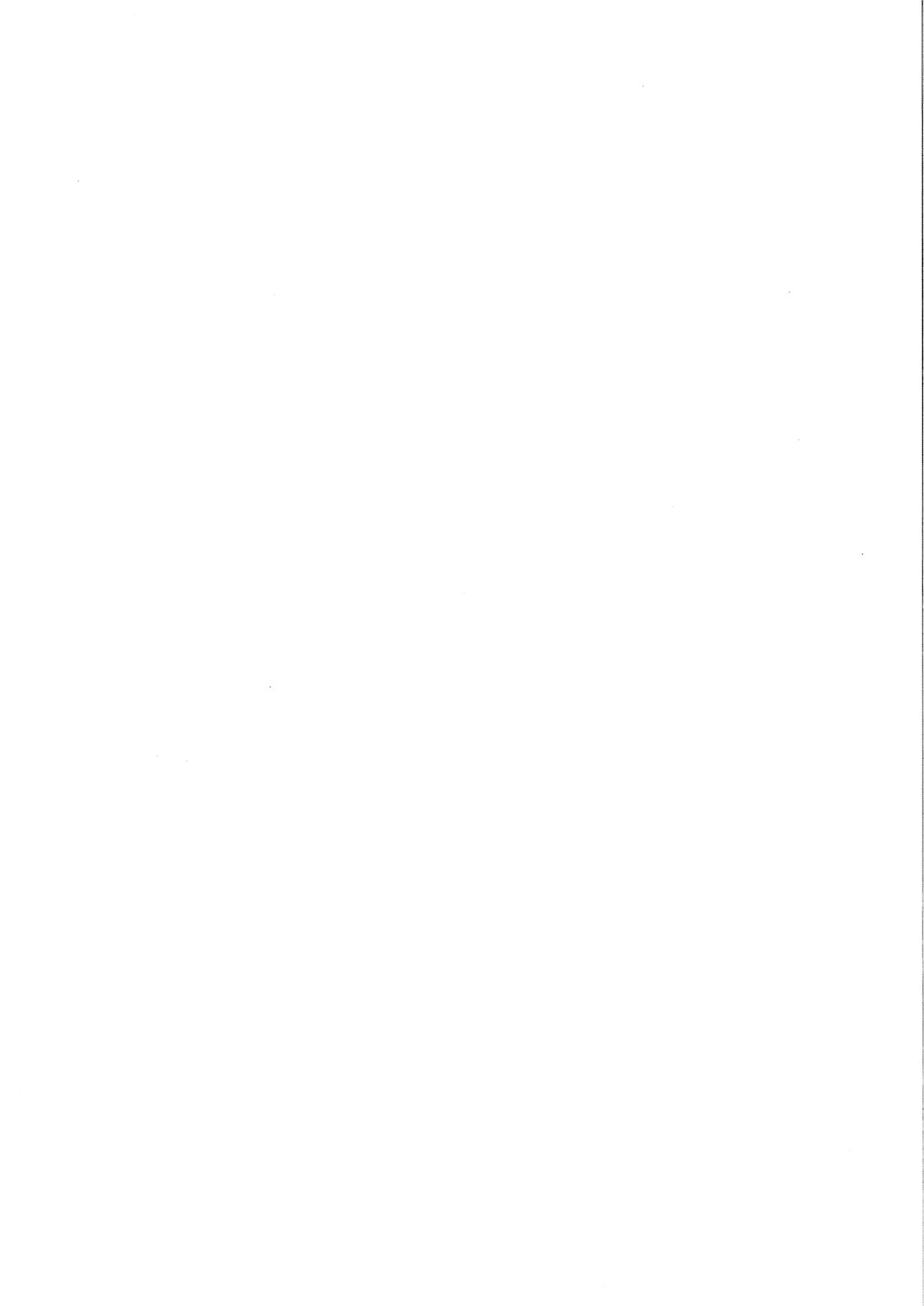
今回の調査で検出した礎石は、その位置からみて鐘樓の礎石である可能性が強いが、いずれも原位置を保っておらず、また建物痕跡を検出することができなかつたため確証を得ることはできなかった。元興寺金堂跡の調査でも今回と同様に土壌中に礎石が落とし込まれていたことが知られているが、この調査では土壌北側で金堂基壇を確認しており、基壇上面で礎石の据付痕跡を検出している。そこで金堂跡から出土している礎石と今回のものを比較すると、礎石そのものの大きさはほぼ同じであるが、金堂跡のものは上面中央に径約50cmの円形造り出しをもち、さらにひとまわり大きい柱座をもっていることがわかる。

調査終了後、礎石が原位置を保もないまま住宅基礎中に埋設される事態に陥つたため、奈良国立文化財研究所の協力を得て礎石を引き上げた。現在、奈良市役所前庭に据え、展示保存している。

注) 奈良県教育委員会『元興寺金堂跡発掘調査概報』 1975



1. 発掘区全景（西から）



東大寺旧境内発掘調査報告

例 言

1. 本書は史跡東大寺旧境内の3箇所の現状変更（民家改築および増築）にともなう事前発掘調査の報告である。
1. 発掘調査は昭和56年度国庫補助金の交付を受けて行なった。
1. 発掘調査は、奈良市教育委員会社会教育部文化財課が行い、森下恵介、篠原豊一が現地調査を担当した。それぞれの担当は目次に明らかにした。なお調査補助員として友貞菜穂子、平田博幸、奈良美穂、草野誠司、千代田秋充、鄭 喜斗、霜鳥純一の各氏（奈良大学学生）の参加があった。
1. 発掘調査にあたっては、土地所有者各位の御理解と御協力を得るとともに、計測座標の設定には、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部本中 真氏の手を煩した。記して感謝したい。
1. 本書の執筆、作成は各調査担当者が分担して行い、文責は目次に明らかにした。また、全体の編集は執筆者との討議をもとに西崎卓哉が行った。

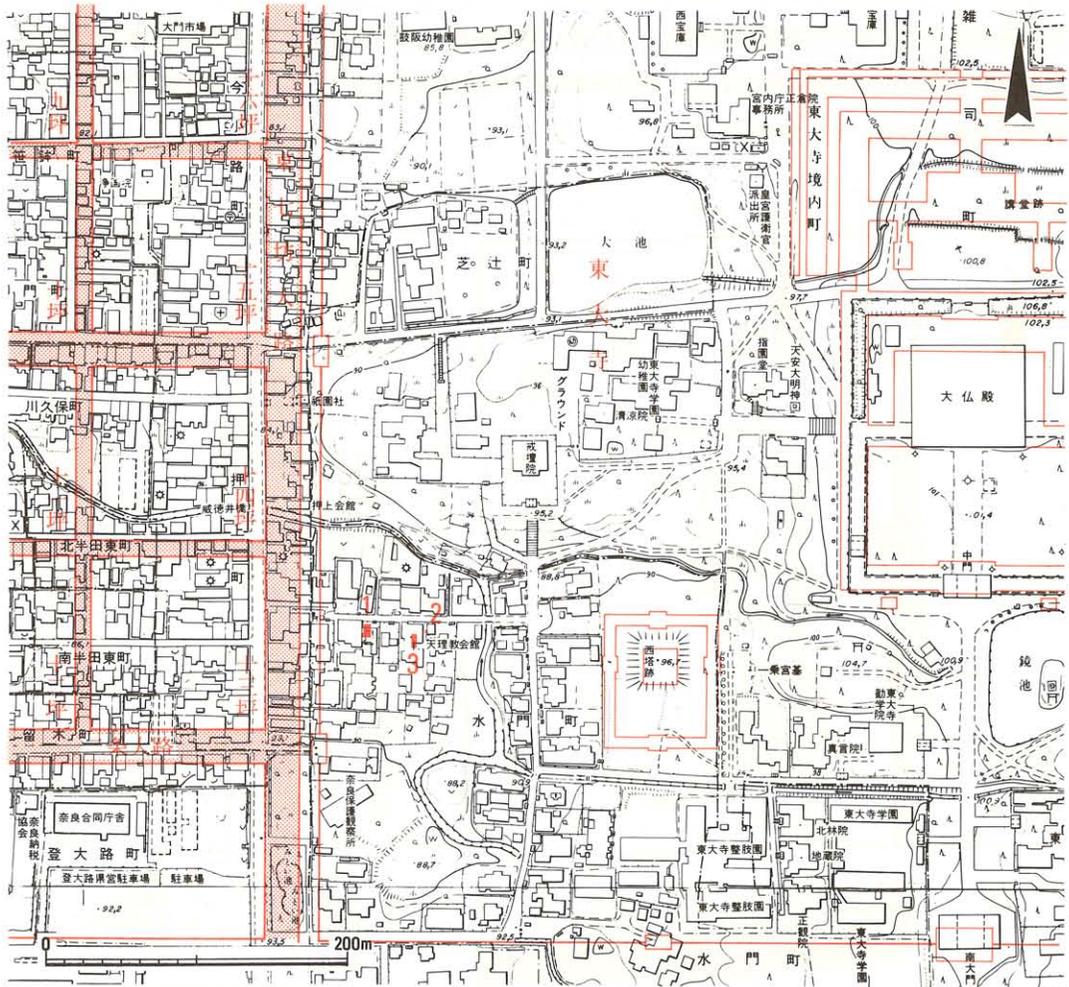
目 次

I	はじめに	（森下恵介）	177
II	81—1次調査	（篠原豊一）	178
III	81—2次調査	（森下恵介）	183
IV	81—3次調査	（篠原豊一）	185

I はじめに

今年度、東大寺旧境内の3箇所において発掘調査を実施した。いずれも奈良市水門町の一画での民家改築に伴う事前発掘調査である。調査地の位置および調査期間は下記の表に示した。この地は東大寺の寺域の中でも西面築地にほど近く、中、近世には塔頭が建ち並んでいた所である。

	調 査 地	所 有 地	調 査 期 間
81 - 1	奈良市水門町35の5番地	上 司 延 明	昭和56年6月20日～同年7月9日
81 - 2	奈良市水門町37番地	稲 垣 多嘉子	昭和56年10月21日～同年10月27日
81 - 3	奈良市水門町36の1番地	向 正 善	昭和57年3月1日～同年3月9日



第 1 図 発掘区の位置と周辺の条坊 (1/5000)

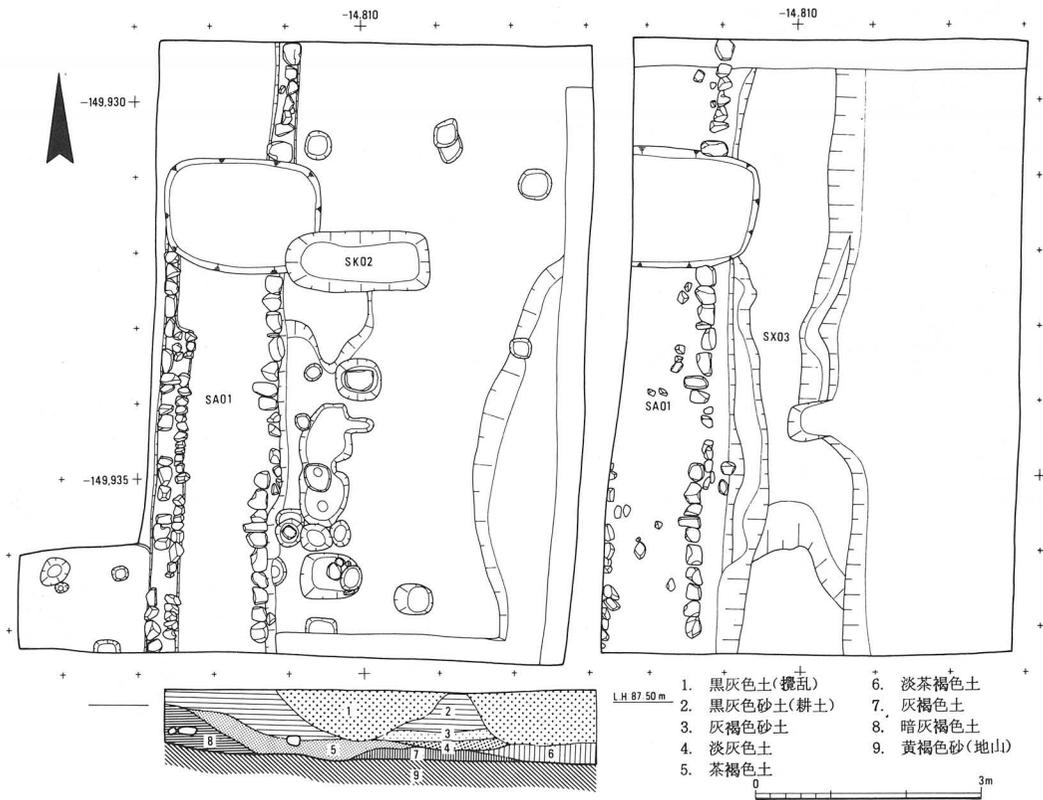
Ⅱ 81 - 1 次 調 査

今回の調査は奈良市水門町35-5番地の民家改築に伴う事前発掘調査である。発掘区は敷地のほぼ中央に東西5m、南北8m(面積40㎡)を設定した。

1. 検出遺構

発掘区の土層堆積は以下のようなものである。地表面から50~60cmにわたって表土である黒灰色土が堆積する。この層は地表面からの攪乱を大きく受けている。表土以下、順に、灰褐色土、淡茶褐色土、灰褐色土、暗灰褐色土が堆積し、約60cmで地山である黄褐色砂礫層に達する。地山は西から東へゆるやかに傾斜している。以下、検出した遺構の概要を記述する。

SA01 発掘区の西側で、南北築地塀の基礎部分を幅40cm、長さ6m分検出した。幅10~20cmの自然石を2列に並べて築地の基礎としている。築地基礎の東側で自然石の面を東に合わせて一列に並べた石列を長さ8m分検出した。築地基礎と石列の間は1.1mあり、この間は築地の犬走りにあたると思われる。8m分検出した。



第 2 図 発掘区検出遺構平面図・東壁推積土層面 (1/100)

SK02 発掘区の中央で検出した隅丸長方形の土塼。東西2.0m、南北0.8m、深さ0.4mを測る。埋土から土師器皿、瓦器碗、石製品が出した。

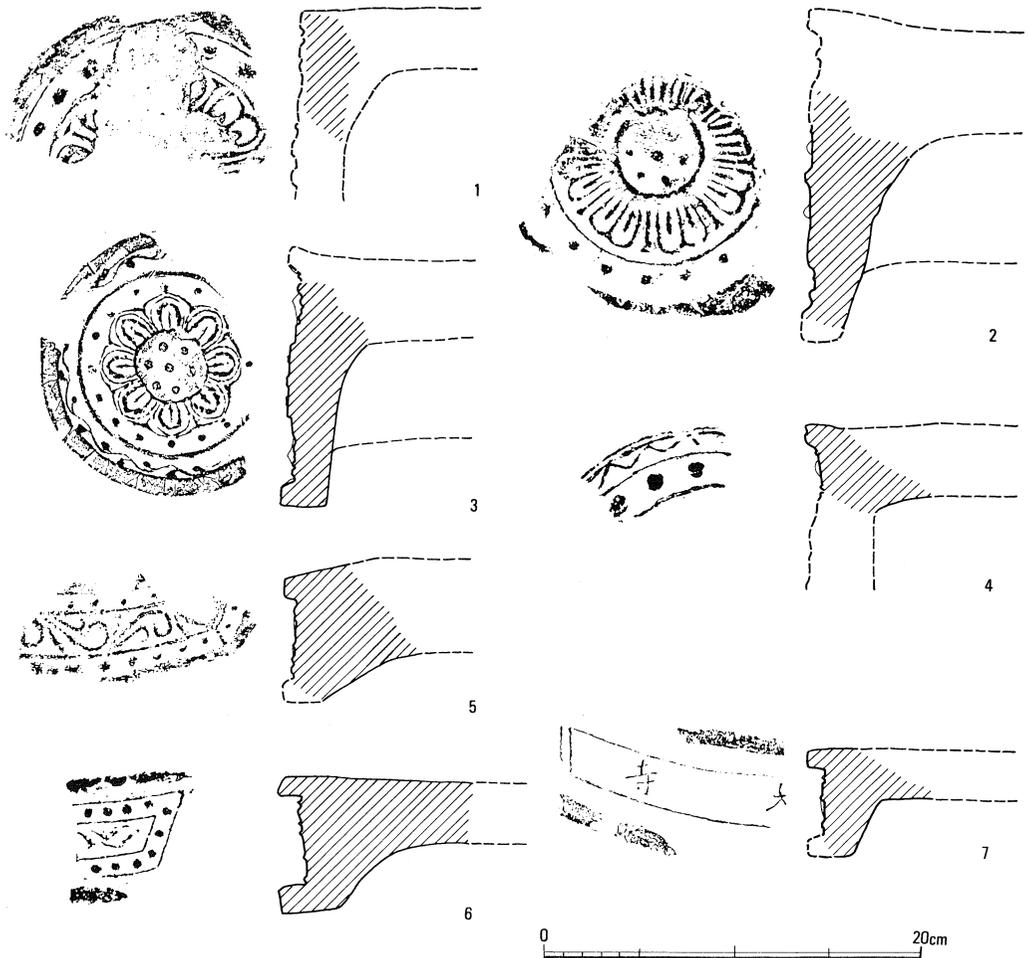
SX03 SA01の東側にそって幅2m前後のよくしまった土層の堆積を確認した。土師器皿片、瓦器片を含む厚さ約3cm程度の土層が版築状に堆積する。全体の厚さは約30cmである。道路遺構かとも考えられる。

柱穴群 発掘区の南、SA01の東で柱穴を検出した。柱穴は、一辺40cm前後の掘方を持ち、中央に自然石を埋置したのもみられるが、発掘区の面積が狭いため、建物としてはまとまらない。

2 出土遺物

軒瓦（第3図）

1・2は複弁8弁蓮華文軒瓦で外区内縁に大ぶりの珠文を配する。1は瓦当上半が残存する。

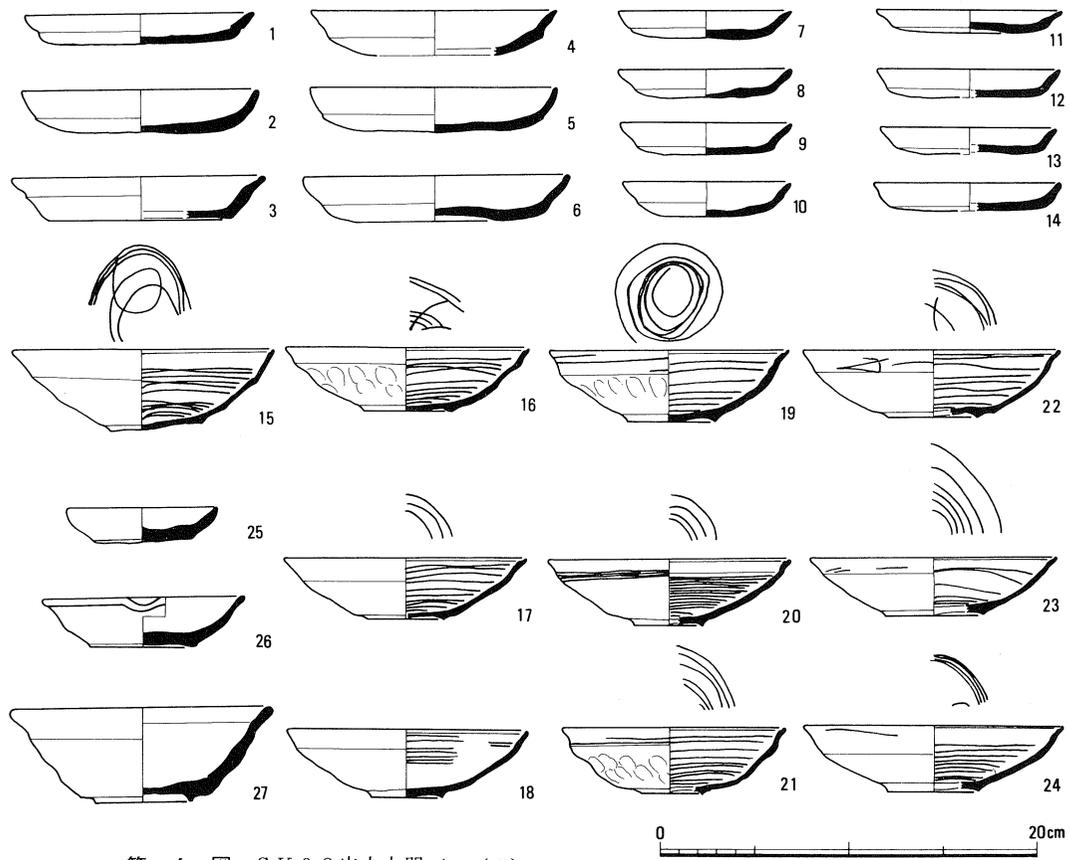


第 3 図 出土軒瓦（1／4）

平城宮6235-E型式と考えられる。2は瓦当下半が残存する。平城京6235-F型式と考えられる。3は単弁8弁蓮華文軒丸瓦で内区と外区を区画する圏線はなく外区内線に珠文を配し、外区外線に唐草文を飾る。平安時代の瓦と考えられる。4は軒丸瓦の外区の一部が残存し、外区内線には大ぶりの珠文を配し、外区外線には凸線鋸歯文を飾る。5は均整唐草文軒平瓦で外区に珠文を配し、内区に唐草文を飾る。平城宮6691-A型式と考えられる。6・7は中近世の瓦である。

SK02出土土器(第4図)

土師器皿(1~14)、瓦器碗(15~24)、須恵器皿(25・26)、須恵器碗(27)が出土した。1~14は土師器皿。大皿(1~6;口径12.0~14.3cm、器高2.0~2.5cm)と小皿(7~14;口径9.0~10.0cm、器高2.0cm)に区分できる。底部は平底で体部は外反し、口縁部外面下半までよこなで調整する。色調は黄褐色か赤褐色を呈する。胎土中に砂粒を含む。瓦器碗は口径11.3cm~13.6cm、器高3.0~4.3cmで内面、口縁部外面はよこなで調整し体部外面には指押え痕跡が残る。内面のへら磨きは粗く、見込み部分には渦巻状暗文を施す。外面の一部に粗いへら磨きを施す。18は内面が磨滅し朱が付着する。25は口径8.0cm、器高2.0cmで、色調は乳灰色で胎土は粗い。26は片口をもち口径11.0cm、器高2.8cmで色調は黒灰色で胎土はこまかい。25・26の内面は磨滅し26の内面には



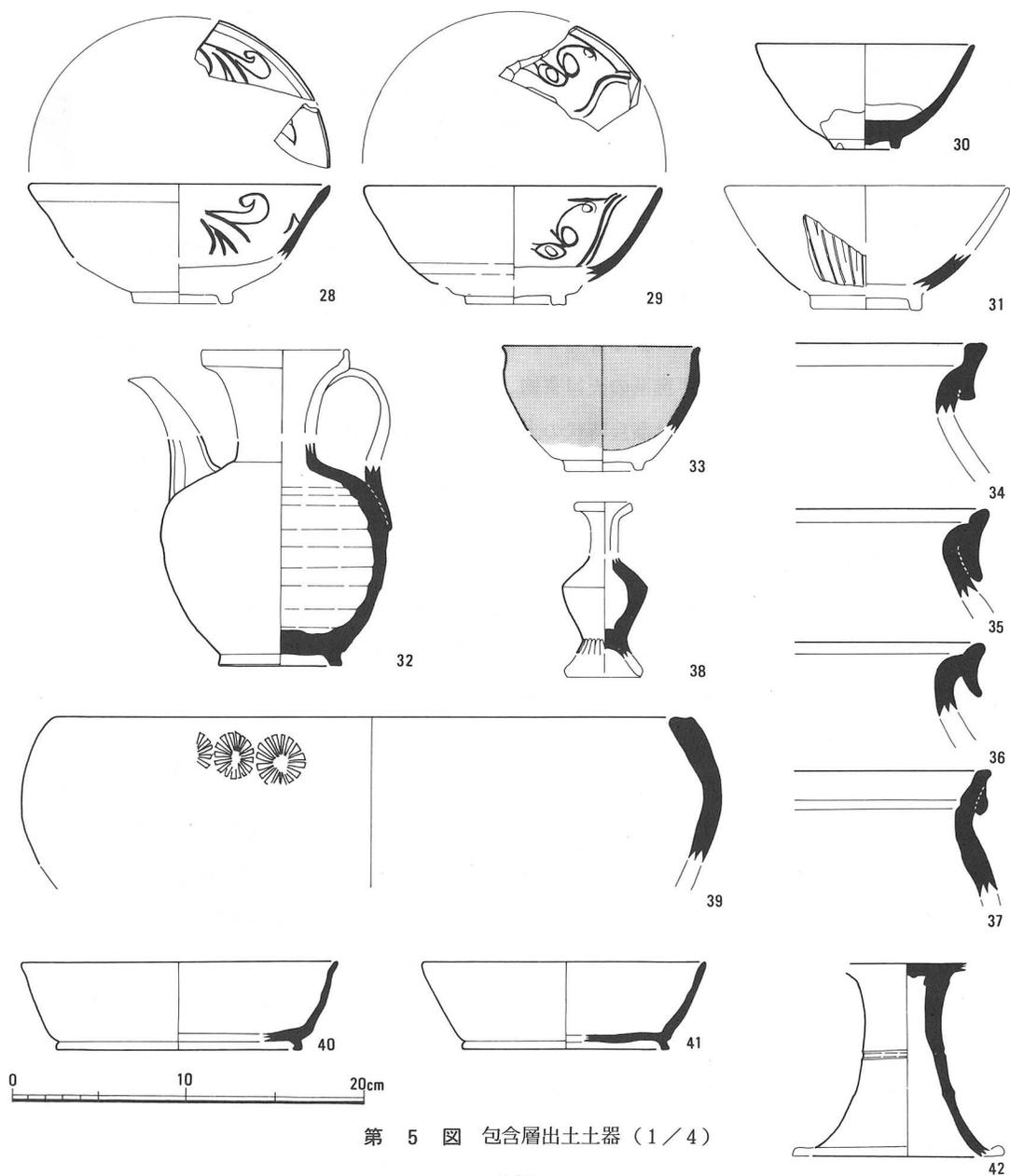
第4図 SK02出土土器(1/4)

朱が付着する。27は東海系の山茶碗。口径12.6cm、器高5.0cmで色調は乳灰色で胎土は粗い。

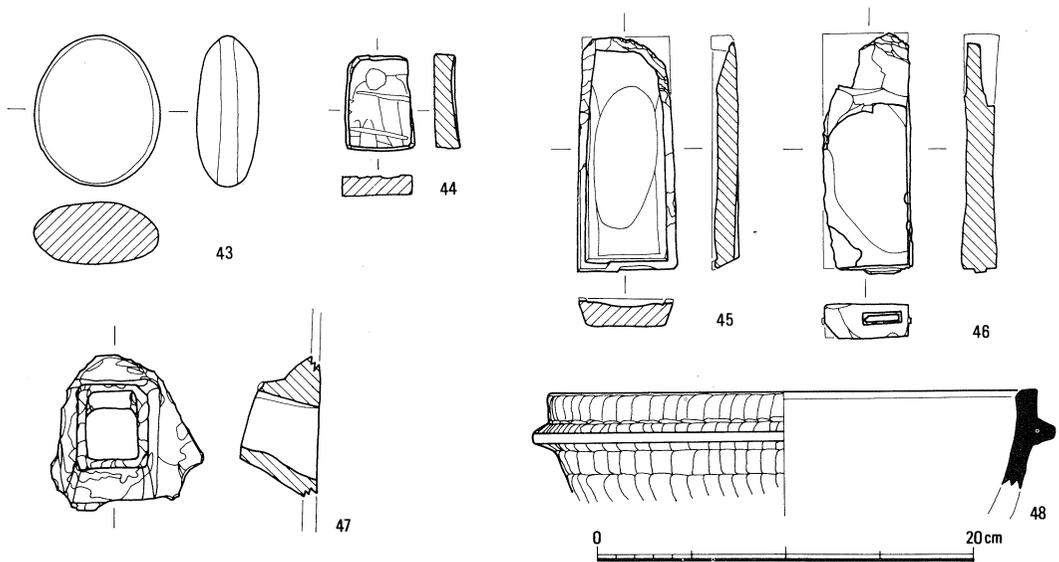
包含層出土土器（第5図）

青磁碗（28～31）、青磁水注（32）、施釉陶器碗（33）、陶器甕（34～37）、瓦質花瓶（38）、瓦質火舎（39）、須恵器碗（40～41）、須恵器高杯（42）などが出土した。

28は内面に蓮華文を片彫りしている。釉の発色は茶黄色で胎土は密である。29は2本の沈線によって体部内面を分割し、その間に飛雲文を配する。釉の発色は青緑色である。28・29は龍泉窯系の青



第5図 包含層出土土器（1/4）



第 6 図 出土石製品・金属製品 (1/4)

磁碗とおもわれる。32はほぼ球形の胴部をもつ。釉の発色は黄褐色で胎土は密である。中国越州窯系の水注とおもわれる。33は瀬戸窯系の天目茶碗。34~37は常滑窯系の大甕口縁部。34は胎土中に細かい、黒粒を含む。40・41・42は奈良時代の土器。40・41は杯B、42は高杯の脚部である。

石製品・金属製品 (第6図)

S K 0 2 から擂石 (43)、滑石石製品 (44)、石硯 (45)、砥石 (46) が、包含層から滑石製石鍋 (47)、鉄製鍬 (48) が出土した。

43は隋円形の自然石 (径8.0cm) で側面が磨滅する。44は方形の石製品 (長さ5.0cm、幅3.6cm、厚さ1.2cm) で上面に削り痕跡が残る。45は青灰色の粘板岩製の硯 (長さ12.5cm、幅5.2cm) で内面に墨が付着する。46は黄褐色の粘板岩製で側面に凸帯をもつ。表裏両面に磨滅痕跡が残る。47は鍬の柄付部分である。

3. まとめ

江戸時代の初めに描かれた「東大寺寺中寺外惣絵并山林」によれば調査地付近には築地で囲まれた衆徒屋敷があったことがわかるが、上司家は代々手向山八幡宮の宮司として当時からこの地に屋敷をかまえていたことが知られ、今回の築地はこの絵図の中に描かれている西側の築地か、もしくは屋敷内を区画する築地と考えられる。またS K 0 2からは朱の付着し、磨滅した土器と擂石が出土し、周辺からはふいごの羽口、鉄滓などが出土した。柱穴群は、これらの遺物を使用した工房跡かと思われる。遺物からみてこれらの遺構の年代は13世紀頃に求められるが、この時期は、東大寺の再建時にあたり、この際の工房跡である可能性が考えられる。しかしその全容は発掘面積が狭いため明らかにすることはできなかった。

Ⅲ 81-2 次調査

1. 調査の内容

調査地は、81-1次調査と同じく奈良市水門町の住宅地の一画である。民家の増築に伴う事前発掘調査であるため、敷地内の空間地が狭く、その増築予定地に小規模な発掘区(1m×4m)を設定しえたにすぎない。

発掘区においては、現地表面より約60cmまで近世の整地土層と考えられる土層であり、その下の明茶褐色土層上面において石敷らしきものを検出した以外、顕著な遺構はみられず、地表下1.1mで地山である灰褐色砂礫層を確認した。なお、調査区南寄りでは、明茶褐色土層を切り込み、焼土塊、炭化物を含む黒褐色土層がみられ、この土層よりは、比較的まとまった鎌倉期の遺物が出土した。

2. 出土遺物

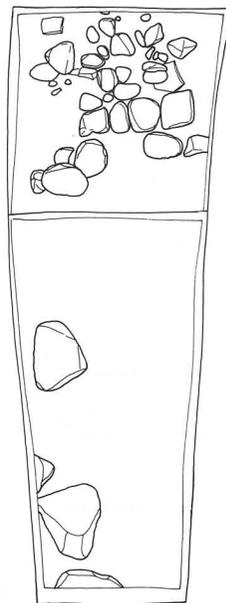
今回の調査で出土した遺物には、近世の整地土層より出土した陶磁器、瓦類が若干ある他、黒褐色土層より出土した瓦類、土器類がある。黒褐色土層より出土したものが比較的量も多く、時期的にまとまりをみせているため、以下、報告する。

瓦類

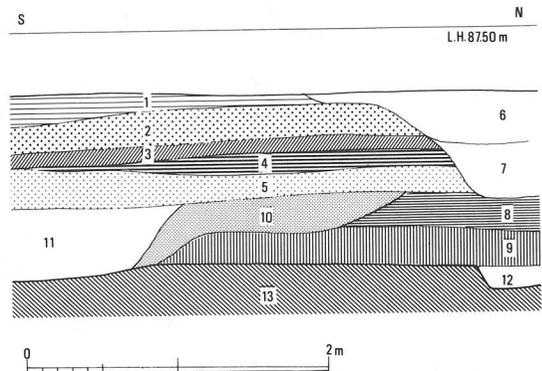
丸瓦・平瓦がほとんどであるが、軒丸瓦1点、軒平瓦2点がある。1は右回りの三巴文の軒丸瓦で、巴文の頭部は尖り、尾部は長くほぼ半周する。外区には小さな珠文をめぐらす。2は、変形した唐草文様を内区に飾る軒平瓦である。上下の外区には小さな珠文をまばらに配しており、外縁は厚い。3は細線の唐草文様を内区の主文とする軒平瓦であり、界線によって外区とを画している。

土器類

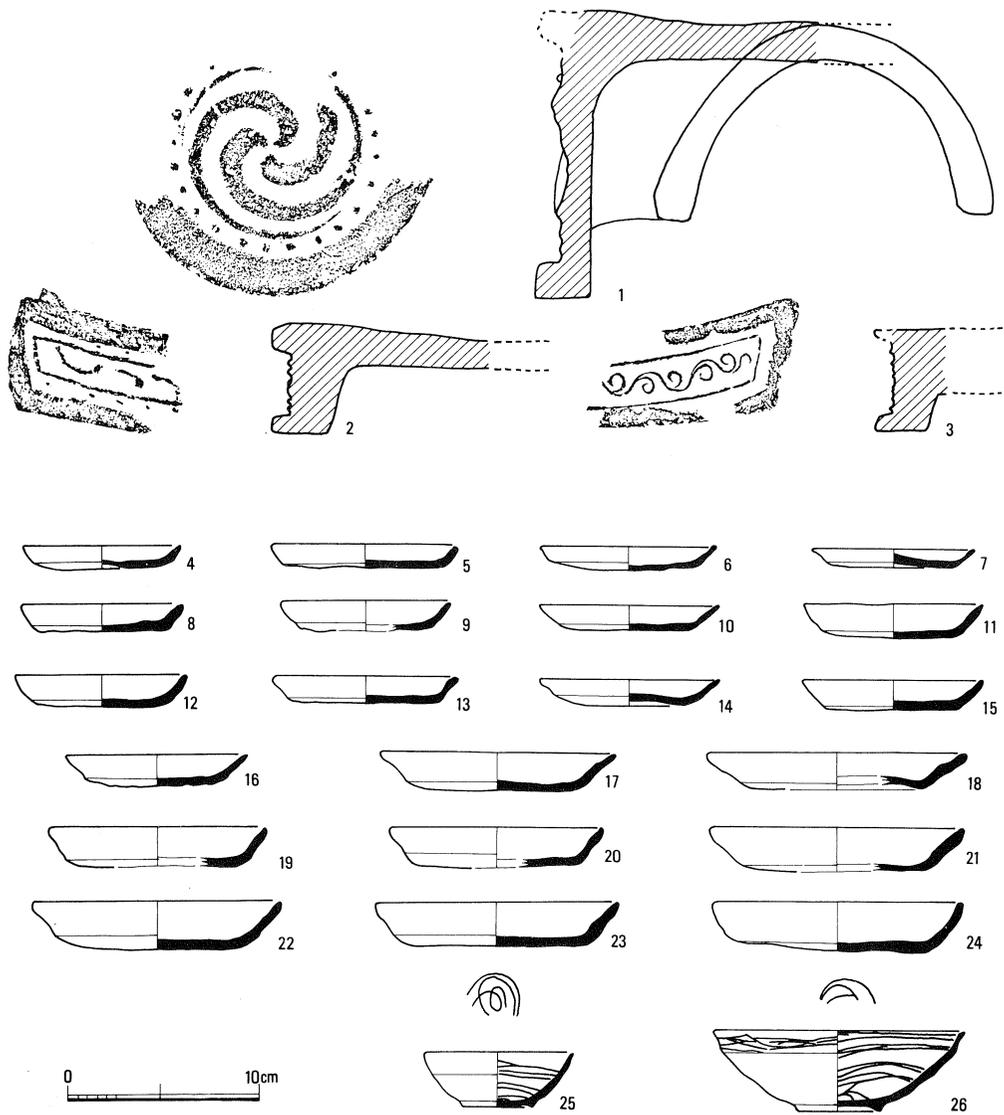
土師器皿、瓦器碗がある。土師器皿には完形で出土したものが数点ある。



1. 黒灰色砂質土
2. 茶褐色土
3. 黄褐色砂質土
4. 暗褐色土
5. 茶褐色土
6. 暗褐色土
7. 暗茶褐色土
8. 明茶褐色土
9. 黄褐色砂礫
10. 黒褐色土
11. 黒褐色砂礫
12. 青灰色砂
13. 灰褐砂礫



第7図 発掘区平面図・堆積土層図(1/50)



第 8 図 出土遺物 (1/4)

土師器皿 (4~24) 平らな底部と外上方に開く口縁部とからなる。大きさによって口径9~10cm、器高1.2~1.6cmのもの、口径1.3cm前後、器高2.4cm前後の大型のものに分けることができる。器壁はやや厚く、内面はなでによって仕上げるが、外面は口縁部をなでによって仕上げるだけで、底部外面の調整は行わない。口縁部外面のなでによって底部との境に稜線がつくものもみられる。色調は赤褐色を呈するものが多く、胎土はやや粗い。

瓦器碗 (25・26) いずれも、内面に簡単な渦巻状の暗文を施し、外面は、口縁部上端をなでで仕上げたのちヘラミガキを施している。高台も断面三角形の簡単なもので、時期的には13世紀後半のものと考えられる。

IV 81-3次調査

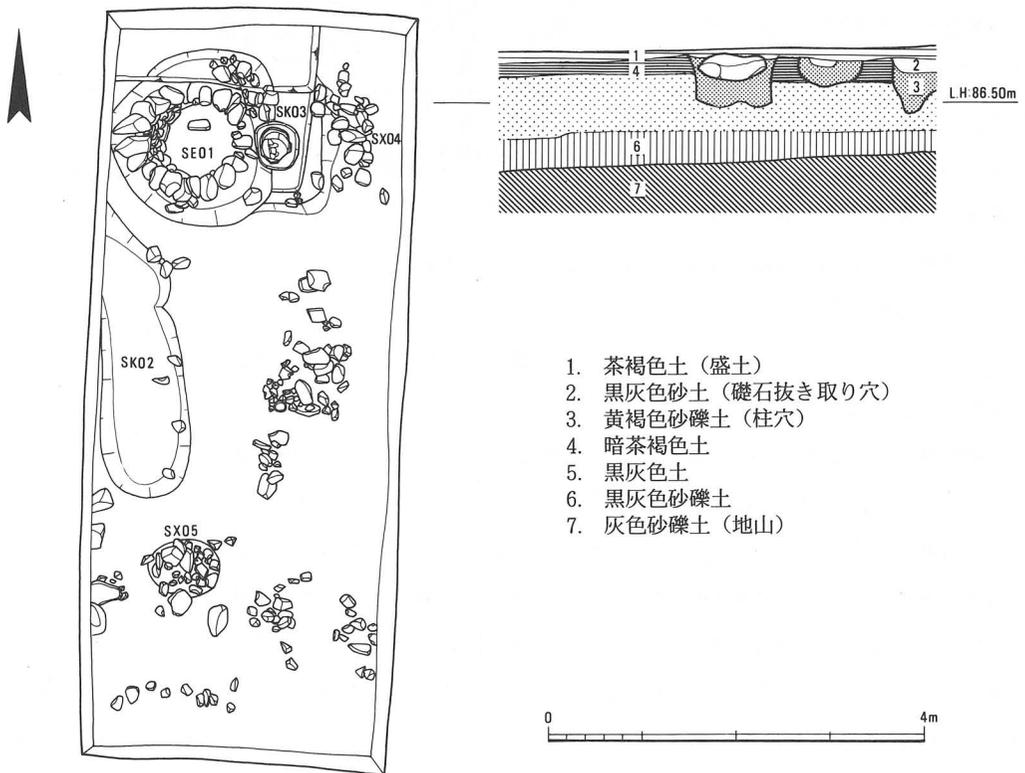
今回の調査は、天理教宇奈道分教会の改築に伴う事前発掘調査として実施した。発掘区は調査地のほぼ中央に東西3m、南北8m(面積24㎡)を設定した。

1. 検出遺構

堆積土層は大きく三層に分けられ、上層は瓦礫を含んだ茶色砂土、茶褐色土、暗茶褐色土で、約30cmにわたって堆積する。中層は黒灰色土で、約60cmにわたって堆積する。下層は黒灰色砂礫土で、約45cmにわたって堆積する。地山は灰色砂礫土層である。

検出した遺構は井戸1基、土塋3、埋甕である。

SE01 発掘区の北側で検出した円形の石組井戸で、人頭大の自然石を10~12段に石積したものである。内径0.8m、深さ1.8mを測る。井戸の掘り方は東西1.7m、南北1.9mを測り、掘り方と石積の間は拳大の自然石によって裏込めしている。井戸は下層から掘り込まれており、埋土から土師器皿、陶磁器が出土した。これらの遺物から近世の井戸と考えられる。



第 9 図 発掘区検出遺構平面図・東壁堆積土層図 (1/80)

SK02 発掘区の西側で検出した東西3.2m、南北1.0m、深さ0.1mの浅い土壇である。土壇の埋土から土師器皿が多量に出土した。

SK03 SK01の東西で検出した南北1.0m、東拾0.4m、深さ0.4mの長方形の土壇である。土壇は下層から掘り込まれている。埋土は黄色粘土層で遺物は含まない。

SX04 SK03の東側で検出した東西0.6m、南北1.0mの石組で石の間から土師器皿、土師器羽釜などが出土した。

SX05 発掘区の南側で検出した円形の掘方(径0.3m)をもつ石組である。石の間から瓦片などが出土した。

埋甕 SK03の上面で検出した瓦質甕で上半部を欠損している。中層から掘り込まれている。

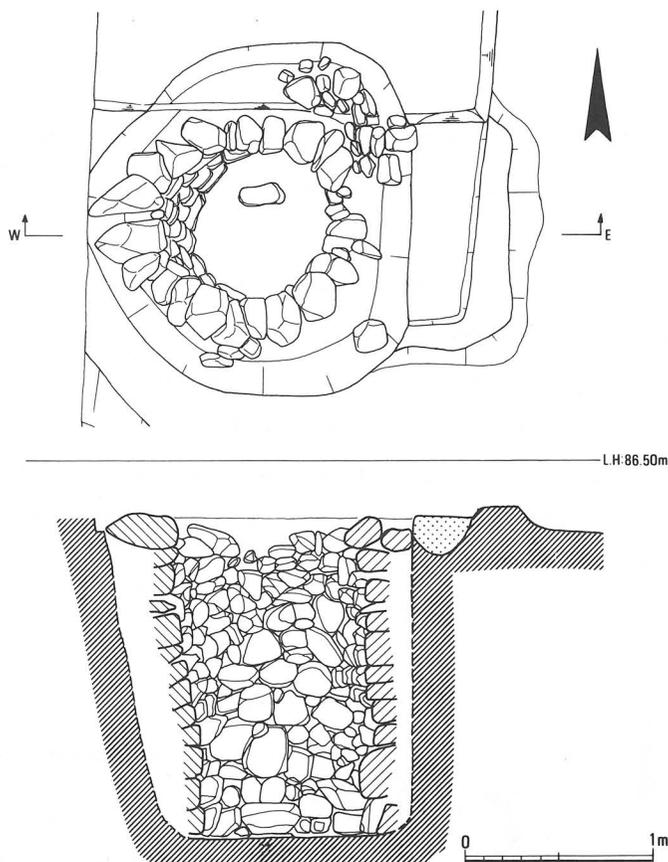
2. 出土遺物

SK02、SX04、SE01、包含層出土遺物について順に記述する。

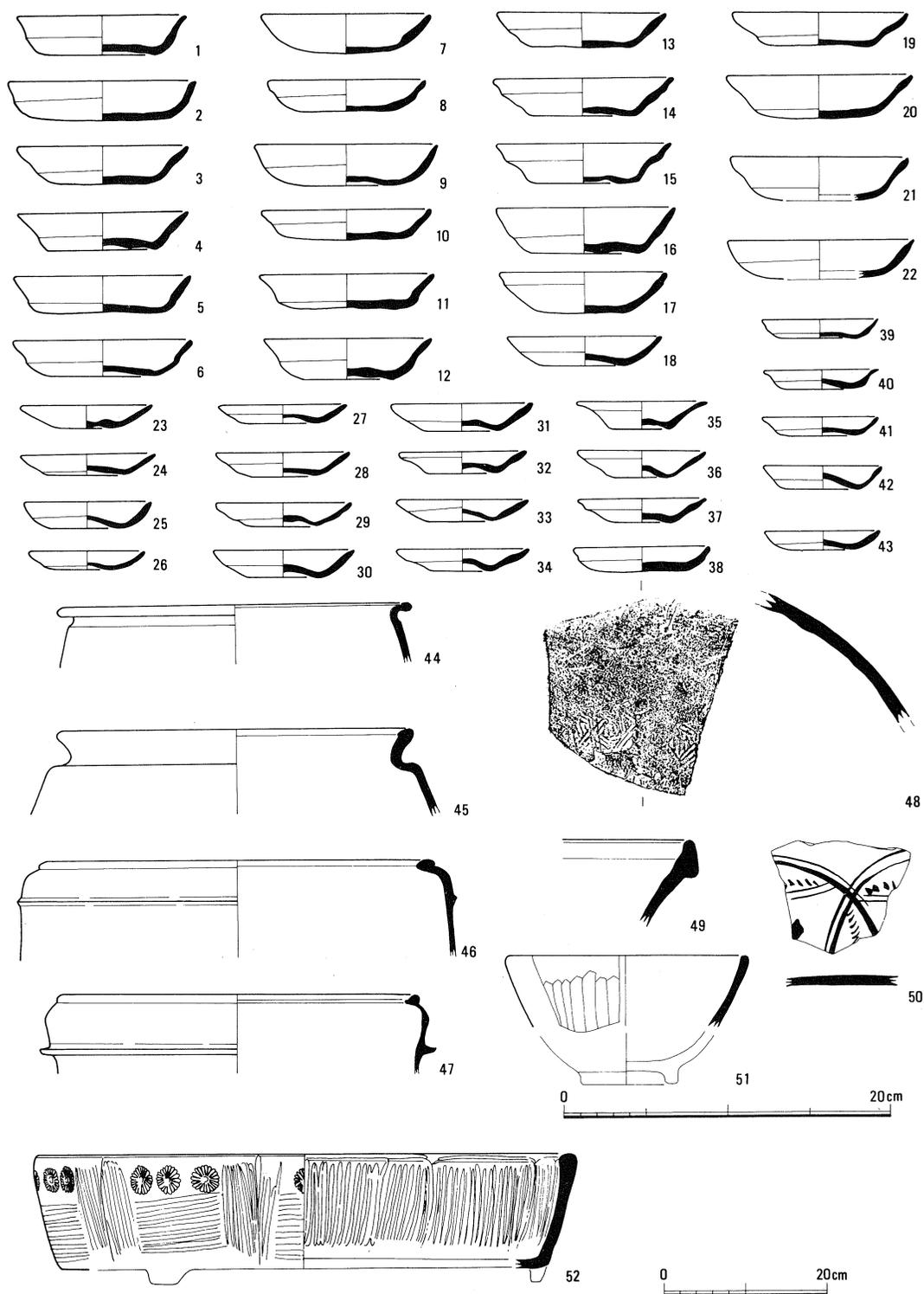
SK02 出土土器 (第11図)

土師器皿(1~43)、土師器鍋(44)、土師器羽釜(45~47)、陶器甕(48)、須恵器鉢(49)、施釉陶器盤(50)、青磁碗(51)などが出土した。

土師器皿は大きさと形態によって、大皿(1~22)、小皿(23~43)に区分できる。また色調が赤褐色、茶褐色を呈する赤褐色系のもの(1~18、23~38)と乳灰色、黄灰色を呈する白色系のもの(19~22、39~43)に区分できる。大皿は口径9.5~11.5m、器高2.0~2.5cmで底部は平底で口縁部は外反し、口縁端部は尖ぎみにおさめる。1~8は口縁部外面上半までよこなで調整する。19~22は口縁部外面下半まで強くよこなで調整する。小皿は口径7.0~8.5cm、器高1.0~1.8cmで、底部は上げ底で口縁部は外反し、口縁端部は尖りぎみにおさめる。口縁部上半までよこなで調整する。44は水平に近く開く口縁部をもち、口縁端部は内側に巻き込む。色調は淡黄褐色を呈する。

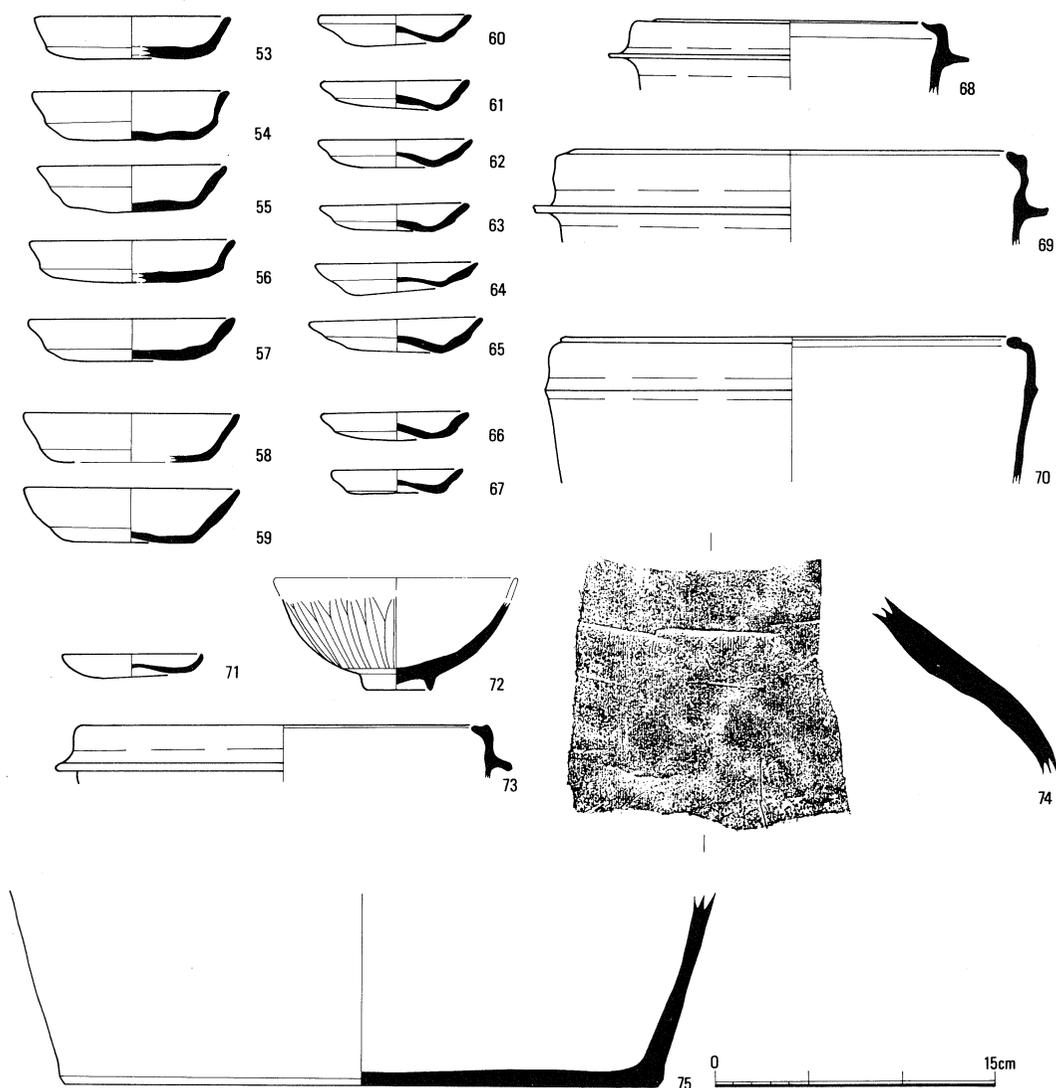


第10図 SE01平面・断面図(1/40)



第 11 图 SK02出土土器 (1~51:1/4、52:1/8)

45は「く」字状に外傾する口縁をもつ。口縁端部は平坦におさめる。色調は黄灰色を呈する。46・47は鐙をもち頸部は直立したのち口縁部を内折させ、口縁部を外側へ折り返す。色調は黄灰色を呈する。47の胴部外面には炭化物が付着する。48は常滑系のもと思われる。49の底部で色調は黄褐色を呈する。胎土中に砂粒を含む。中国福建省泉州窯に類似品がみられる。51は体部外面に蓮華文を配する。龍泉窯系のもと思われる。56は大型の火舎。口径66cm、器高16cmを測る。輪花形につくる。口縁部は直立し、口縁端部は丸くおさめる。体部内外面はへら磨きする。3個単位の菊花文を施す。これらの遺物は15世紀前半のものと考えられる。



第 12 図 SX04・SE01・埋甕出土土器 (1/4)

S X 0 4 出土土器 (第12図)

土師器皿 (53~67)、土師器羽釜 (68~70) が出土した。

土師器皿は S K 0 1 出土のものと同型で赤褐色系 (53~57、60~65) と白色系 (58、59、66、67) に区分できる。大皿 (55~59) は口径10.0cm、器高2.4cm~3.0cmで小皿 (60~67) は口径7.0~10.0cm、器高1.2~2.0cm を測る。68・69は鏝をもつ羽釜形土器で、やや内傾する頸部と直角に近く、短く内折する口縁部をもつ。色調は黄灰色を呈する。70の鏝部は退化し、三角形の断面を残すのみである。色調は黄灰色を呈する。

S E 0 1 出土土器 (第12図)

土師器皿 (71)、土師器羽釜 (73)、青磁碗 (72)、陶器甕 (74) が出土した。

71の底部は上げ底で体部は外反し、口縁端部は尖りぎみにおさめる。口径7.4cm、器高1.2cmで色調は乳灰色を呈する。73は68・69と同型である。72は体部外面に蓮華文に配する。

埋甕 (第12図)

体部上半を欠損する。底部は平底で体部は外反する。色調は黒灰色を呈し、胎土中に砂粒を含む。

包含層出土土器 (第13・14図)

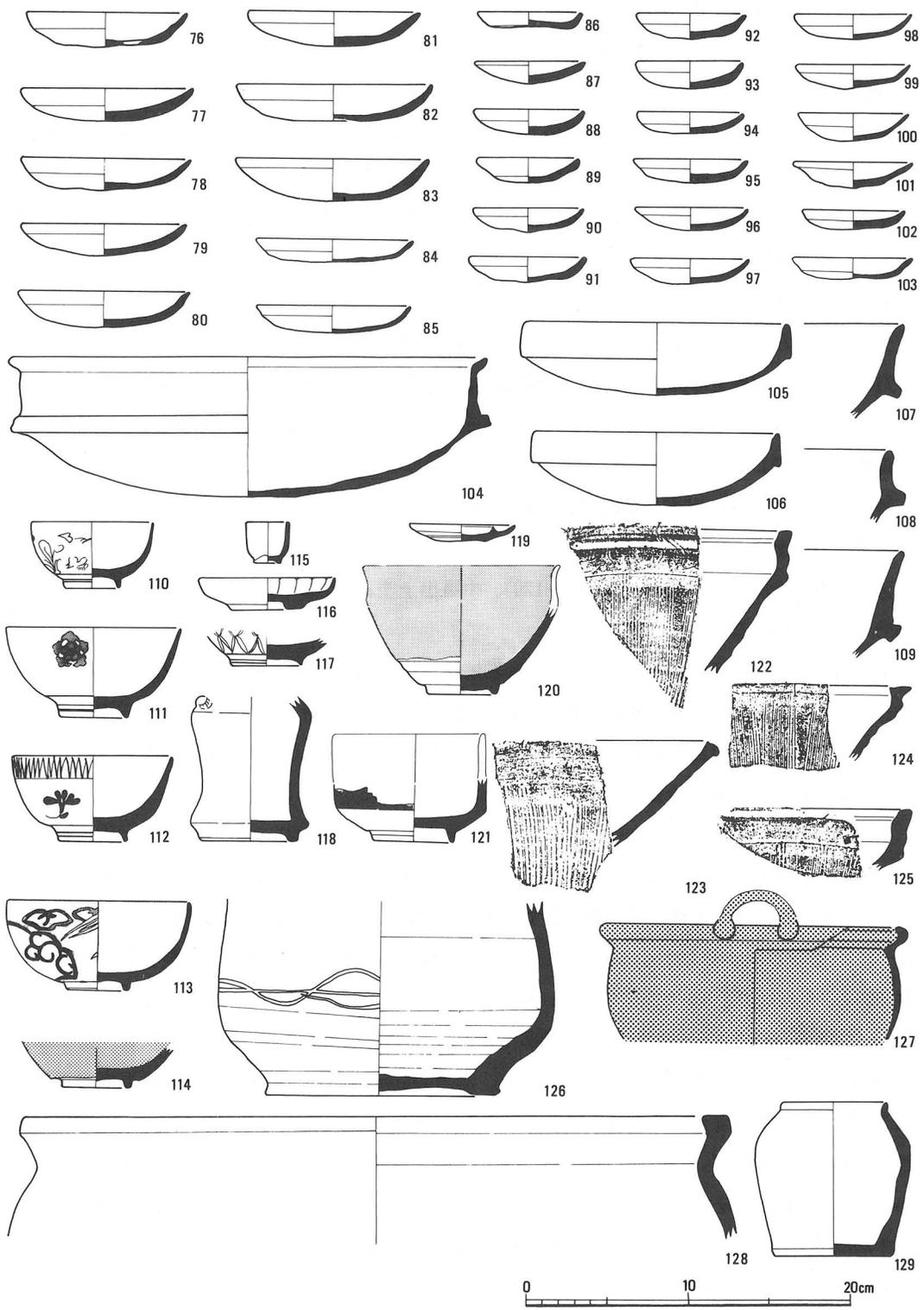
包含層出土土器は上層出土土器 (78~129)、中層出土土器 (130~146)、下層出土土器 (147~165) にわけられる。

上層出土土器 土師器皿 (76~103)、土師器焙烙 (104~109)、磁器碗 (110~112)、色絵陶器碗 (113)、灰釉陶器碗 (114)、磁器小碗 (116)、磁器皿 (116~117)、青磁瓶 (118)、施釉陶器皿 (119)、施釉陶器碗 (120・121)、陶器搗鉢 (122~125)、陶器壺 (126)、施釉陶器壺 (127)、瓦質土器甕 (128)、瓦質土器壺 (129) が出土した。

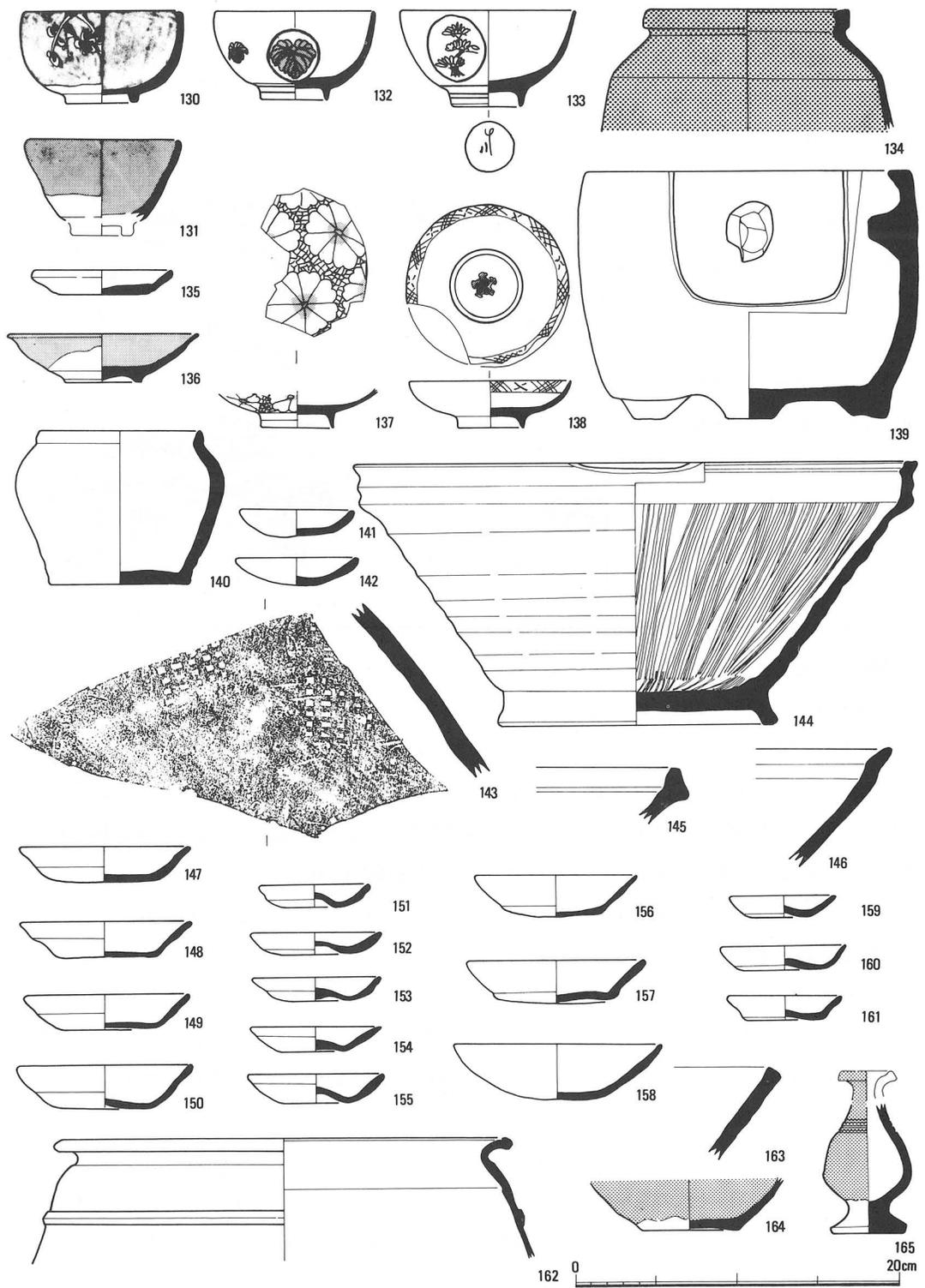
土師器皿は大きさや形態によって大皿 (76~85) と小皿 (86~103) に区分できる。大皿は口径9.5~12.0cm、器高1.4~3.0cmで、底部は丸底で口縁は外反し、口縁端部はやや尖りぎみにおさめる。体部外面上半まで横なで調整を施す。76は底部の1ヶ所に突孔がある。84・85は他の大皿に比べて小型で器壁が薄い。小皿は、口径6.2~7.4cm、器高1.2~1.6cmで、調整手法は大皿と同様である。色調は黄灰色か乳灰色を呈し、胎土はこまかい。104は鏝をもった大型の焙烙 (口径29.0cm、器高8.6cm) である。底部は丸底で頸部は直立し、口縁部を外折する。色調は乳灰色を呈する。

105・106は小型の焙烙で口径17.2~18.0cm、器高4.4cmを測り、鏝はなく底部は丸底で口縁部は上下に器壁が肥厚する。色調は赤褐色を呈する。120は美濃系の天目茶碗と思われる。121は志野系の茶碗と思われる。126は体部外面で3本の沈線で波状文を施す色調は明黄灰色を呈し、胎土中に2~3mmの砂粒を含む。

中層出土土器 色絵陶器 (130)、施釉陶器碗 (131)、磁器碗 (132・133)、施釉陶器壺 (134)、須恵器皿 (135)、施釉陶器皿 (136)、磁器碗 (137)、土製風炉 (139)、瓦質土器壺 (140)、土師器皿 (141・142)、陶器甕 (143)、陶器搗鉢 (144)、須恵器鉢 (145)、瓦質土器鉢 (146) が出土した。



第 13 图 包含層(上層)出土土器(1/4)



第 14 図 包含層(中層・下層)出土土器(1/4)

136の内面の磨滅し、朱が付着している。144は片口をもち、内面に1条8本の播目を施す。体部は外反し口縁部は直立し、口縁端部は平坦におさめる。色調は赤褐色を呈し、胎土中に砂粒を含む。

下層出土土器 土師器皿(147~161)、土師器羽釜(165)、施釉陶器碗(164)が出土した。

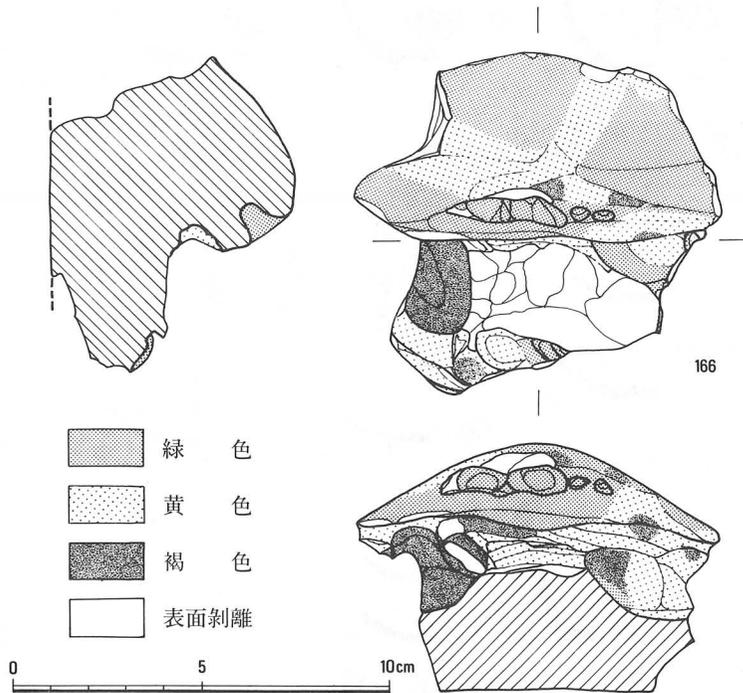
土師器皿は色調が赤褐色、茶褐色を呈する赤褐色系のもと(147~155)と黄灰色、乳灰色を呈す

る白色系のもの(151~161)に区分できる。大きさ形態によって大皿(147~150、156~158)と小皿(151~155、159~161)に区分できる。大皿は口径10.0~13.0cm、器高2.2~3.2cmで底部は平底で口縁部は外反し、口縁端部は丸くおさめる。158の底部は丸底である。147~150は体部上半まで横なで調整を施す。156、157は口縁部下半まで横なで調整を施す。小皿は口径7.0~8.5cm、器高1.4~1.8cmで、底部は平底で口縁部は外反し、口縁端部は丸くおさめる。151、153~155は口縁部上半まで横なで調整を施す。152、159~161は底部外面まで横なで調整を施す。

施釉土製品(第15図) SK02から出土した三彩の土製品。全体の器形が明らかでないため施釉面を表面として以下記述を進める。裏面は平坦で施釉しない。上半部は三角に盛り、側面に四箇所突孔がある。下半部は左右に刳りこみをもち、側面には一条の沈線を施す。上半部表面は淡黄色の透明釉と緑色の釉がかかる。胎土は灰白色で精良である。胎土および施釉の色調から見て、奈良時代のものであろう。

3. まとめ

今回の調査では奈良時代の遺構は検出できず、15世紀前半頃の土堀と近世の井戸を検出したのみである。81-1・2次調査でも奈良時代の遺構は検出しておらず、今後、周辺の調査を重ねることによって奈良時代の東大寺を明らかにせねばなるまい。



第 15 図 SK02 出土施釉陶器 (1/2)



1. 発掘区全景（北から）



2. 発掘区全景（北から）

